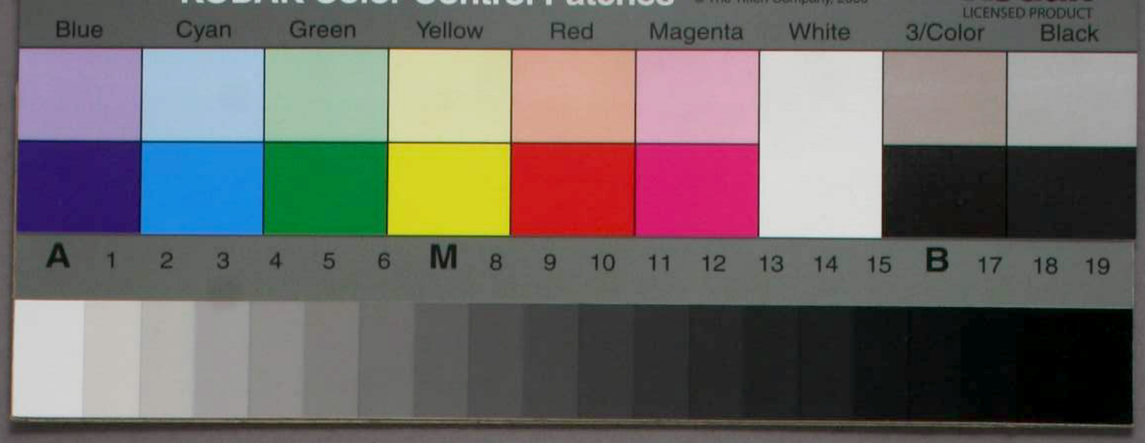
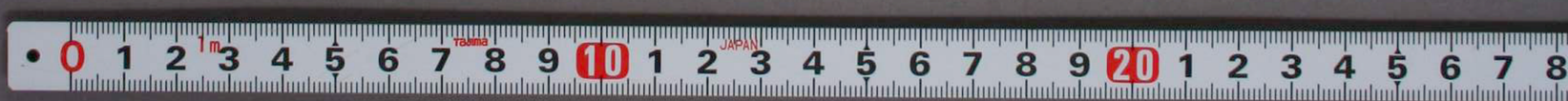

Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
LICENSED PRODUCT
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19


ル 4
8376
1


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8

呂門 ゐ23 1

尾張名所圖會 前編

尾張名所圖會序

尾張之爲邦也北極出地三十有六度則滑緯度之中者也勾芒之送柔風而滋芳芽鶯舌之囀嬌聲而呈富貴繁華之態一ウ南陸之日煽炎熱而

門ル4
3376
巻1

蒸霞蔽峯巒之雲嶂張
蔚密濃翳乍林帷清商乍色
悽愴氣慄烈木蘭之露芳菊
乍英山骨之稜乍而生涙者
況乎旅客羈離者潛其
況乍於暇府乎不者一美奈是
其驗也又其為郡也東西不
異千里程是滑
皇國経度之中者也其應也土
壌乍膏腴田野乍衍沃
神廟之憑隆乎聲林城樓之
翼然乎雲表伽藍乍宏麗而

清淨衆庶ノ殷富闌閑ノ交
易爾乃山ノ奇則實廻一四
一出ノ我矚目乎此ノ愛甚ノ奪
僕畫屏ノ採觚ノ於彼而寫其
錦繡ノ心腸者昉于古人而全
乎今人爲水ノ美ノ堂齋園折

方流而已詩歌其風景ノ所
名區畫幅其勝槩追舊跡ノ
自古不絶其人ノ之ノ觀其畫ノ
或人曰如子之所謂天ノ驗ノ
地ノ應則仲尼稱ノ無ノ
比爲曰然而我輩一ノ證ノ古

ㇾ人物守陣垂而徳閑謝
約華而鎮定ㇾ後茶倫推讓安
節死義ㇾ士及其妾ㇾ驚鳳
其主之文章ㇾ公姑舎而不論
若夫掌握兵権威武以一變
天下辟易萬人於咄嗟叱咤
殲殪勍敵乎一戦ㇾ下ㇾ策之奇
而神速瞬息而成大勲者
六百有餘年ㇾ際而生其ニ曰
源公幕ㇾ府曰豊右閤也
是豈非天ㇾ中ㇾ与ㇾ雲ㇾ所
産而異人ㇾ傑乎哉武人唯ㇾ而

退錄之小為序

天保十二季次辛丑長至

尾張世臣 六十九翁香實深田正韶識

七十翁之 柳澤維賢書

有涯眼窮無涯書而藏書積
有一萬卷專精誦讀年若不
倦或玉持竿漂表人目為蠹魚
治身是一癖也梅居稽查
皇和古今人物自播紳武林至僧
儒隱畸士生辛出雲無一不
明了又觀想宗祖法師為人常
注茶于雲露石風流為衣
好事為嘗余曩以地仙與是
二癖也好書乐与文園等故世
稱兩家二萬卷矣春江自幼善
摹寫縮圖而目所觀之萬物足

所到之百景無收不蓄寫益未嘗
有師天資玄妙寫其微則足以
代衛人而悦遊王可謂剋彫衆
形者又頗錄我屋山水名靈
神洞佛刹縱横幾將無不容躡
之地豈三十癖也瑞齋特名臨池
家工于細字業肇鋒遒動寸錢打
人其抽毫之際不知骸寒苛蚊
雷嗜不雲之道豈四癖也余乃
此四癖猶醫商有玉丹赤青且春
江瑞齋之為人也靈退溫雅實
蓄多珍之雙壁而時照耀

吹以舞四癈歳去歳来爰遵前
編苟完之功此僅編雖周屬稗史
此譬也不出三歳而其撰之精
詳綿密殊覺多少果知玉丹
赤者能奏引之年之效矣嗚呼
夫太平之人而寓太平之象

吾暗室也曩四癈来謀法之儒也何以當之
雖然不應四癈頃之然於是乃
曰卿等而為之易於以齊玉今
錙基与時相待而来吾將乗
勢歟四癈依之余遂為之敷

以觀太平之人豈不大哉一
樂事哉抑々四海舞蹈之力
耶將余敲吹之功耶觀者倏他
日後編之苟義章丑冬十一月
精一居士深田精一併書

深田精三印
深田精一印

尾張名所圖会序

いにしへ國ごとに風土記ふみ書ありて今存の
もの少しかいとのもはらにをいて次、其國ごに
あるまもの物ありけることやうと海山草
なりいはゆる金銀毛羽あるも法毛乃
和物をふ其ものはものはものを
未草多むしにをいてあさち原
川と云ふに志ゐされるを應仁法

出るよ雪こゝろよたゝ
皆う野はてゝ雲一國乃外ともはてく
狩まる夢なくまろ尾張風土記を中將
歌の後尓のこゝとそ其條乃歌失たるを
あの次にをしきまきまかる後おくも
糟一如一乃四人の癖人ゝ此をとも
あけめてえゝもれをる此書ゐ早振
神代尓あるとつほこゝとゝもいはのう川く後

自あ浦て夜そ乃ほくゝ
おちあ尚の社祝のわ
はまゝ西れか乃風土記取ゝ社あゝれ
世法さゝ山無ゝ何ゝ
ゐるこゝゝ母乃世
たるこゝ又なき切
君社ゐゝきゝ
海乃雪よゐもゝく

ほまれはちとせも重ね天のたにそこ
かやうる雪は
ふしくまれ書いうきを法の光とと
なるまぬこんにをおむりくたよとく
てかもむかくいつを上田仲敏

ちるきいこうろ名所圖會といふの
世よおくおそれて乙織りさうろ乃
ほうのおそのもやきくおまして世よをてそや敬わ
さるいまる松きこわあくわの事のさまをも
ゆうよしをも原ふうろりてそくそうる
そのしさいさうろおそひそれおもし

○此書の序次前編八府城小華と起ㇾ　奥田宮小中ㇾ
津嶋社小終ㇾ則当国八郡の中紫智知多海東海西ㇾ
下四郡とゝて前編七巻とㇾ後編八中嶋春日井丹羽葉栗
の上四郡を五巻とㇾ一の宮漸ㇾ犬山を始東終小序づ前
後十二巻とㇾそ其完きをいふす

○當國八地勢坦夷ㇾて山嶽少ㇾく土壌膏腴ㇾて五穀菜蔬
まさゝ奥介小ㇾて名産多く郷里戸口も四隅小達ㇾ古
今の沿革少ㇾからぬ事も當初の聞聲古ㇾて勝地名區も
亦多けれバ中に就て先著明うを出ㇾ恠譚俚語小渉るハさ
省ㇾ又ハ古ㇾもこゝ近の古きことのハ稀小載もㇾ

○神祠梵刹の奥営勧請小新さみㇾて舊説古傳なきことのハ
悉く措て挙ずㇾ又ハ森然ㇾて巨礎高棟なるハまゝ見ㇾ義せ

天保十二年丗十月　　彦村千春書

小祠支院の傳説なきものハもとより登俎せざれ旧傳ある古社古寺の其の脱漏せるも少々称ハ後編落成の後拾遺と擬するふ

○靈場古蹟の其新古の諸説紛擾して一定ざるものハ多く正籍野乘とも參伍錯綜して考據小便ふて

○堯田真清田の神寶大須真福寺の古書籍妙興寺の古書画其餘の神社佛閣小什傳ふる亦多く古器物の其希世の名品ふる又尠からず徳美名馨の傳由まで遺すも汗牛充棟ふて悉く収録ざれバ他日尾張集古一覧毎図縮摹同人物一覧ホの二書を綴ふ其埋没と彰ハ編の羽翼ふる好事家ホ問んと予

○道場法師ガ書ける元興寺ホ殿前ホ和凡長寿楽と舞奏ハ加茂清ホガ朝鮮ホ勇威と振ひしめきの其と図画ホ寫せバ童穉の眼を驚ハしむるホ足ると雖ふる他境ホ事績と尠ハ絶て描ず

○秀吉公微賤の称ホ小竹武ハ爰吉郎と題ハ義朝に贈内大臣あれバ供養の図上に公字と加ふる其ホ倣ふ

○編中に採摘ハ図上ふ配題する所の詩歌連誹當國ハとうとうとも浪りホ似ざるものとて古人ハ他邦の百家とも取ふ附會せざれ必其地ホ實践允當ならんことを勝録す今人のホきハ他境の諸家と雖へども

○図画ハ春江の筆に成るとも或ハ図軸一軌の展観ホ供んすと恐まく諸家とて什ガ一二を補ハしむ故ホ毎図ふ落款一てふと須つまれども他邦の人と借ホわざ

○二十餘年前堯田の深川忠豊契田名所図會を撰んとそを功半ホしてホこたび此編の木に鐫

むことを少てき稿本とも名古屋中に就く真偽ゝ画き
し一圖と義とて共小冊志と遂きしむ左に此圖のミ古人の著
なり其説のごきを明取しそ三四の巻ゝ収めぬ
○編中引用の羣籍古事記旧事紀六國史とそゝり殆ど千餘
小玉ゝも多くハ金文と抄もとれども文の甚きハ要領と撮く
裁截ゝとわりおゝ簡册の多寡ゝ限りわゝと斟酌ゝるふ
ゝゝり

尾張名所圖會巻之一

目録　愛智郡

廣井の官倉に貢茶と納る圖
國號澁鰕
赤深衛門馬津驛舎に宿圖
那古野古城
御宮舞樂圖
龜尾天王社　別當安養寺
芭蕉翁の古事
清正普請場址
烏犀圓店
紫川
阿弥陀寺
地理疆界
愛智郡鮮
府城
名古屋府
神武天皇東征圖
信秀城中ゝ矢狹間と切開圖
御祭禮全圖
名古屋山三宅址
櫻天滿宮　道唐碑
福生院
柳藥師
若宮八幡宮
牲高院
御旅所
廣小路
朝日神明宮
若宮祭の圖
朝鮮人應荅の圖
御宮　別當尊壽院　神主吉見氏
魚棚賑合
天王祭片端試樂
將軍家御靈屋
伊藤呉服店
花井臼古事
驛馬會所　十一屋店
植木市　三藏圓店　大九屋店
覺正寺
木佛涅槃會の圖

極樂寺　大光院
總見寺　闍山和尚の古事
大須真福寺　馬の塔の圖
善篤寺　淨久寺
二子山の古跡　妙善寺
延廣寺　東輪寺
稻荷社　大泉寺
闇森八幡宮　古渡橋
元興寺　道場法師の傳

烏瑟沙摩明王緣日參の圖
清壽院　那古野山
七ツ寺　同境内茶屋の圖
光真寺　西本願寺掛所
日置八幡宮　千本松
犬御堂　古渡
洞仙寺　南方鎭
川口屋飴店　神森
為朝塚

知止

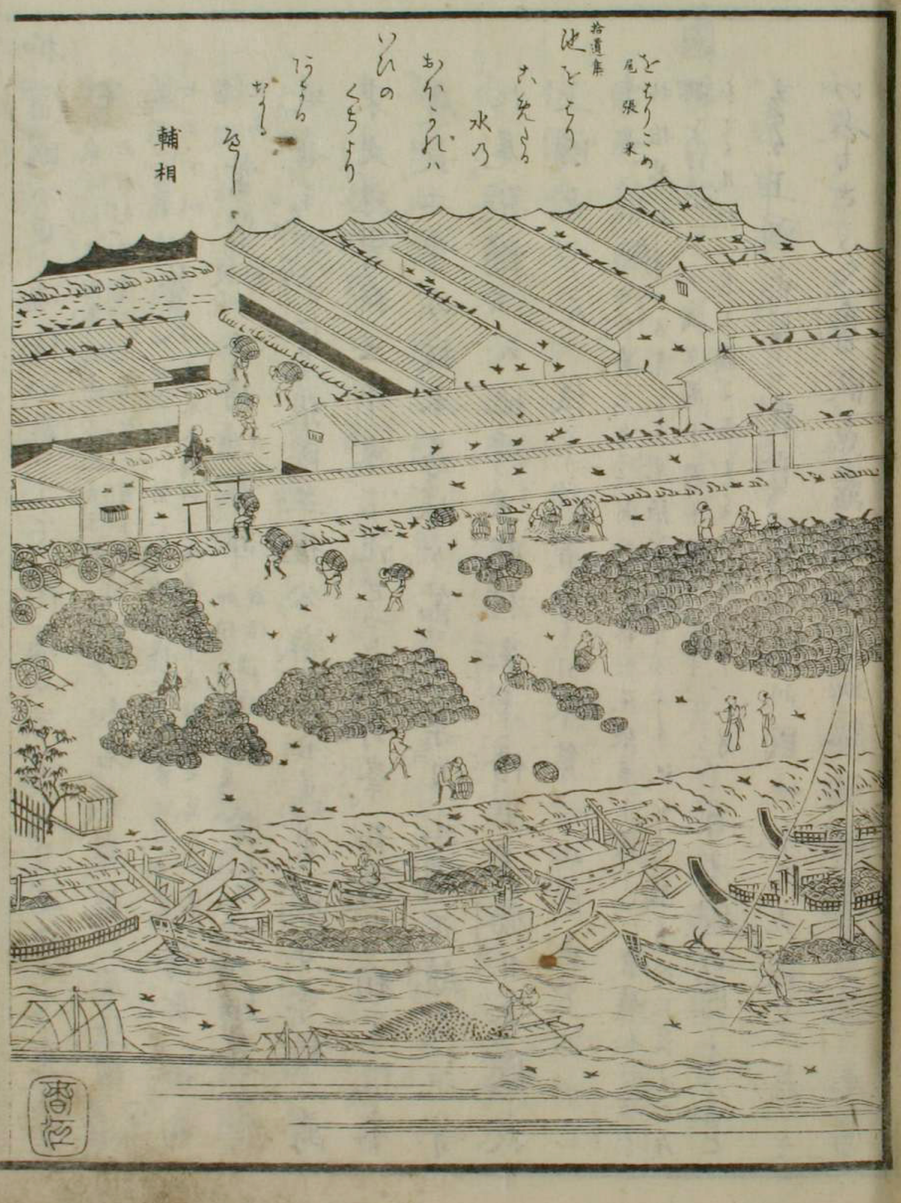
有圖無解似圖無此
解詳而有此圖展玩
初知一帙裡宛然八
郡舊名區

魯菴石川嘉貞題
迂菴丹羽輔之書

廣井宮倉に貢米を納る図

太閤秀吉公小田原北条退治の時尾張の國を織田信雄公加勢つかまつり兵粮の貯へなくて用途欠乏つかまつり福島正則公もの時其先駆にあらく救百間代大うく蔵三棟を清洲の城内に作りて多くの兵粮を納めをく其年十五年御遷府の時を清洲の三ツ蔵と成廣井こゝろ一多くの兵粮を作りをく故つゝと いへども其蔵名こゝろ〳〵今にあるぞ三の蔵と成べき



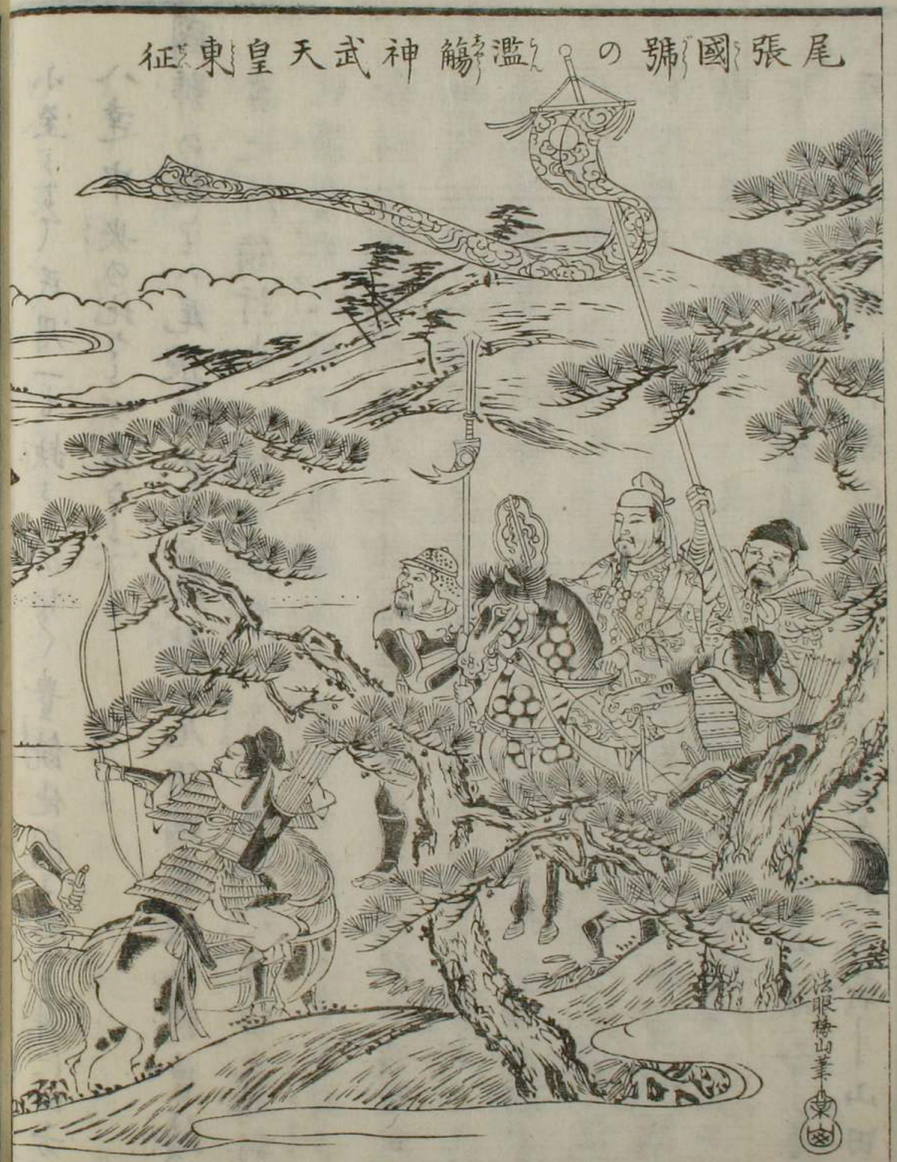


抑當國ハ東海道小屬シテ南海ヨ依ヲ大日本のうち東西の半 東ハ松前蝦夷に至りて三百余里 西ハ大隅薩摩に至りて三百余里よりり和名類聚抄に尾張國 國府在中島郡行程上七日下四日 管八田六千八百二十町七段三百十歩正公各二十萬七千東雜稲七萬二千束 海部 河知 中島 奈加 葉栗 波久利 丹羽 迩波 春部 加須我倍 山田 夜萬太 愛智 阿伊知 知多 ノ名ノ内ノ萬延喜主税式に尾張國正税公廨各廿萬束國分寺料二萬束文珠會料二千束ノ汎セヲ又丹峯和尚ガ類聚往来慶長二年の板本易林ガ節用集日本國正統圖記等に尾張國云地厚土肥種生千倍里多勝日本國大上國也ノ後ノ北書モ日本第一上國也ト記ゼリ類聚三代格の仁壽三年六月八日の格に尾張居上國トいい官職秘抄職原抄拾芥抄等の古書モ尾張ヲ上國ナルヨシ記セル八職員令に法ヨの廣狹ヲはかりて大國上國中國下國ヲ分ケる尾張ハ其上國ニ居ルガ故ナリ

ゆゑに上國也なり褒賞ヒトしきりニ翕獣魚鼈材木器皿錦繡綿布其餘の萬物小至ルまで民用一モ缺ルことのなく豊饒他國ヨ勝ヲ殊に四方八達中央の地ナルガ故ナルベシ

國號の起ヲハ尾張風土記の殘缺に尾張國者經世穗曽績古之所領行也 神日本磐余彦天皇 神武天皇 東征之時討伏湯貴首人歸化之場海部佩室臣奉射 天皇天種子命以三角石弓及玉太羽矢射殺佩室臣討終於海部氏姓因此號其國謂於波里乃國謂尾張者音之訛也ト云ヒ尾張國號の濫觴ヲ又惺窩先生のかける職原抄ノ頭書小 日本武征東夷而還於尾張所帯之劔在熱田熟田明神是此劔本自大蛇之尾張出劔也此劔留此國故曰尾張國ト云ヒ又凡ソ新治今治小治 字書ヨ墾治也ト云リ起ヲる地名ニて今の春日井郡小針村ハ國の中央ニかたりて延喜式ヨ載ル山田

尾張國鯱の濫觴神武天皇東征





家集春くてハ
柿本人麿
とろ
ふるさとにふをさ
所ふかくとるとく
のかりんと思いなて
いさとふさるるか
てえのかぬふ月さ
二つわるるとくて
いと春なきこうして
ふくさあるそにおの
たあるほくれ名を
よみる
ふるさとにふをさ
所ふかくとるとく
のかりんと思いなて
いさとふさるるか
てえのかぬふ月さ
二つわるるとくて
いと春なきこうして
ふくさあるそにおの
たあるほくれ名を
よみる
家集春くてハ
柿本人麿
とろ

郡 武衛斯波氏領國の時山田郡とやゝ春日井郡にもせて一郡とも尾張神社ゝ鎮座ある地なるを
も當國の田圃を墾そめ一本土なるべしさまバ皇居の本土より起て日本を大倭國と称せごとく王郷の小針よと呼そめて墾開よりもる名なるんこうさざうぬど今古き諸説をも並べ挙る次贅して云く参考ある方知多郡にて赤の尾北もく海へ出る所を名つけしもいふ赤丸ごとき説し

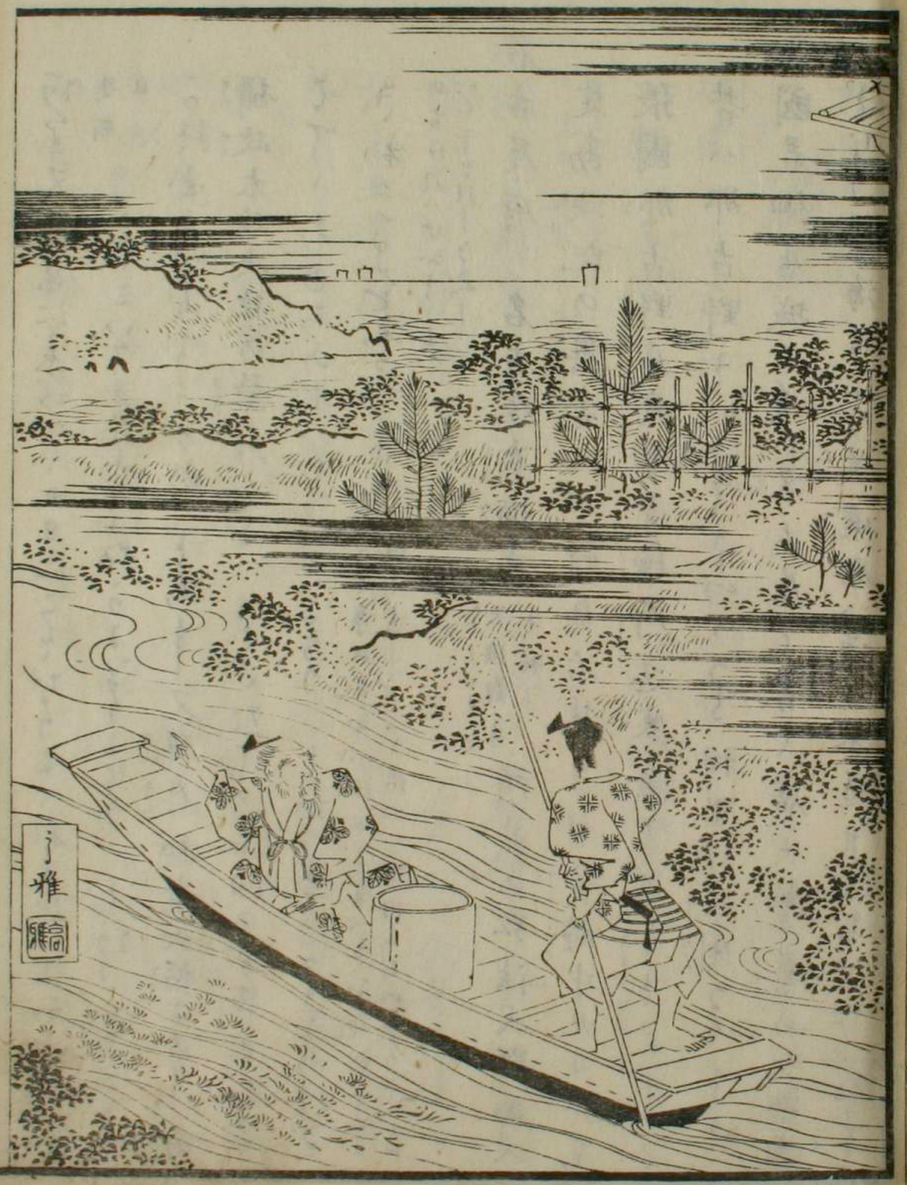
愛智郡

愛智郡ハ國のうち東南の地にてうくハ文字も定らず日本書紀の神代巻に吾湯市同紀の 景行天皇紀及び萬葉和歌集に年魚市古事記に相津 今の学者相の字の假名たがへりといふ 日本靈異記に阿育知本朝文粋ゝ阿育寛平の熱田縁起に阿由知ゝさまぐにかけり今ゝ文字ハ續日本紀の和銅二年五月庚申の記を始とし日本後紀三代實録類聚國史

延喜式和名抄等ゝ古書ごとに愛智と記せる郡と記せるハ
物の湧出をいふ古語にて榮華物語に血あえさせ給い源
氏物語ゝあせにのゝらさわぐ田を墾に便よるより故とも田のほゆるごと
称せしなり萬葉集に
人者挹云時自久曽人者飲云挹人之無間之如飲人之不
時之如吾妹子尓吾戀良久波已時毛無 ゝゝ新撰姓
氏録に小治田宿祢石上同祖 欽明天皇御代依墾開小
治田鮎田賜小治田大連ゝ又赤染衛門家集に尾張
へ下ゝ云ゝうめづしゝ所にゝ夜うやゝふぎてすゝむよ粉ぐれふをのこぬるとばりのうくおさごほを仰
もぐゝべいやうなるおいくをにおさへまるぞよふ 沖
なる此水いくゝやめうむさゝるゝ人のくあり

赤染衛門馬津の驛舎に宿る図





行と又同集に示ぞ〳〵九日にこそなりよりしといひてかみ　尾張守大江匡衡朝臣

こやこいそ〳〵ふたゝめのよりうらう　とうとう

この外ふよりうらうこの歌　とも

攝政太政大臣の詠れたる

さてもわもちの水ハあらいまきあるるをもるべし　小沼田と書しごとく治田と沼田とあやまりしるの古けれバなるべし

名古屋府　名古屋真福寺　大須觀音と称す　所蔵の弘法大師御入定勘決記の奥書に于時貞治第三暦黄鐘中九日於尾張國那古野庄安養寺壇所忍寒氣書焉　と見えたり

昔ハ那古野とかきてうづうる村里ハ庄園うりしが國君御居城の後ハ名古屋と書て廣大繁華の一都會となり東海道より美濃路へ通る本道其うちをつゝぬきて

熱田の突出町より下小田井の松原町まで三里が程街衢立ちつゞき工商軒をならべ西國北國の諸侯方參府帰國の往還ほゝ京江戸上下の旅客常にさかりなり

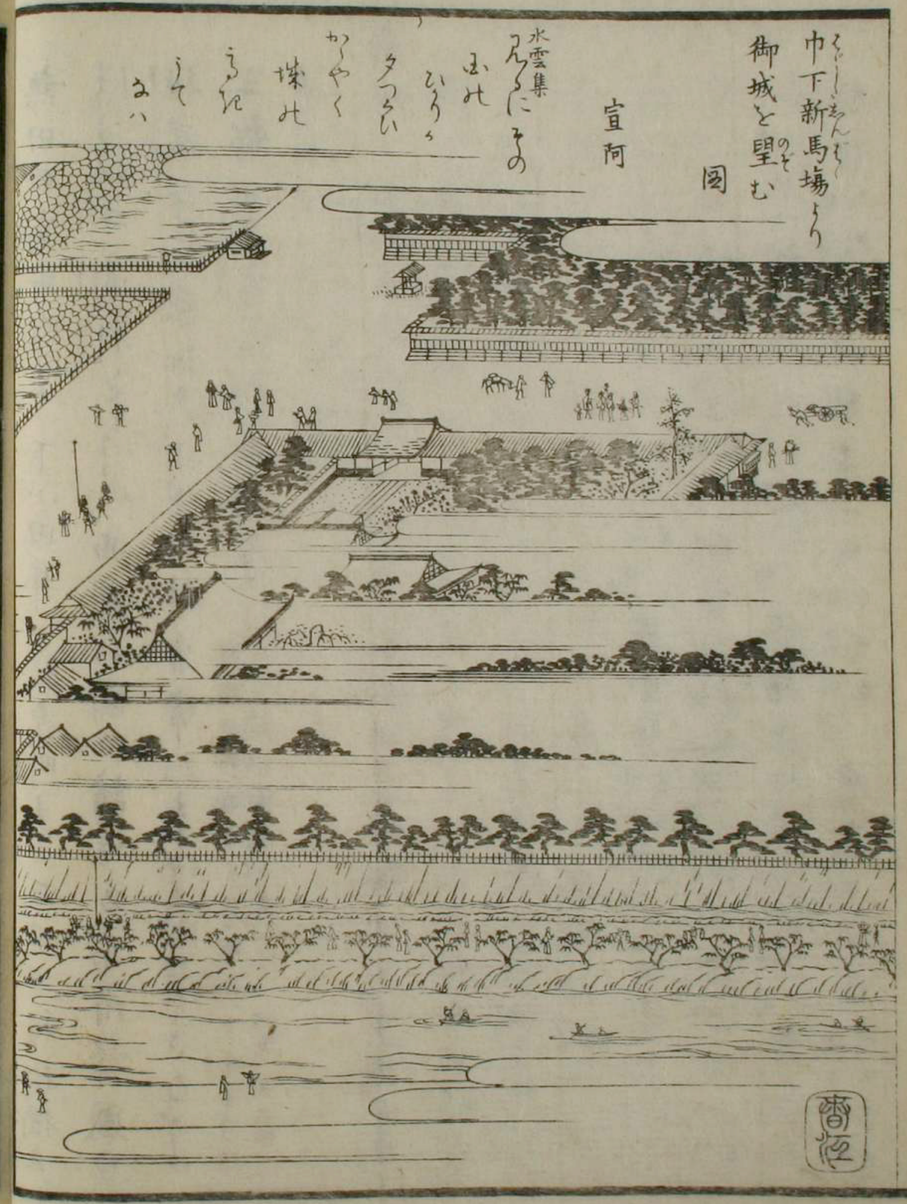
三都ある劣らね名府なり　春日井郡より尾張國名古屋の総名なり

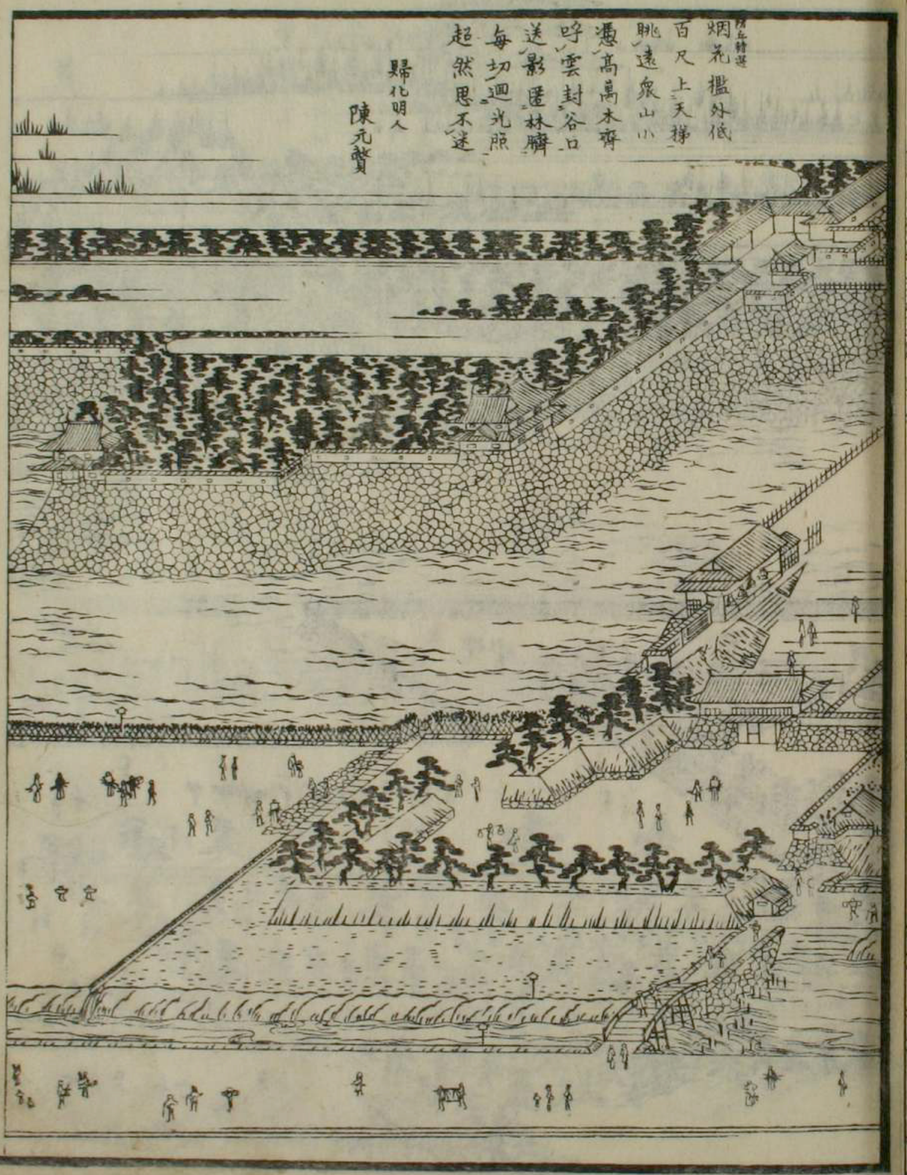
府城　足利家の連枝尾張守高経の子孫斯波氏當國の守護なりしより春日井郡清須小ありしを二百餘年ぬ後慶長十五年清須の舊城を廢して此名古屋ぬ新城を御營築有りしバ　東照宮ぬ仰を奉じて西國北國の諸侯二十人加賀侯　松平筑前守利光　筑後侯　田中筑後守忠政　肥前侯　鍋嶋信濃守勝茂　筑前侯　黒田筑前守長政　豊前侯　羽柴越中守興廣　豊後高田侯　竹中伊豆守重門　肥前唐津侯　寺澤志摩守堅高　豊後佐伯侯　毛利伊勢守高政　豊後臼杵侯　稲葉紀伊守通孝　豊後日出侯　木下右衛門大夫延俊　飛驒高山侯　金森出雲守可重

中下新馬場より御城を望む圖

宣阿

水雲集





和名抄選

烟花檻外低
百尺上天樓
眺遠衆山小
憑高喬木齊
呼雲封谷口
送影暹林臍
每切迴光照
超然思不迷

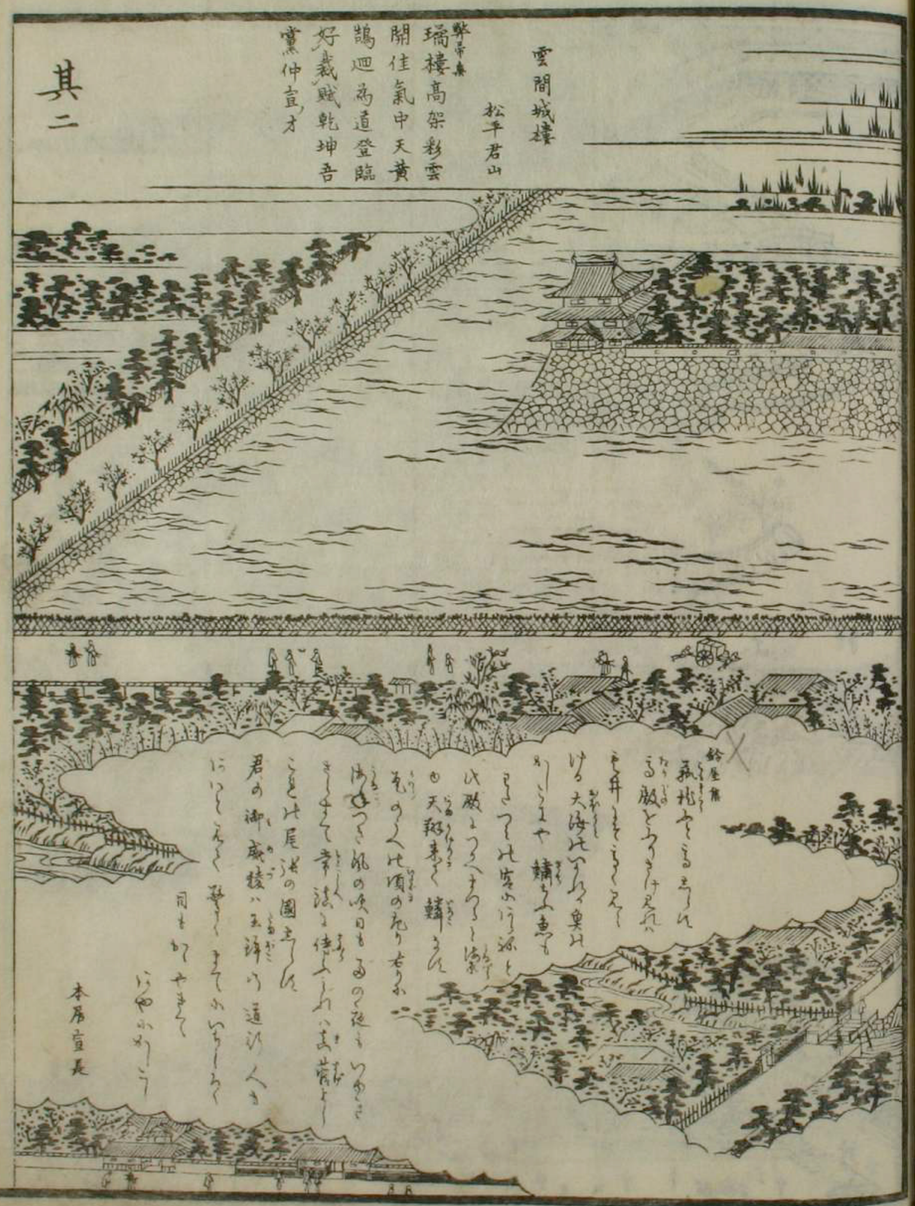
歸化明人
陳元賛

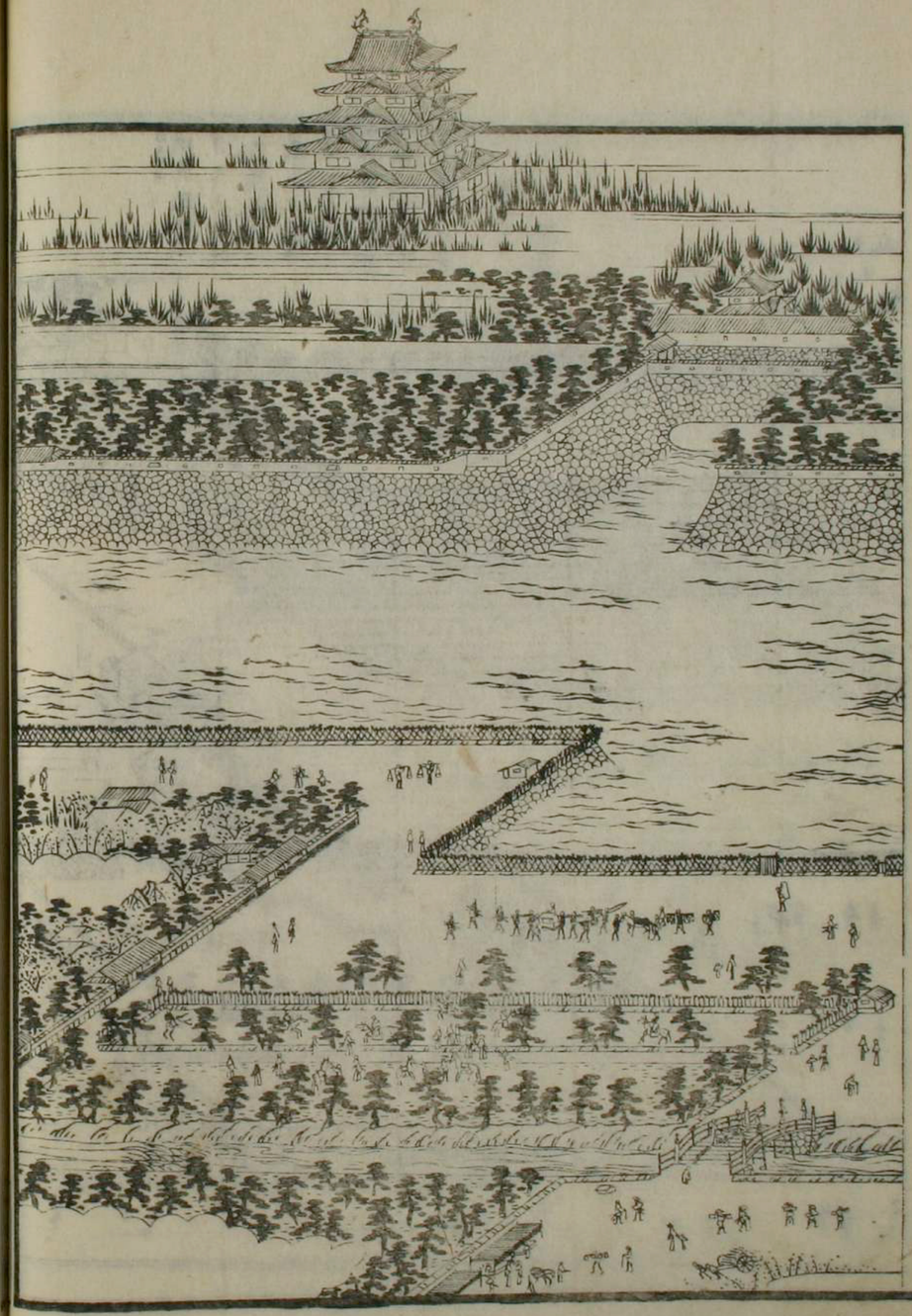
其二

雲間城樓

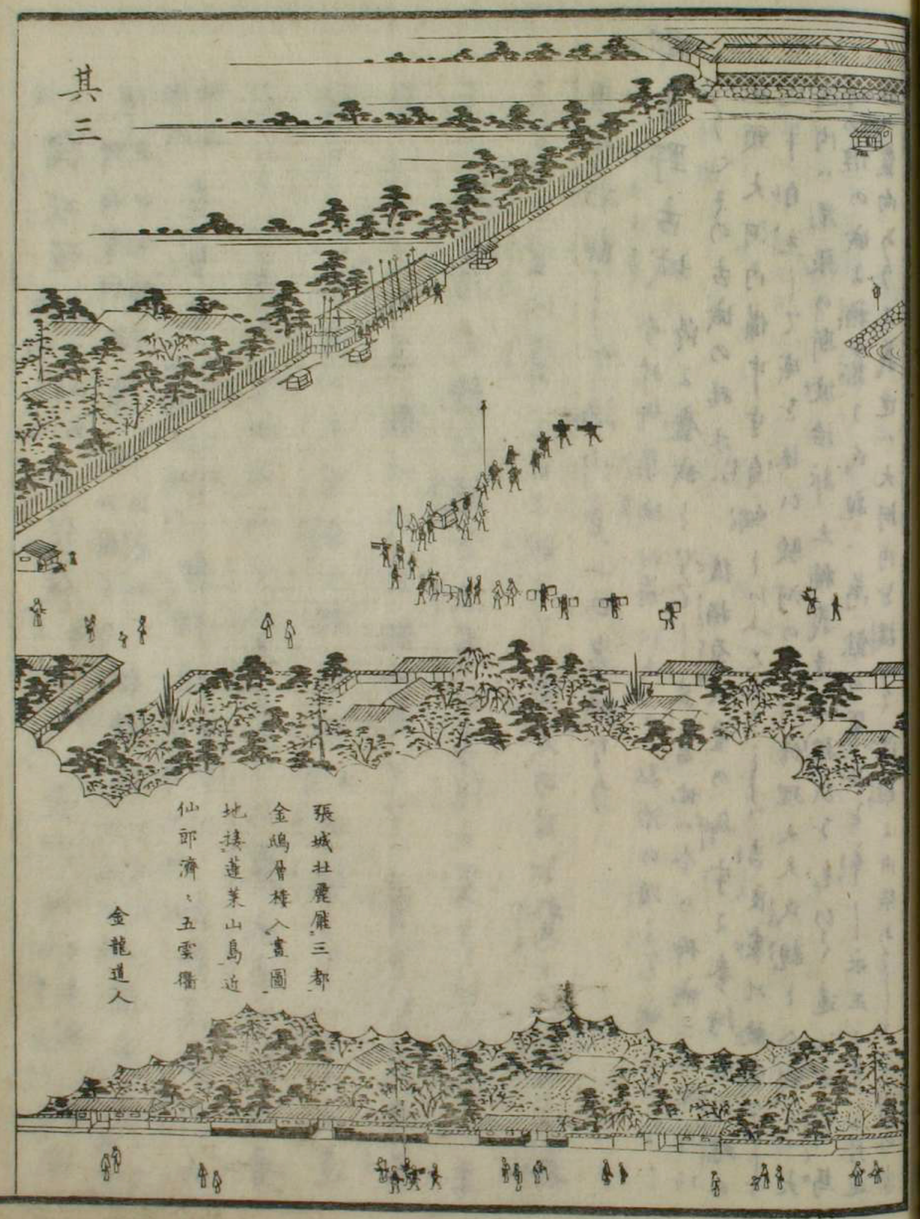
松平君山

瑞樓高架彩雲開佳氣中天黃鵠迴為道登臨好處賦乾坤吾黨仲宣才



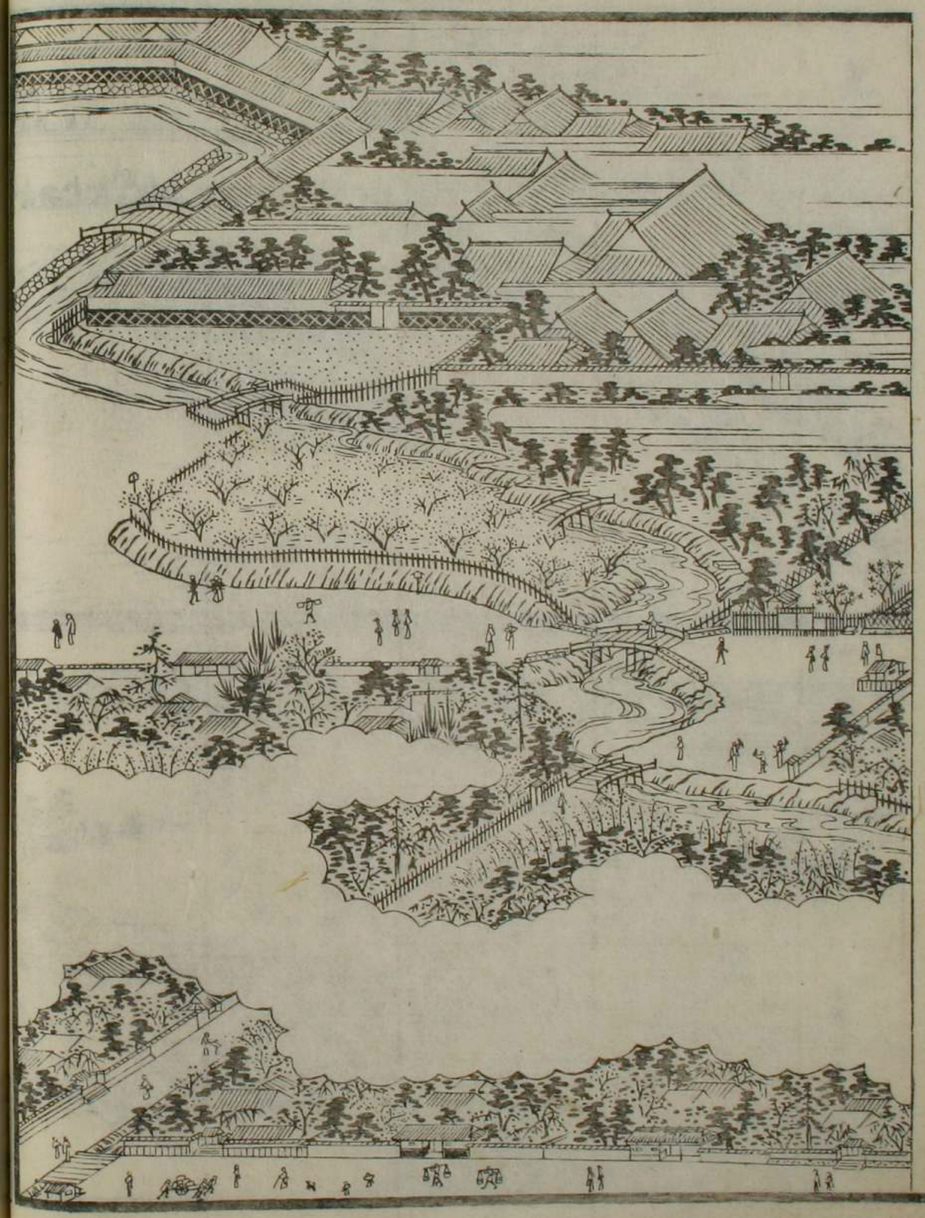


其三



張城杜麓雁三都
金鳩骨雄人畫圖
地接蓬萊山島近
仙郎濟ゝ五雲儔

金龍道人



讃岐侯 生駒左近大夫正俊　土佐侯 山内土佐守忠義　長門侯 松平長門守秀就　阿波侯 蜂須賀阿波守至鎮　伊豫侯 加藤左馬助嘉明　肥後侯 加藤肥後守清正　播磨侯 池田三左衛門輝政　安藝侯 福嶋左衛門大夫正則　紀伊侯 浅野紀伊守幸長　知行高總計六百三十八萬七千四百五十八石三斗の衆大力を以て普請せ〻れ五重の天守閣ハ肥後侯清正所望して一手を以て營なつ〻高數十丈碧銅の瓦を以〻葺きかさね黄金を上層のあ場ゟ置きけるが今に至るまで空に聳え日ゟ映して衆人の目を驚ゟ實ゟ無双の壯觀にて海内第一の名城なり

那古野古城

今ハ御築城以前にありて弘治の頃ゟ城ともなくなりこ〻其舊地ハ今の御城二の丸の地頭大河内備中守貞綱近年自立して城を振ひ駿河の今川修理大夫氏親と合戦す大河内ハ尾張の斯波治部太輔義達ゟ援ひを乞ひ遠江の引馬（今の濱松の城ゟ稍近し）に移り又義達ハ大河内と謀けて深く出張ありしが今川の家臣朝比奈十郎泰以が為に敗軍す同十一年三月大河内重ねて引馬を取めんと又尾張へ出馬を請ひしかば義達勇み進発して大河内ゟ共ゟ引馬に籠城ありし氏親又三万ゟ兵ゟて同年六月城を取まき攻撃けるに八月十九日終に落城して大河内貞綱其弟臣海新左衛門尉道綱以下千餘人討死して義達ハ降人となり普濟寺ゟ入て剃髪して法心と改め向後駿河ゟ對して弓を引まじきむね起請文を書めてぞ尾張へ帰國ありける大永の事なりかくて義達ハ隠居して家督ハ子治部太輔義統ゟ譲りて末子左馬助氏豊ゟ那古野ゟ城を譲ゟれ氏親尾張の那古野ゟ入きと雖も清須（斯波義統の居城也）の押へとなりぬるゟ海東郡勝幡の城主織田弾正忠信秀（清須三奉行の一人）今川氏豊ゟ共ゟ連歌と好みて互ゟに贈答せしが或時小田井川の洪水ゟ使者過ちて連歌の懐紙と入きおゝしき其後ハ互ゟ會合して東西隔ての文箱と流失させしゟあら家本意ゟら事に思ひ信秀那古野の城中に至り一間の居所を乞ひ得て五三日或ハ十日程づゝ逗留して連歌茶湯ゟして打ち解ける事深し今川の家臣ゟ本丸に向いて窓と切開きしゟ大樹覆いる柳の丸のみ〻容人ゟして有るゟ御館ゟ矢狭間と切ゟうそ心得ねとゟ申しゟ信秀滞留あらまほしく思ひ氏豊聞入き次ゟ限ゟて別心ハあらじとて互ゟに誓詞を書めて更にもてなしけるが或ハ三月十日信秀俄ゟ大病と偽ゟ清須勝幡の家人を呼び集めそりめきゝを夜ゟ入ゟて今市場の方ゟ火事ありて城中さわぎ立ゟ始ゟ若宮社天王天永寺安養寺に火かゟりて火の子を城へ吹つけしゟり城の東南の方ゟり勝幡の兵士ゟ取置の城主織田丹波守と調ひ合せ鯨波と造ゟて攻寄せしゟに柳の丸ゟも関の声を合せて火と放ち内外ゟりせめけるバ今川の家士不意の夜討に我ゟ負て皆討死す氏豊ハ纔師寺刑部丞を以て助命を乞い毋方の縁と便ゟに上京しぬ信秀ハ計略を以て城に移ゟるゟが天文三年吉法師丸（信長の誕生

信秀那古野の城中に
矢狭間と切開図





の翌年南の方古渡に新城を築きて信秀引移り那古野ハ信長の居城
となり―同廿三年七月十二日清須の家臣織田彦五郎信友斯波義統を
弑して猶清須よわり―と聞て其城へうつり那古野ハ信長の叔父孫三郎信光の居城と
なり―其年九月廿六日信光もまた其家臣坂井孫八郎に弑せられて
明き城となり―を林佐渡守信勝の信長に叛心ありて信長より追ひ―後那古野合戦記
長手記同守津の山記遠山信春が怨見記木村高敦ら續武家閒談尾陽雜
記臨凡あまよろづ考畧抄―て見とるべし

東照宮御宮 御郭内の三の丸より御鎮座

國祖源敬公大僧正天海 號南光坊 を請待―のい元和五年己未九月十七日此御宮を創建―ありて
中央よ 贈太政大臣正一位源朝臣家康公の御神像を
安置―奉り左よ山王權現右よ日光權現を配享―給
へり○御本社南向 祭文殿 渡殿 中門 瑞籬 御供所 鐘樓 神輿
殿 御寶藏 御井 鳥居 樓門 行きも善美をつくし―玄ハ朱彩
丹青を施―又ハ金銀銅錢を鏤め莊嚴の美麗いふばかりなし
う―○御本地堂 某師及び脇士三菩薩十二神將四天王の像を安置ス 護摩堂 不動及び四天の木像十二天

の画像を安置ス 御神寶 御太刀三口國行正恒宗近又敷仙の色紙三十六枚ハ青蓮院法親王の御筆うり又牛王一顆けり 其外數多けり 板拳よ追ひ添ばうよ畧す 御祭禮ハ毎年四月十五日三基也 神輿を
文殿へ渡―神供を奉り十六日神饌を調進―早朝よ舞
樂を奏す同夜 御神前よて社僧論議ありて後車樂及び町ごの數ヶ所
供を奉り罪人行赦の義ありて十七日曉よ御
を引渡―ゆくして 神輿三基也廣町よ 頓宮 御旅所へ
神幸まします 神主騎馬 社僧 神輿 未寺の僧十人騎馬 御城下十
社の神主まて供奉―警蹕の官士前よ二騎後に二騎其
餘徒行の諸官人よりまて四千余人よりて善美華
麗をつくすのゆゑ厳重端正ひとしからず 神輿の前よハ樂人歩行
うる行粧なり 神輿通御の御道すぢよハ両側よ竹矢来を結ひて往
来を禁じ家ごとよ濯掃して砥のごとく矢のごと

三の丸
御宮の圖

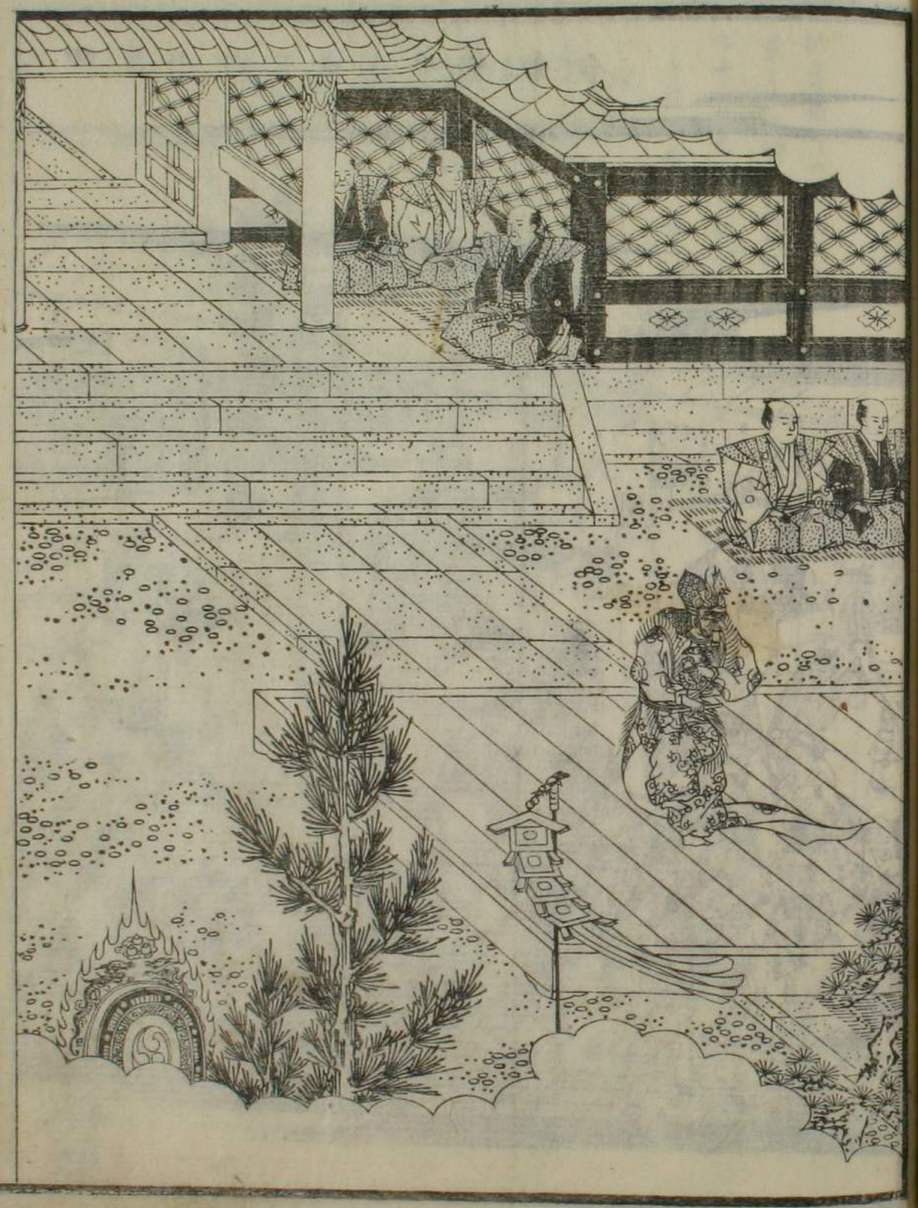
前

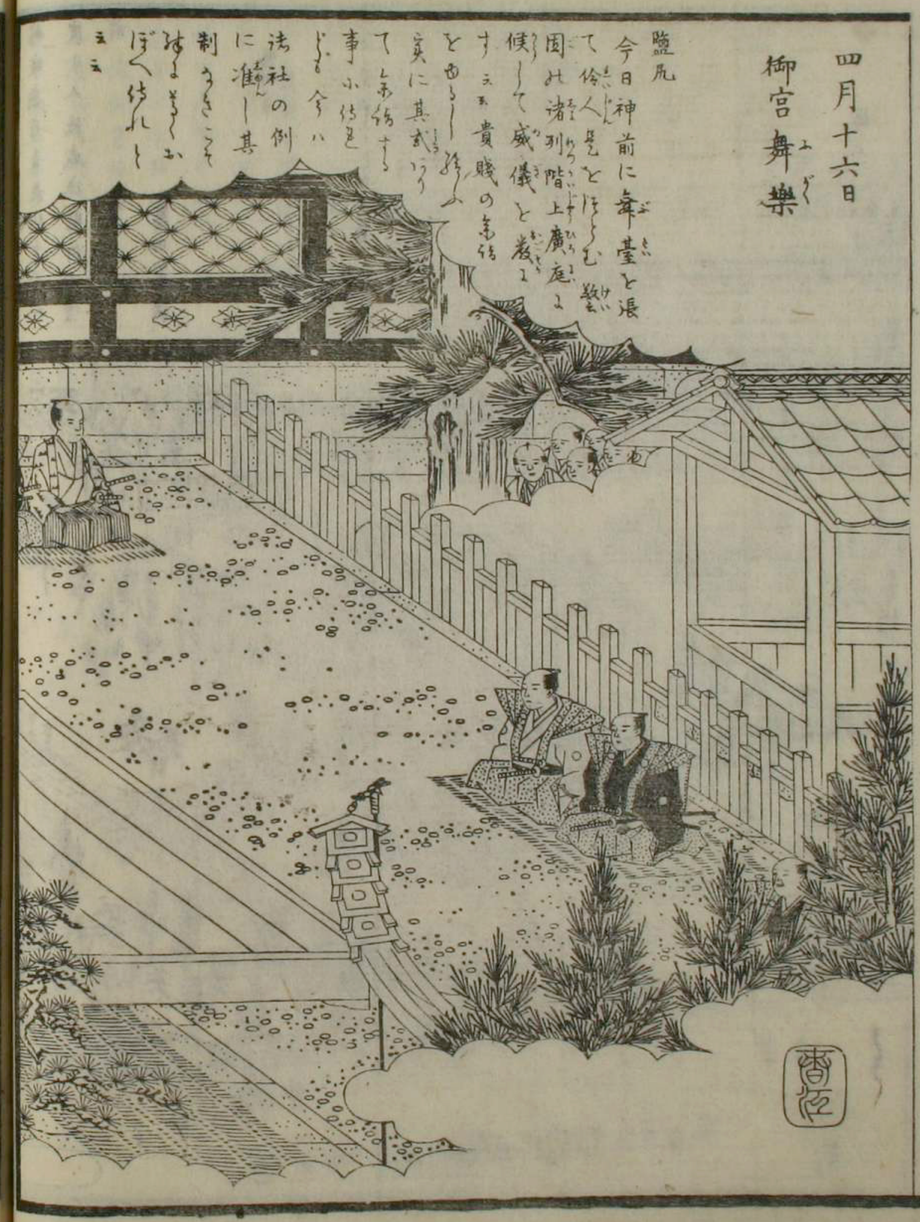
攝_寢廟丹青慶祠宮祭祀
度小人敦_威德_瞻仰石壇

恩田蕙樓

曠野集
奥の細道
一日
東照宮に到_着_
雲のゐ近き_慈_あり大_悲_
還_座_執事_法_華
八講_はじめ_ける
_そ_の_ひ_と_ひ_
_殊_に_よ_ろ_こ_ん_で
_市_人_の_心_を
_な_る_る_哉_
_い_く_ば_
_む_し_
_こ_ろ_
_め_
越人

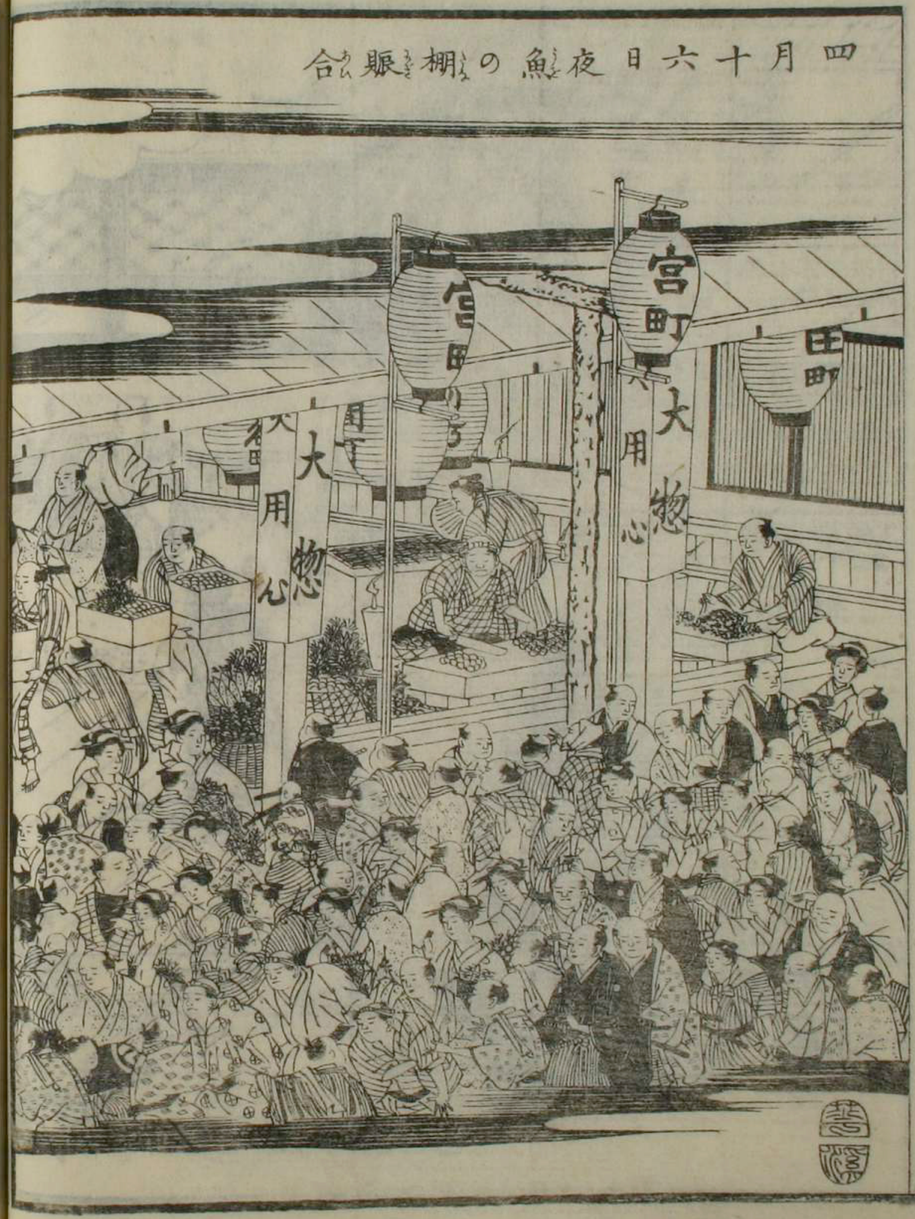
四月十六日
御宮舞樂





臨凡
今日神前に舞臺を設て伶人見とほしむ數
囲れ諸列階上廣庭よ
候して威儀と卷
すゑ貴賤の差
をあらはす
実に其式
て差別する
事ふ仕
ど今ハ
法社の例
に遵ひ其
制をさまる
ぼく仕れ

四月十六日夜魚の棚賑合





式を數町の者両側共家ごとに御祭禮附町ごの女嘗重詰と製すそほひ燈と張り燭と耀して見物共輩集ハ老弱男女僧俗まに引もきらず徹夜共賑合ことと勝るそ

夜もくる
年ゆくる
奥のくる
黄山

大道もさかゝ磨ける鏡の面よ似るとお例の桟敷よ幕と張と屏風とゝ立毛繧繝なゞくまきて拝見の男女貴賤が長ゝゝおもひくゝふ華美と競へるも太平のさまゝて神徳のかゝるけるき弥増しぬ神輿還幸ゝゝ後ハ寂ゞゝよ我後ゝゝ矢来と取拂ひ店くのかざりを本へ復るありさまも又おなじ諸人老弱男女步ゝ群つゝ往来挟ゝ押合ふ賑合まで神恩の餘澤ゝて昇平の瑞象上下万歳と謳ふ慶びいやゝ尊くぞ覚もる猶御祭禮の首尾次序等委ゝき事ハ画図小譲ゝくゝよ略す画者筆力ハ精詳細密至まり盡せるを見る人思ひを潜め心を留ゝゝ

天長山尊壽院神宮寺 御宮の別當なり

台宗なゝ寛永四年神宮寺ゝ号け叡山の珠祐權僧正をゝく別當ゝゝ山門の日蔵院及ひ當國春日井郡野田村の醫王山密蔵院を兼帶ゝ上乗院ゝ名のゝゝ其後世ゝ僧正に任ゝ尊壽院を通称ゝす

神主吉見氏 もゝめ京都の人ゝて岡崎左近菅原直勝ゝいひゝ勅にゝて改めゝ吉見宮内太輔幸勝ゝ号ゝ正五位下小叙ゝ代ゝ神主職ゝゝ

将軍家御代々御霊屋 御宮の西隣ゝ

亀尾天王社 御宮の東隣ゝ鎮座 醍醐天皇ゝ延喜十一年三月十六日勅よゝて此地ゝ鎮座あゝゝゝ當社縁起よゝゝゝ天文元年三月十一日那古野合戦の兵火よ焼亡ゝゝゝゝゝ同八年再ひ造立ゝ慶長十五年御城御営築の時御郭内にゝゝゝゝ為他ゝ遷さゝむゝの議定ゝゝゝゝゝ

四月十七日
御祭禮全圖

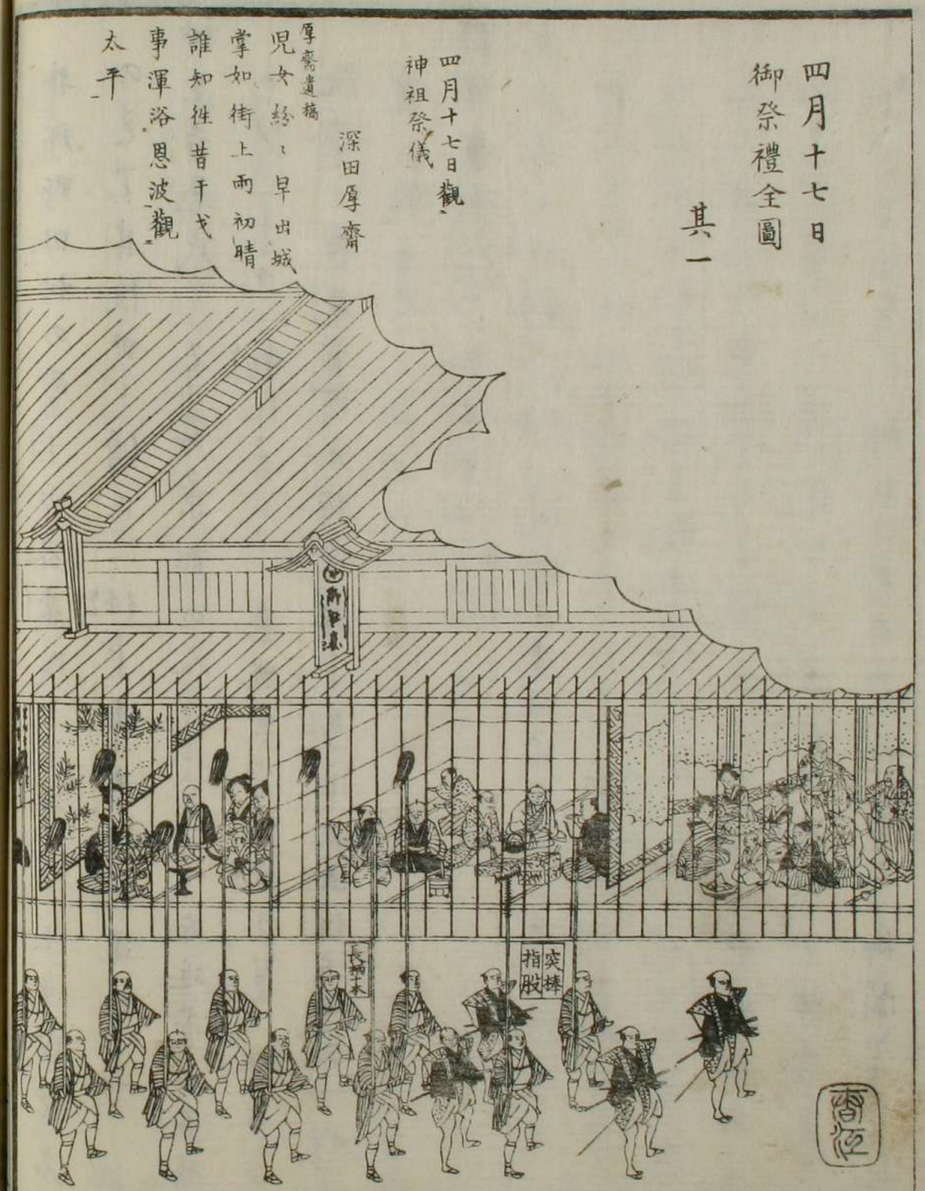
其一

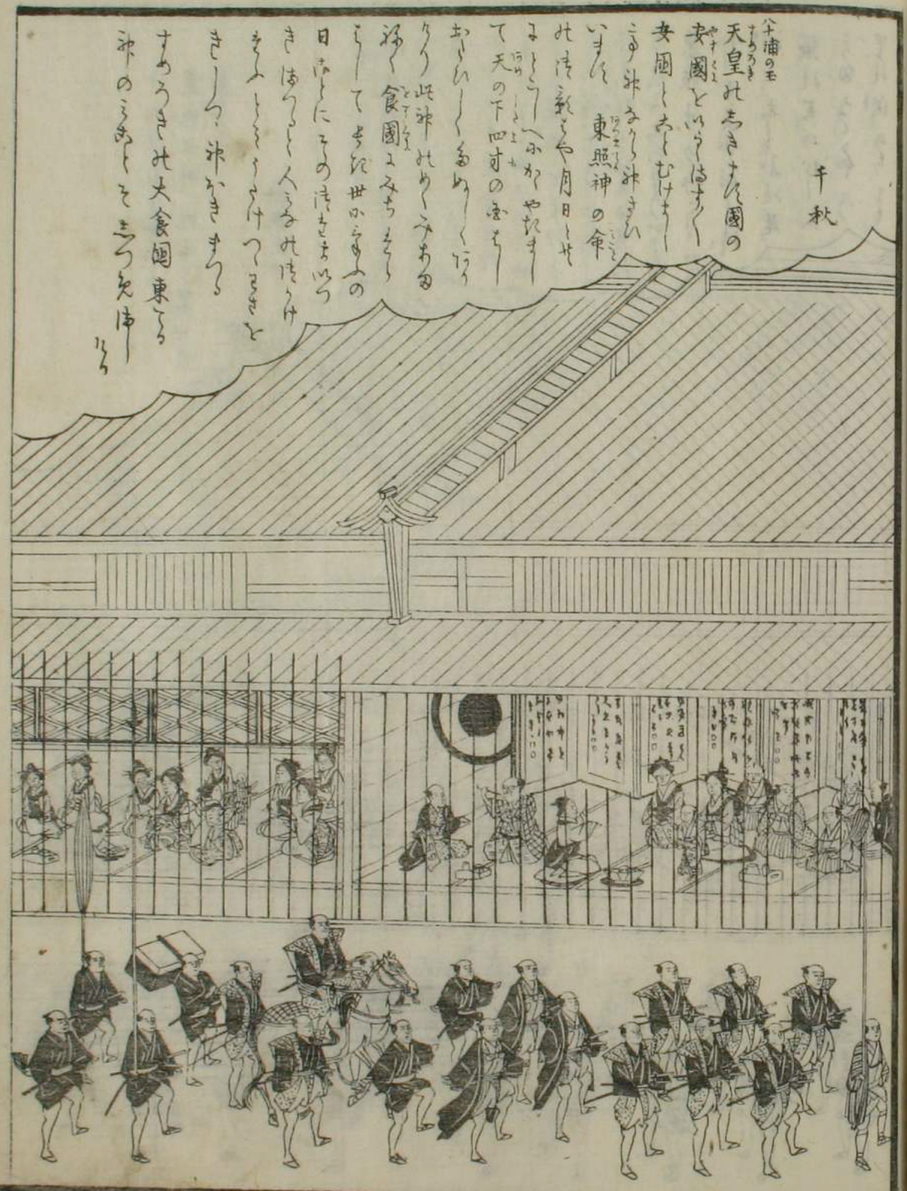
四月十七日觀
神祖祭儀

深田厚齋

厚齋遺稿

児女総て早出城
掌如街上雨初晴
誰知往昔干戈
事渾浴恩波觀
太平





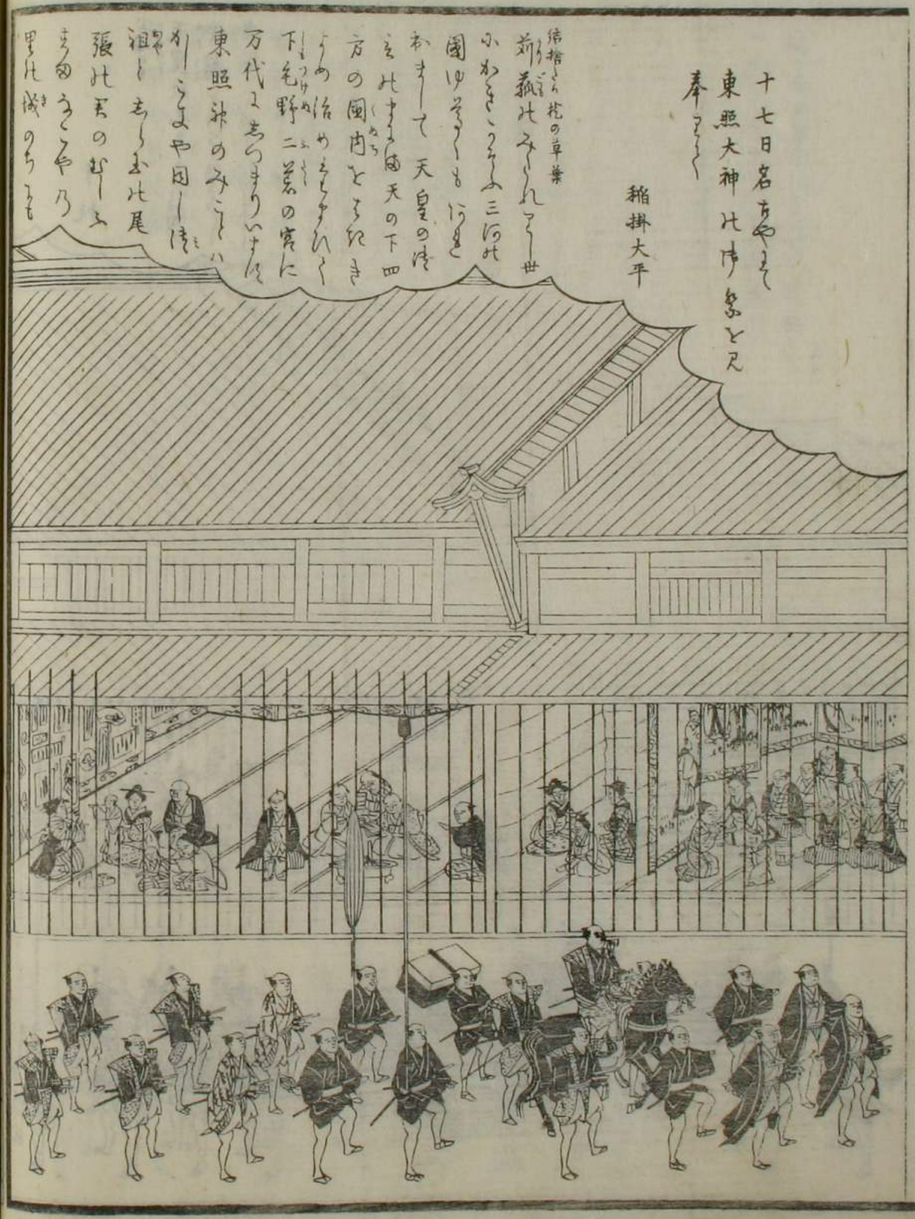
千秋

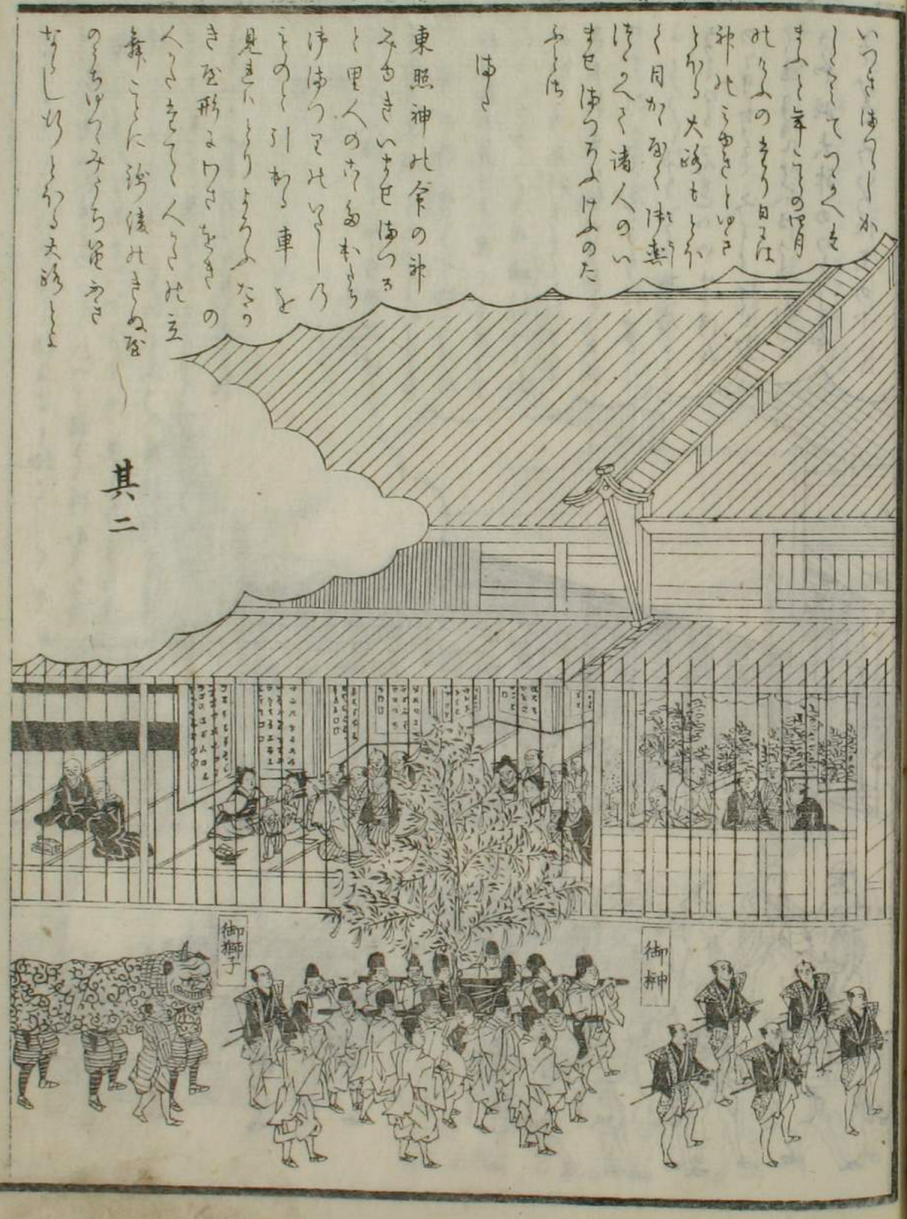
八十浦の
天皇はしきよき國の
安國とゐうはすゝ
安國しとむけよ
こゝ神ゐうゐ神ゐい
ます　東照神の命
はしきよき月日しせ
よとこゝへかやすて
て天の下四方のまも
おらひしくるめりくゐう
ゐう此神はめしゝゐる
ゐゝ食國ゑもちそゝ
らして安泥世からゑの
日ゐにそのきをゐろ
きはらるゝ人ゑれはうけ
そゑゝゝうけつゝきを
きしゝ神かきまる
すめうきは大食國東ゝ
神のうゐしをゝゐ神
ゝゐ

十七日名ある
東照大神社御祭礼
奉ㇾ送ㇾ

稲掛大平

結搭ㇾ花の草葉
苅葛社みくれて一世
ふかきこゝろみ三河の
国ゆそゝもけき
おまして 天皇の
をせさする国天の下四
方の国内をとゝのへ
うの治めをさめたまひ
下毛野二荒の宮に
万代よろづまでいはひ
東照神のみこゝハ
かりこもや国しほ
沼とゝもふ社是
張社其のむ一ふ
まで匂ふこゝ乎乃
里社滅のちも





其二

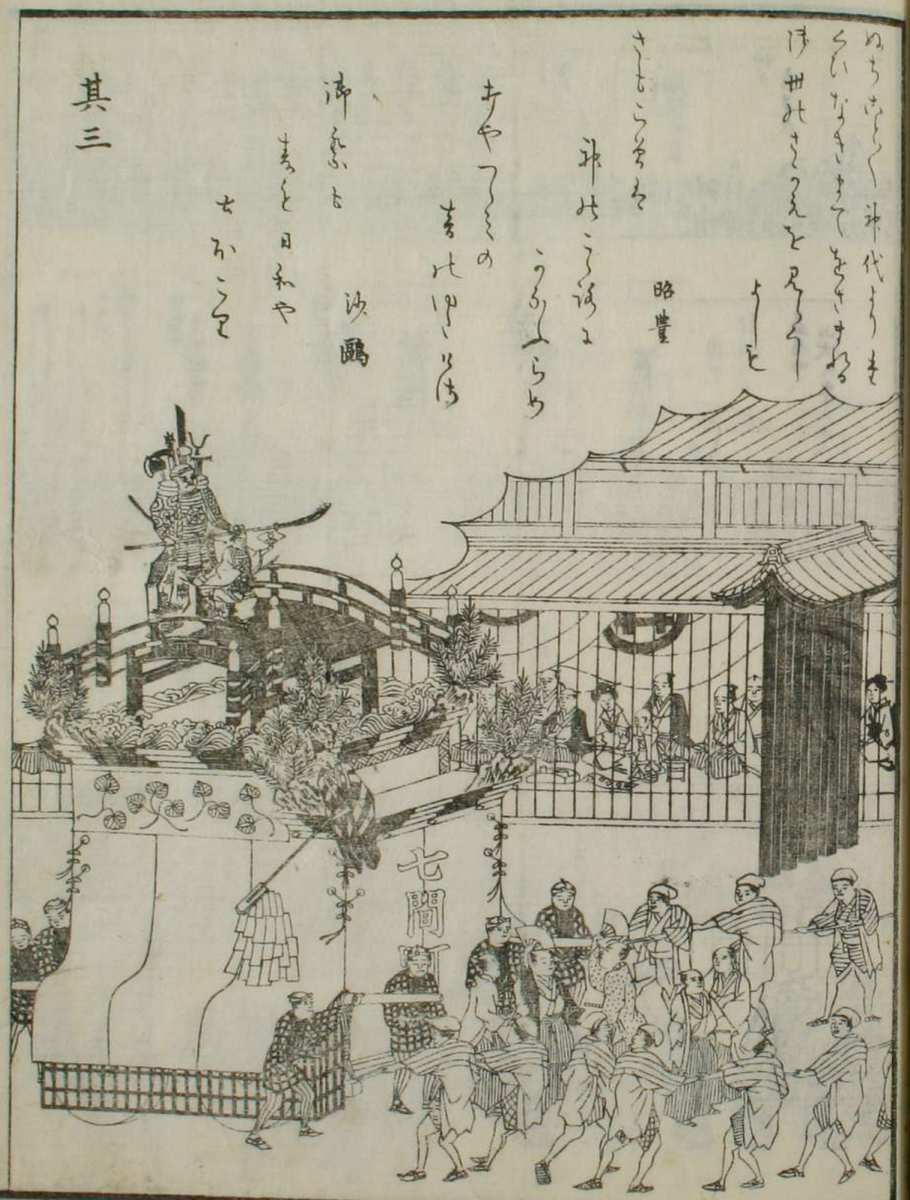
いつきほろ〳〵かしこてつくをまふ〳〵年ごとの四月九日社人のそろ日は神社こもきしゆさまふ大祭もとゝく同かねて休息ほうそく諸人のいませほろ〳〵ふけふのたふとき

ほさ

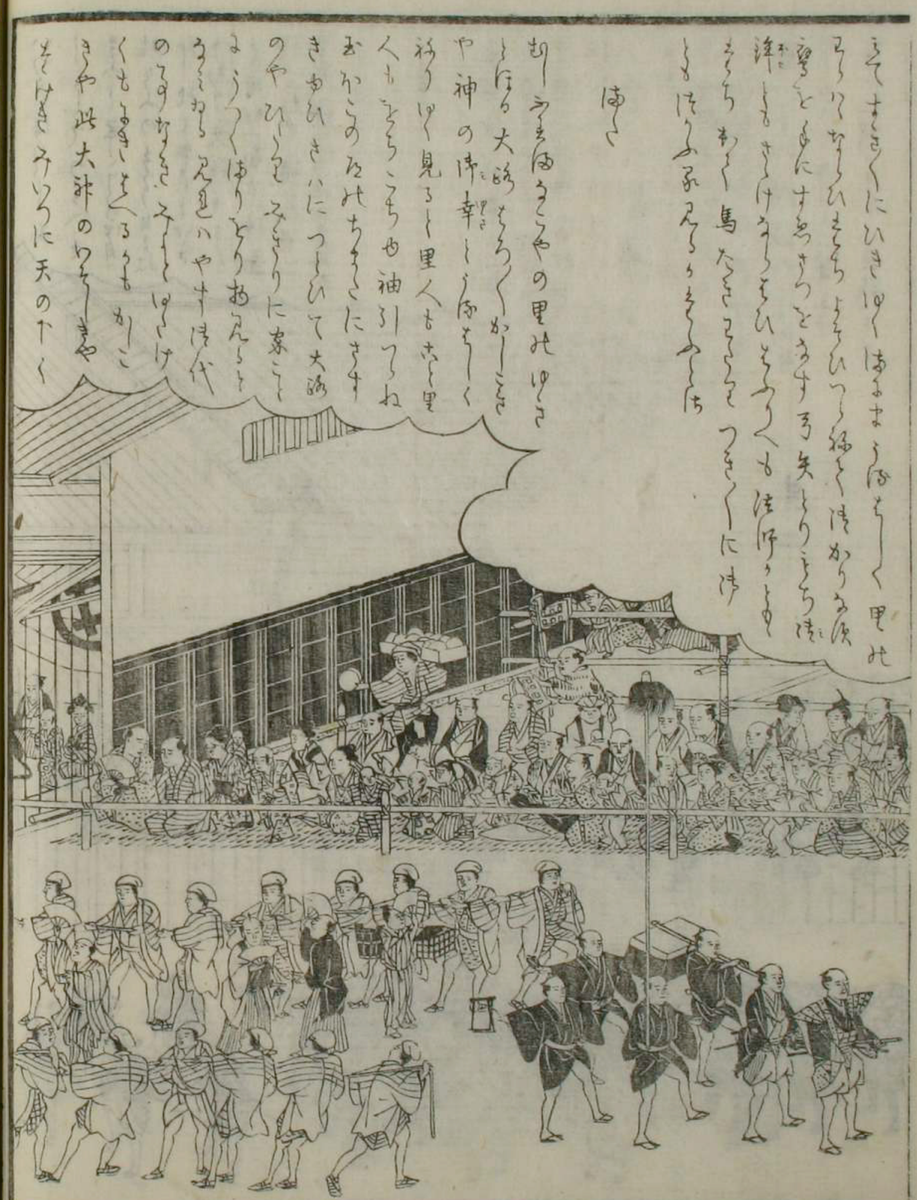
東照神社宮の神みもきいませほつるまと里人のさゝめもおもほほつてせ〳〵乃うの〳〵引車を見まほしうふなきを形よりさをきのくさをそ〳〵くさせ立舞ことに沙後れきぬ各のゝちゝ〳〵みちの足さなしとまふ大祭まと

御獅子

御神輿



ぬちなく〳〵神代もそらいなきまでをさまるほ世おさゝえを
ろろうを
略豊
さともらをを
非おこぶる
うるふらら
ちやつくの
吉北ゆい
沸鷗
沸魚七
まを日和や
七かこを



えてすさくにいきぴく〳〵はるまうほもく〳〵里ぬ
ろ〳〵かろいもろ〳〵ろいつ〳〵絵く〳〵はかうろ
望とゑにすあさうとろすろ矢ろうとろ
洋ゑまさけろろいろろく〳〵も注ぴうゑ
ろろちく〳〵鳥たろろろてつく〳〵に
ゑほろふろろうろゑち

ほさ

初ろゑほうろゑの里ぬゆさ
ろほる大坂ろろく〳〵かこさ
や神の供幸ろうほもく
祢うぴく見る〳〵里人も古〳〵里
人もろろこちも油引てね
おからのねぬちろこにさす
きゐいさいにつ〳〵ひて大坂
のやひ〳〵をゑりに京こ
ようく〳〵ほうをうおろうと
うろから見いやすは代
のろすかをゑ〳〵ぴけ
くもるまこるるもかこ
きや此大井のわそまや
そけきゑいろに天のく

御神馬三疋
御弓三張
御長刀三振
御鉾三振
素袍者

九

神主
吉見氏

伏見町
淀町
下樋爪町
御園中町
上材木町
下材木町
元材木町
納屋町
塩町
堀江町
堀詰町
戸田町
已上
七十人

八

上七間町
壽老人
鹿
唐子遊 十人

蟇屋町
比丘尼 十人

五條町
順礼花荷 十人
和泉町
同

閻魔治町
唐子 十人

孟屋町
山伏大峯入 九人

大津町
弓鉾 鉾持 十人

瀬戸物町
賴政 三人

兩替町
子供鎧武者 九人

玉屋町
懐指具足着 七十人

傳馬町
駿河町
宮神子供 九人
外ニ羽織着子供
五人異之

一

傳馬町
林和靖車

雨覆

傳馬町

其五

御太刀一振
御鷹匹二人
御弁十人

十

御神輿

御旗

樂師十人

嶋田町
関羽十二人

小市場町
羽織着子供六人

吉田町
刀指子供八人

上畠町
雷車

二

御神輿

御旗

御太刀

山王権現

七

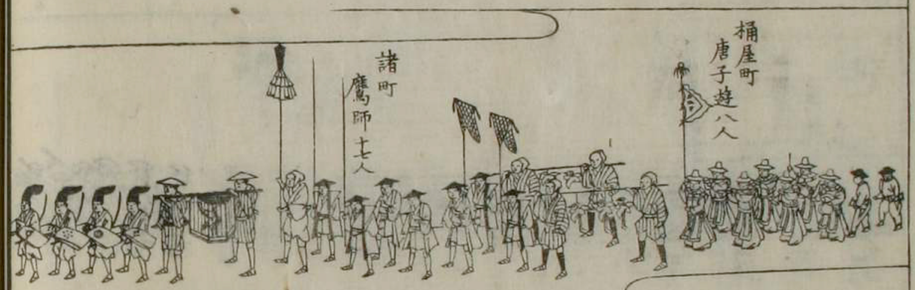
西鍛冶町
葺狩
三人

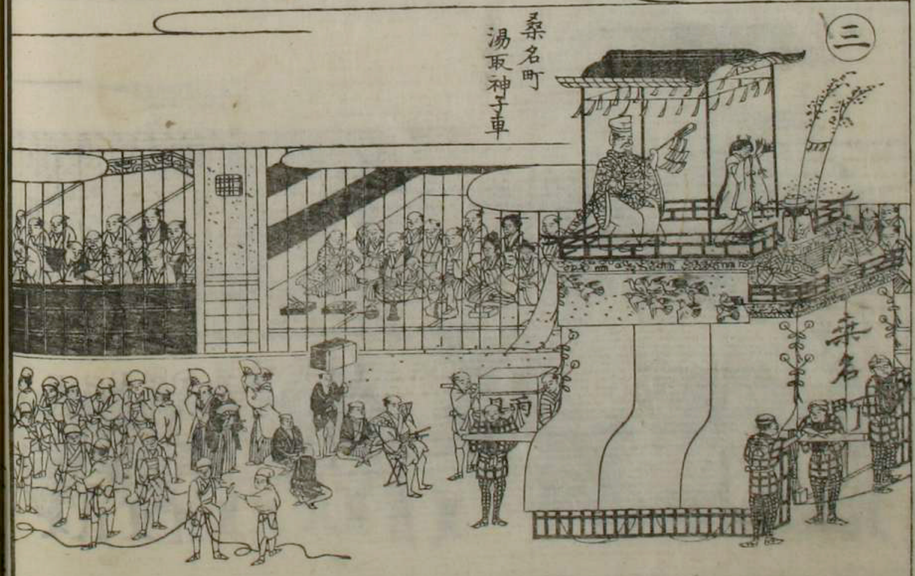
小牧町
追狩子供廿六人

石町
鉄炮持五人
鹿狩子供十五人

長者町
二福神車

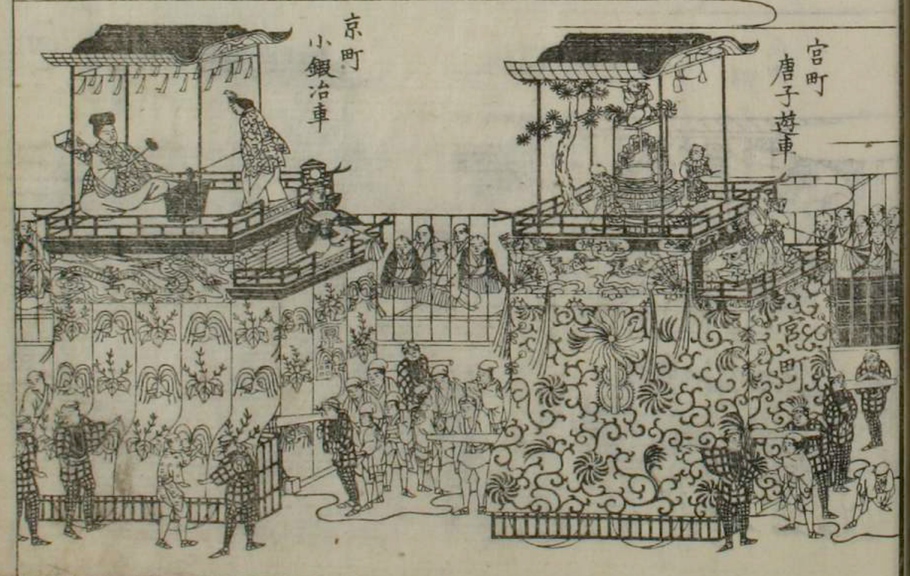

御太刀
御旗
十
三ヶ神輿
日光權現


桶屋町
唐子遊八人
諸町
鷹師十七人


三
桑名町
湯取神子車


別當
尊壽院
赤寺僧
十人
騎馬


六
茶ヤ町
唐人十八人
伊勢町
參宮子供五人
吳服町
普化僧
十四人
常盤町
賴朝八幡詣
十人


京町
小鍛冶車
宮町
唐子遊車

(三)

大和町
唐人二十人

淀町
指南車七人

伏見町
中巻六人

上御園町
刀指子供三人

(四)

中市場町
石橋車

(五)

小櫻町
葉平東下り
十五人

福井町
富田町
小母衣十人

長島町
武者大江山入
十三人

下ミソノ町
同 十二人

御行列

本町
猩々車

大母衣二ツ

他よ遷と給ひしの御闡再三下りうへ往昔 神君御
若年の時は天王坊に三年ぐらゐおはしまし其御
志こゝみより終よ外へ遷地うくしてやうねかくて御
城擁護の鎮守府下の氏神といふ事うけ
瑞籬御供所寶藏御井鳥井攝社 八王子社ハ本社の右 兵主社
ハ本社の左ふたつ寛永六
年巳巳十一月十六日 源敬公新たに御造営うり瑞籬の外の末社ハ
稲荷社 日神社 月神社 弥五郎社 白山社等みな本社の右ふあり
孫樹 拝殿の西にあり むかし嫉妬の婦人呪詛ふ志ゞくこの樹に釘と
ひまいせうら後木のかへ人の寄るさいはず 神寶 國君の御
進状等數通其外神佛ふ画像多し 拝殿の額を掲ぐ画ハ官脇有慶ふ 中門
見え本地堂の鰐口小ハ大永八年戊子正月日鋳之と彫ふり又陰風ふ天王
祠正体鏡形面中画牛頭天王上画婆利女左右画八王子 裏ふ曰奉施入牛頭
天王御正体勧進沙門勝尊并縁阿弥陀佛正安二年壬寅四月十一日といふ
より見え 例祭六月十五日の夜片端御園御門より東の方に車
樂と置き數多ふ挑燈をかゝく又氏ふかゝりる町〳〵
より小さふ山車を曳来るを見舞車ふよ其外府下ふ
子供等が笹に小挑燈をはさみて棒ふあるさまふ皎こゝる月に
映ぜる數千の紅燈白日を欺き貴賤の群集潮の湧が如
し實に夜景の壮觀ふ又十六日朝前夜ふ車樂ふ飾人形
をかざりて引渡す児の舞さどありて古雅うる祭式ふ

亀尾山安養寺 天王の別當うて天王坊と號し真言宗

うて京都仁和寺明王院ふ兼帯ふ伊勢國多氣郡長
松山安養寺ふ同流うて開山恵日國師ハ禪密兼学ふ
知識うふ 後園の假山樹木の位置自ら幽致うり唐土廬山の凡景ふ
存せり 亀尾山の額ハ明人陳元贇の筆安養寺の額ハ
朝鮮人野峯の筆之塔頭常林坊南坊西坊の三宇あり

瑜伽 登亀尾山呈如實上人 岡田新川
境 在大城間緩歩乗春試一攀浴水文會含羞
帯満園芳樹結華鬘香雲徧覆三摩地彩石嵌空九
仭山幸有闍黎憐輸墨優遊共得樂餘閑

名古屋山三宅址 名古屋藏人高信の屋敷跡三の丸の内西南の方

の武士屋敷の内よりて湟土居ふのあゝ今

亀尾天王社

冷泉の村々氏社そ
里祭りを修りおこし
時奉納せし懐紙に

年毎にはやり松
いくよきて
入道前大納言澄覚

はくさ色一なる
今年より
はやれ亦
逢ひ尾ふる
山を
もろこし





天王祭
片端試樂

南宮大湫

高天月一點
平地燈千張
此夜都如晝

人ミ來納涼

春江

掬灯比山七
咲ちくらをよ
もうきとなる
沖のふね

京町通茶屋町
伊藤呉服店

代家ハ元尾張本貫
の武士ニて先祖
伊藤氏ノ幼名蘭丸
表紙丸と
別人なり
織田太政大臣
信長ニ仕へ天正十年
公薨逝の後浪人ニ
清洲にいたり慶長
十五年の冬遷府ニ
名古屋に移住ス
萬治二年より呉服
屋ニ而江戸上野
廣小路ニ出店もうけて家
富教代繁栄ス
淺山王の社ハ拜殿に
懸魚ハ

扁額後に仕るに奉懸
御神前慶長八癸卯
歳伊藤蘭丸と記ス
則其字ニて時代
寄附ス





本町一丁目の唐本屋（花井と云ふ）家に年久しく臼のありしが明和九年春の比、杵をとりて餅を搗んとするに異香四方に薫じければ近隣皆驚きて来りて、こゝを見るに赤檀檀の上品なるものなり則焚きてこゝろみるに森川某奴ありて冷泉為村卿へ奉りければ其香を知音の方へも配らんとて森川某に夏衣と名づけ給ひぬ

おほろ夜や日数ようよう七つ紀風

初尾も郷まこと琴のこゑ

月すむ秋の音をきゝていくかみるの

朝戸もなけのさけもま章乃

うきくへての

おりくろや

今せてうらいろをきせさいく又

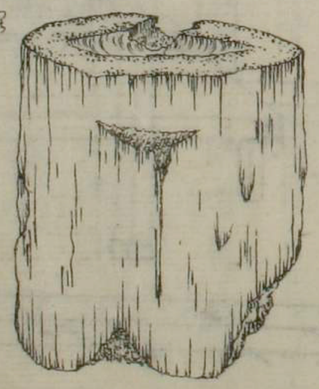
香木れうよりえたらせてか

琴にかきあらせハ

うらんかけ姉にたろをとろ

此句書ハ尾沈の玉北人うり

うちうぬ名うし



杵の跡

澄覚

本町一丁目書林風月堂が家に珍蔵す風月堂二代目の主孫助ハ蕉翁の門人にして夕道と号す貞享四年十二月芭蕉翁此店に立寄しを折ふし雪ハ降出けれバ即吟の句を夕道へ贈る

書林風月しるし

降出きを

いさ出ん雪見よころもかたしきて

丁卯臘月初　夕道何ゝ贈る

其後此句翁筆此一軸を見らるゝ一時

手の跡や雪ハあれ共世

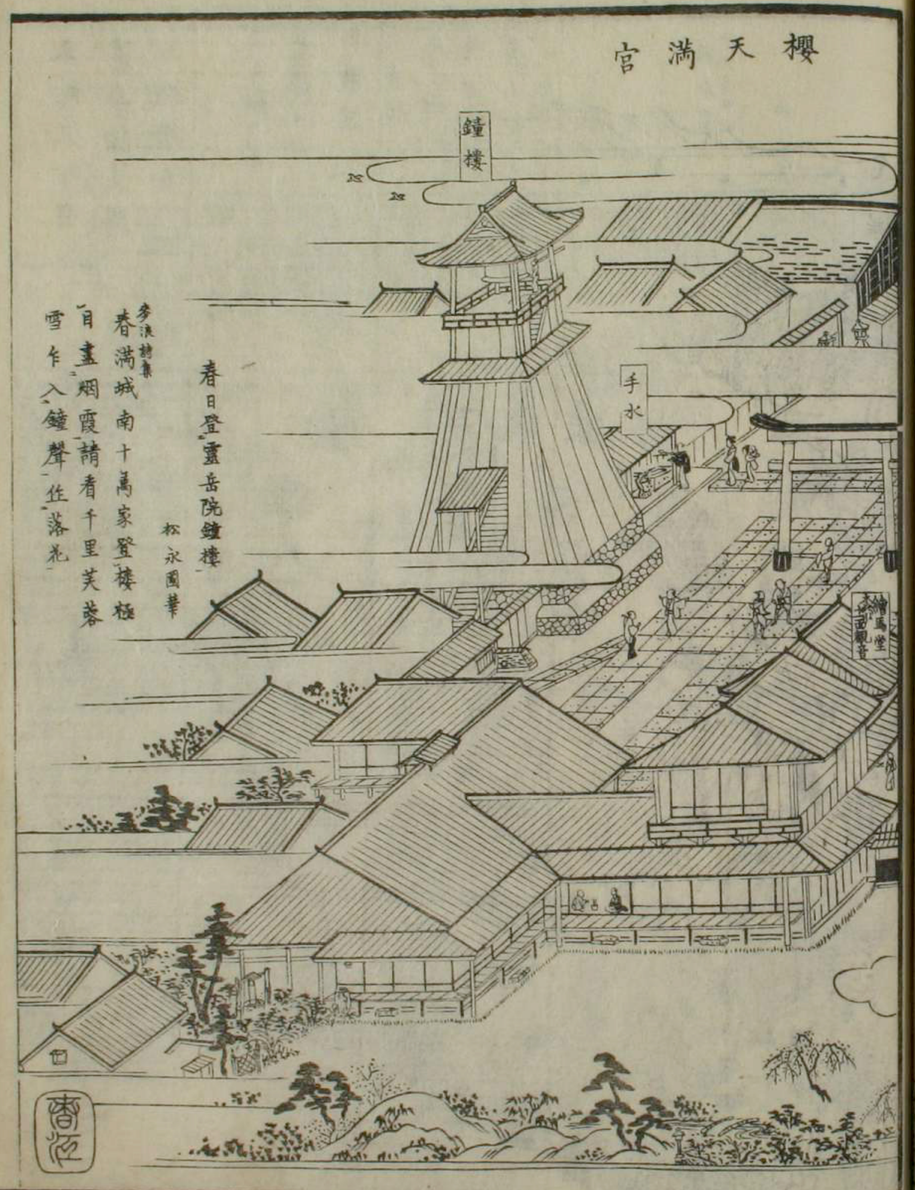
芭蕉翁古事

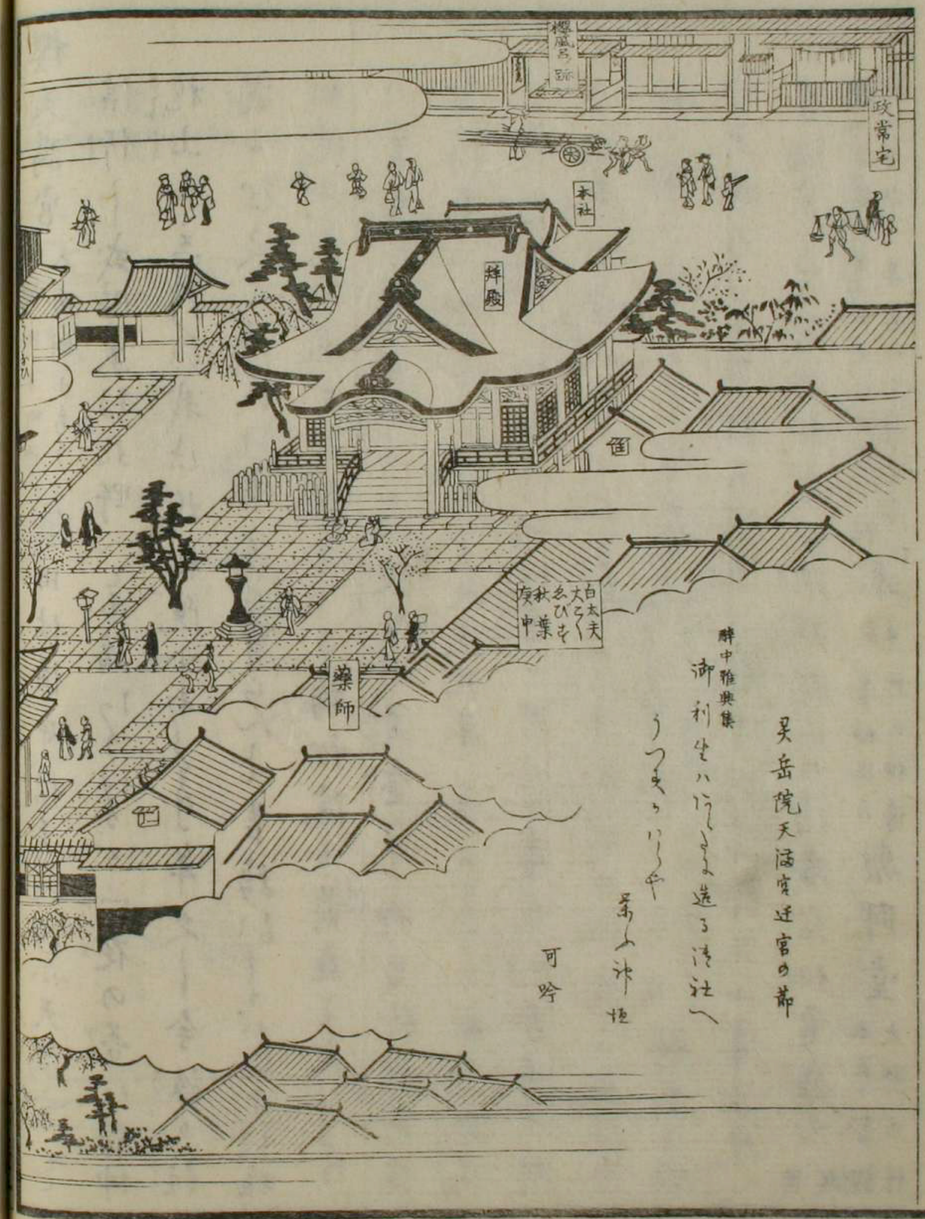
凡月ゝ
門ちかころ
雪れき
白圖



櫻天満宮　小櫻町本町西へ入南側小あり　織田信後守信秀つゐに天満宮を信仰し武州北野へ遷し給はらんけるが一夜の夢に菅神枕上よりたゝりて我は梅松院小あるの年久し今汝が住國よりむかへよ諸民は安全と守らんと告給ひしかば梅松院も前夜より夢の靈告ふ符合せしかば彼院の靈宝なる御自作の神像を信秀に附与しけるを天文九年ここへ遷し社を創建して安置しが慶長御遷府の時万松寺を今の所へうつされしかども御靈の神慮よはらせ給ふ社ハ猶ありてこゝにいまもあり　入通前菅大納言のかゝり縁起あるうへゝ大同小異あり　神木よ櫻の大樹あり　又櫻天満宮ゝ称す別當櫻花山靈岳院ハ曹洞宗にて則万松寺の末刹開山ハ清庵宗仙首座ゝ　彼杨證樹ハ万治三年酉月の大火よ焼失して今ハ其名のミ遺れり　本社菅神御自作の神像薬師堂本尊智大師の作

櫻天滿宮


鐘樓
手水
神馬堂
多武峰
春日登靈岳院鐘樓
松永貞德
春滿城南十萬家登樓極目盡烟霞請看千里芙蓉雪乍入鐘聲一片落花


櫻盛の頃
政常宅
本社
拜殿
回
白太夫
大くす
ゑびす
松葉
夜中
藥師
吳岳院天滿宮延宮の節
神中雅樂集
御利生ハいくよまで迄る清社へ
うつるうつる
第六沐恩
可吟

本町三丁目
醫學館直傳
三臟圓店

二月櫻天満
宮植木市
の賑合
此邊數
町の間
殊よ
多し

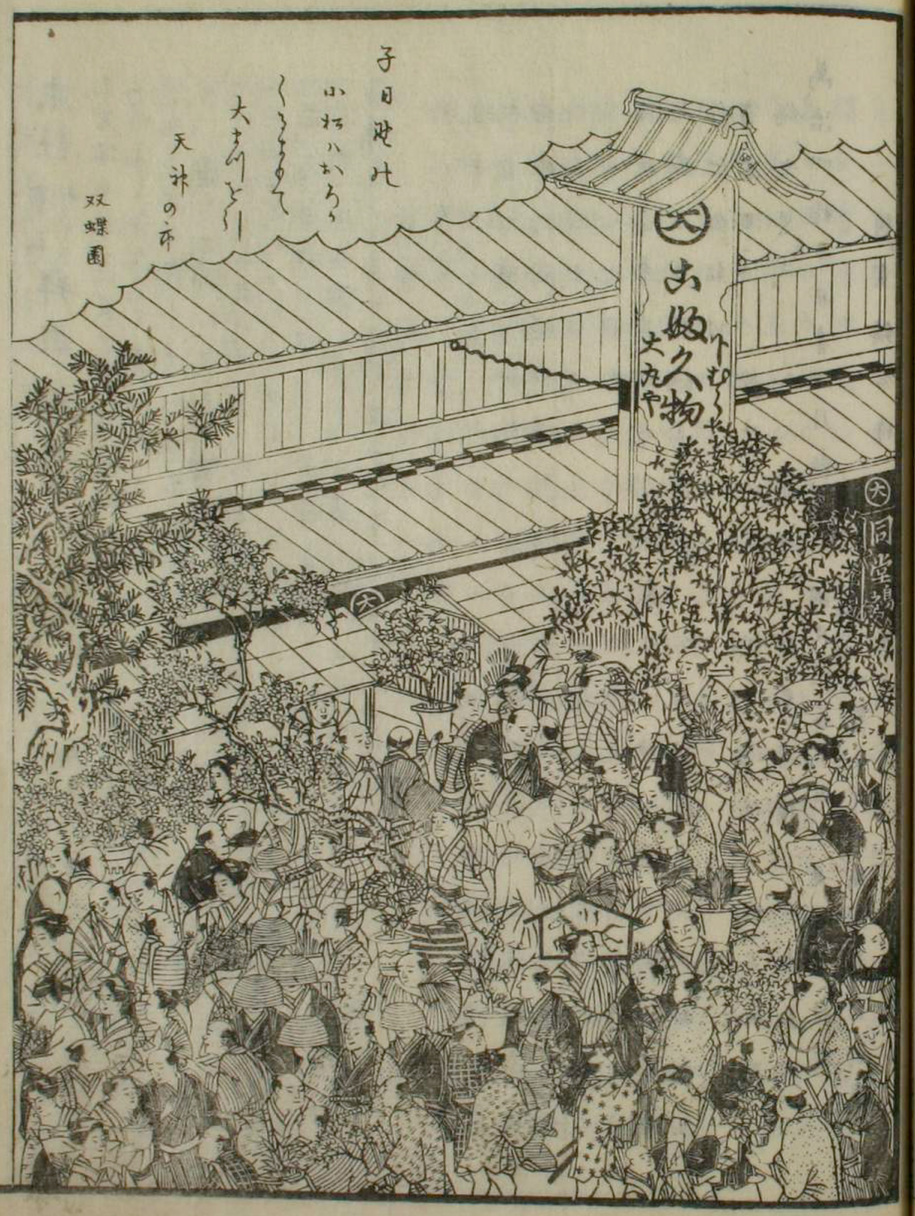
伯馬

梅ごよみ
梅の花
梅ごよみ
梅ごよみ
梅ごよみ

本町四丁目
大丸屋店

植木市其二





未社數祠あり拜殿繪馬堂　本社より奉納せし數多の繪馬を此堂内にかく

又天保七年に至りて諸國凶作おつづき米價高直にて飢渇に及べるものすくなからず其比府下の志ある町人共が施行堂とも名づけて日に若干の金錢米穀或は衣類等まで思ひ〳〵に貧窮を恵みしと　國君の御仁政より憤發せしなるべし凡二万両余に及べりとぞかゝる連年の凶作よりく　御仁恵の鐘樓萬治三年より官命を奉じて晝夜十二時を以て撞ときゝ町中に告知らしむ故ふ時の鐘と称す古鐘の銘ハ小出永菴の作なりしが焼失し今の鐘の銘ハ須賀安貞の作なり

尾陽城下鐘銘并叙

於乎擊鼓以警晨昏鳴鐘以紀子午乃古今之通典也辛丑之春　邦君出命新制一鼓掲諸謹門而準撃壷之職每時鼓々靡有差謬然尚恐不遠遐方重命有司鎔鑄洪鐘懸諸市街之正中而主時候之數於是鐘鼓俱鳴而后晝夜之道如示於掌群僚得是成官私之務黎民得是修利養之業所謂聲音之道與政通者其斯之謂歟數于一時以垂于萬世鴻勲之盛不可勝記焉因奉　公命謹勒事狀乎銘間且作之銘銘曰

筍虚瀏溎　授時四民
錫文思武　和人感神

萬治四稔辛丑春三月穀旦

洪音徧擣　城市鄉鄰
邦君偉績　千歳無湮

詞臣永菴小出五庭謹撰
府下鋳匠　水野太郎左衛門藤原則重

題重鑄方時鐘刻古銘之後

自在昔我　先君敏置景鐘于嘗神叢祠之南報時牖民畜庶熙載以来仰其賢享其利者既百有餘歳皐々之政百姓日用而不自知也寶暦癸未十月六日叢祠罹濫失之殃縣鐘俱焚頃為烏有人咸始知最為欠事於是　邦君允重民事乃命鳥氏改鑄以脫鑪翼然鉤之縣陰陽相變無滯無散修奔克諧不窕不撤鏗鏘以緩安以樂闔國聽者訢々然相慶曰禹聲文聲嘽嘽以敷後終日竟夕民之攸暨也　邦君悦焉蓋徴孰先孰後民之憂而憂後民之樂而樂角之律律相得者此謂先民也臣安貞奉命欽紀所以不贅銘辭于此者然於億齡鍾舊文之武以紹復丕績之由而鳴休祐

明和改元甲申冬十二月

須賀安貞拜誓首識
水野太郎左衛門藤原孝政

神寶　方丈佛間に安置せし十一面觀音ハ唐佛ノ銅像ニ又菅公十一歳の御時

かさまくる梵網経南化和尚自画讃の渡唐天神の像康元丙午なる古書画古佛像等多し

例祭　二月廿五日神前に大服茶を轉讀し繪馬堂に神輿をかざる此日府下の寺子供等我

おくりくる大文字をかゝせて境内に揚より地に及ぶまでさまざまの清揚より地に及ぶまでさまざまの清書を紙をつゞりて或ハ三寸或ハ五寸あるく本町通諸人の目を驚しむ又祭日前後三日の間府内及び遠近の材木ハさらなり大樹喬木穀町の内両側に榛木を商ふ緑令多くを賑ハせり車をもて来りそれらの品さまぐ山林ふ入るこゝろし

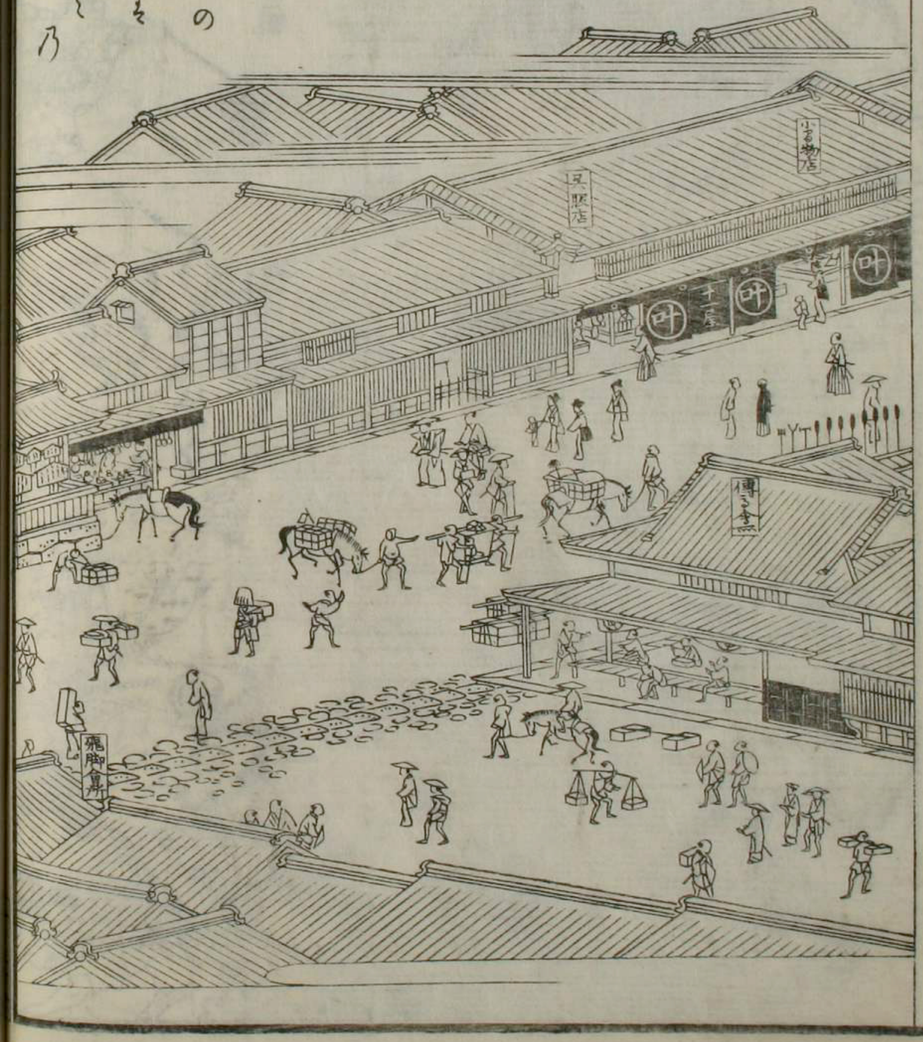
道麿俗称田中庄左衛門のち道全と号す美濃國多藝郡榛木村の人なり天明四年十月四日死去ス　田中道麿居處碑　當寺北の方中にあり

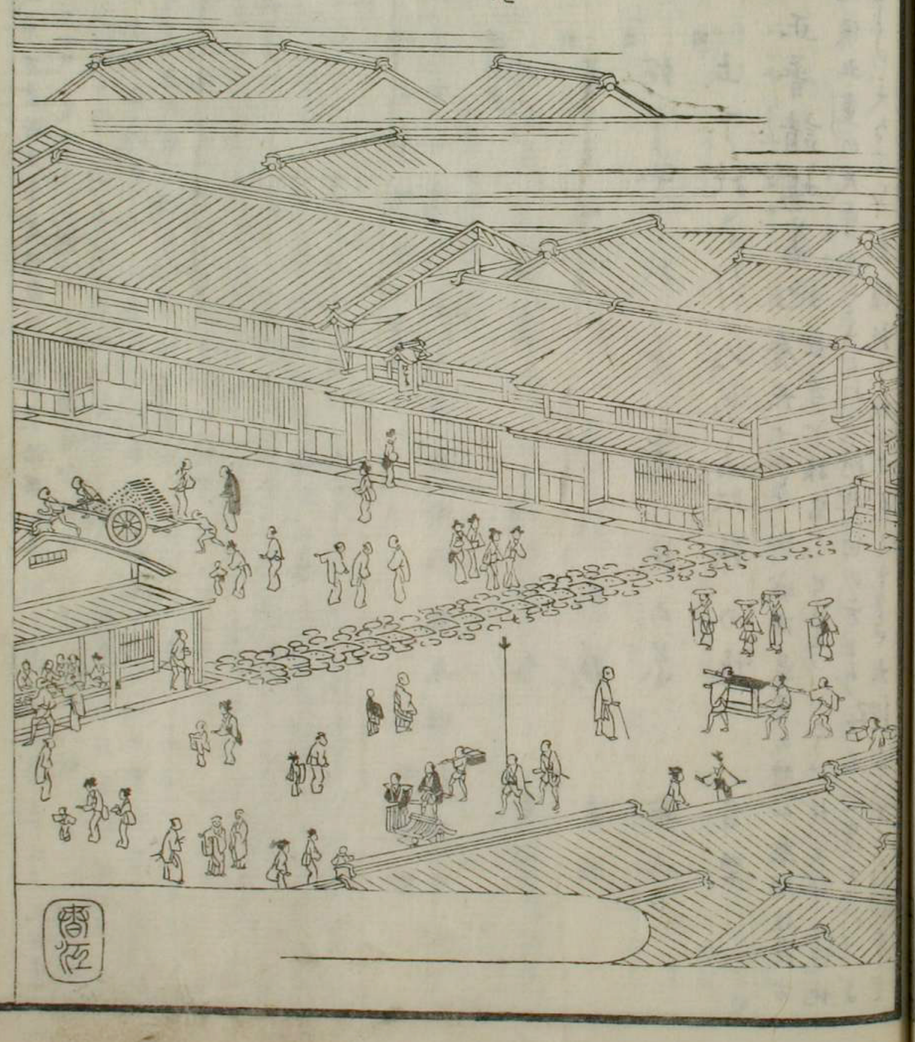
和学に長じて万葉集等ハ古書に通達して天明四年移住して

加藤清正
石引(いき)の図

古人猿猴菴遺図之雅寫意

傳馬會所
札ノ辻





著述撰集万葉抄万葉名所歌抄万葉東語集万葉問答書手向草等ほか又万葉
以下の古書どもの訓解ども長へにもの詠つかひ問答せしものと疑問ども題して數巻あり此翁宇津保物語
の古写本を所持せしが延宝の印行本とは甚異りて世に重宝ありし由裏面
に本居宣長の歌を附ありし鈴屋集に　多くの社通ありて尾張のみ
ならや雲岳院ら二寺のうちに年ごろ住ける跡に石ぶみもそんしまうにありつるを此
の木の田中のをちなる人もなくつひけやそはやしぬれむくろみ
の橘の木あせを此老翁ハ美濃國多藝郡の橘木村の人にてやがてもその木の
をちこちなむものをるさてうもむ
ふるさと

櫻花　菅神廟　撫塵集　神野于容

澹沱春半日　滿市賣花聲　共飲牡丹酒　醉遊唱太平

曉野集　二月廿五日奉納ス

ちんくさ梅安かるる竈をこる　荷兮

同　雪も水ぬるいて来る神乃梅　亀洞

同　何くやら牡丹ちりぬる夕べハをし梅の茶　越人

同　上下ゆさりぬるやうに沐の梅　昌碧

加藤清正普請場舊地　慶長十五年御城御造営の時加藤肥後侯方松寺と旅宿せしまゐ今此天守閣を立られし材木天狗の境地

うつし此侯五重の天守閣を立られし材木天狗の境地
角石ども大小の大なるを毛繧牧十枚ほど色こまやかに大概そのまゝ此地

のこり五六千ばかり人夫をそへ引ゐてこの地にて数十人を石のうへに立並べ自身も采配を振ひ采ふりあげて那古野清次の商人どもの酒肴をおくり賣ものを買ひ見あの法人にこれをわくる勢子とうげ木やその物ども数万ばかり見あの法人にこれをわくる勢子とうげ此ところ児小性の美お年に渋柿を振ひ采ふりあげて那古野清次の商人どもの酒肴をおくり賣ものを買ひ見あの法人にこれをわくる勢子とうげ木やその物ども数万ばかり見あの法人まで一度に得ぬ事ゆゑ一枝ごとに万松寺此苑がおく一枝ごとに其

驛馬會所　本町通傳馬町の角にあり　二里江戸の方熱田宿へ一里半慶長十八年より始驛

馬継所ありて京の方清須道
人も伊勢海ありて信濃のよりの東西南北の諸人ども通る旅客も公私を論ぜず此所を往来
ぜしめらるゝなり又町辻中央うれば時刻をあらはす半町
もり東の方より観音堂をうつして

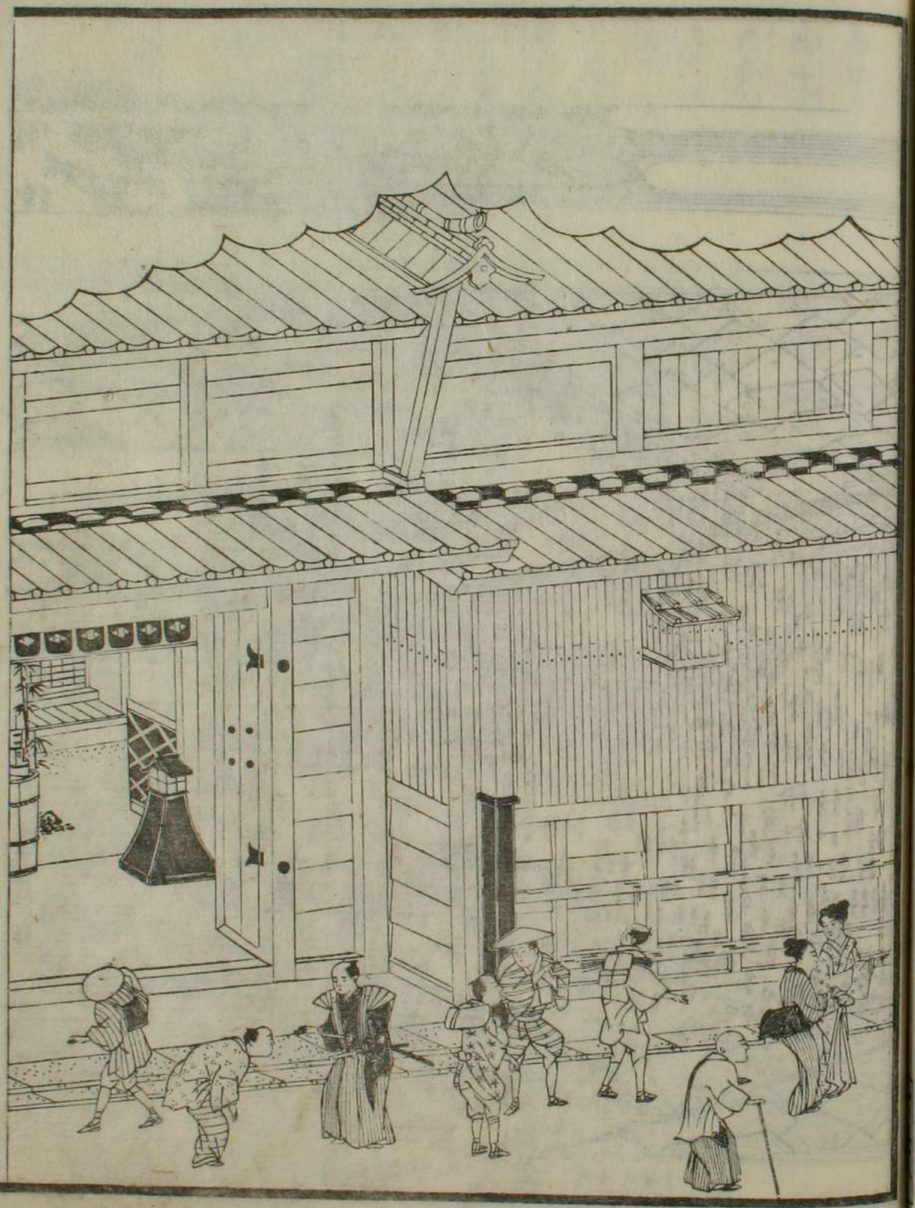
如意山福生院　紫町通本町西へ入北側にあり　華寺未至徳年中蓮華寺の住僧順誉建立して雲知郡

中村にありしを元和三年中村うつに遷座
三年ちかくにうつす　本尊　薬師如来大聖歓喜天の木像を相殿に
安置す　霊験あらたにて常に参詣の人多し　天満

覺正寺　本町通蒲焼町上ル東側にあり　真言宗海東郡蜂須賀村遷

宮祠　元和三年中村うつに遷座
秀吉公の守護神なり　本尊　阿弥陀
如来
其後今社
宗に改む

本町六町目
小見山宗法店





此家八代目
團君に相傳
一貫字帶刀と許さる
竹ぶくろ賣藥
の首魁より
家に賣弘め
烏屋圓登雪
等さる御方の
秘藥なり屋上に
掲げ店前に
立つ烏屋圓三大
字は有栖川明人
陳元贇の筆と

馬琴
鶯蛍漫
遊録に
云の日
納涼の地
を廣小路

柳筋あるに数十坊
お茶を乃せ掛茶屋
等ありて甚繁昌
柳の筋より廣
小路に至る江戸
両國第一橋に
髪髢ありと云

廣小路
夜見世



廣小路　むかひ那古野町そうじまより南の方ハ田野そうにて故今を開帳札なども多くさうに建つらね其餘波うそう東に庚申堂西よ柳藥師などいくそうもあまね諸見せ物居合抜の類ひ賣なども常ふむね)吾て往来人の足をとゞむ礼そうさき夏月納涼のひとハ貴賤袖をつらねて羣集一辻賣れ夜店茶店の燈火赫奕として遊興小夜の更ふるを知らず實に夜陰の壯觀うそせ毎年五月より七月まで夜開帳いとなみ繁昌あり且本尊某作め某ハ新と以て彫刻

古松山新福院　廣小路本町通の西にありて臨済宗世ふ柳藥師と称し門内に一柳樹あり

朝日神明宮　同七間町の東にいそ

本社天照太神天児屋根命二座を相殿にまつり此社そうさ春日井郡朝日村よ鎮座いそしそうが慶長十六年御遷府の後此所へ遷せり○例祭　九月十五日神樂氏子の献燈ハ羅紗異呂服そうの水引とかけ門外の翌洋挙美とゝもに遠近清人の羣集言語そうそうたり

紫川 大久保見町より石橋を渡り小溝となり

石塔あり〳〵紫式部の墓なりといひ伝へ其許を此溝川の流るゝ辺名付そめしとぞ 紫式部の墓は此ほかにもあるよし古書よりも見えず 傳説もあやしき事なり 女童れも鞠多に ひく〳〵と〳〵ふ古さうりなどもうりそうし今はつゞれ溝川なり

御旅所 神輿是まで渡御 御宿院より入御ありて神供調進音楽を奏し 別當ハ天台宗東漸寺 御輿舎 拝殿 御供所 御井

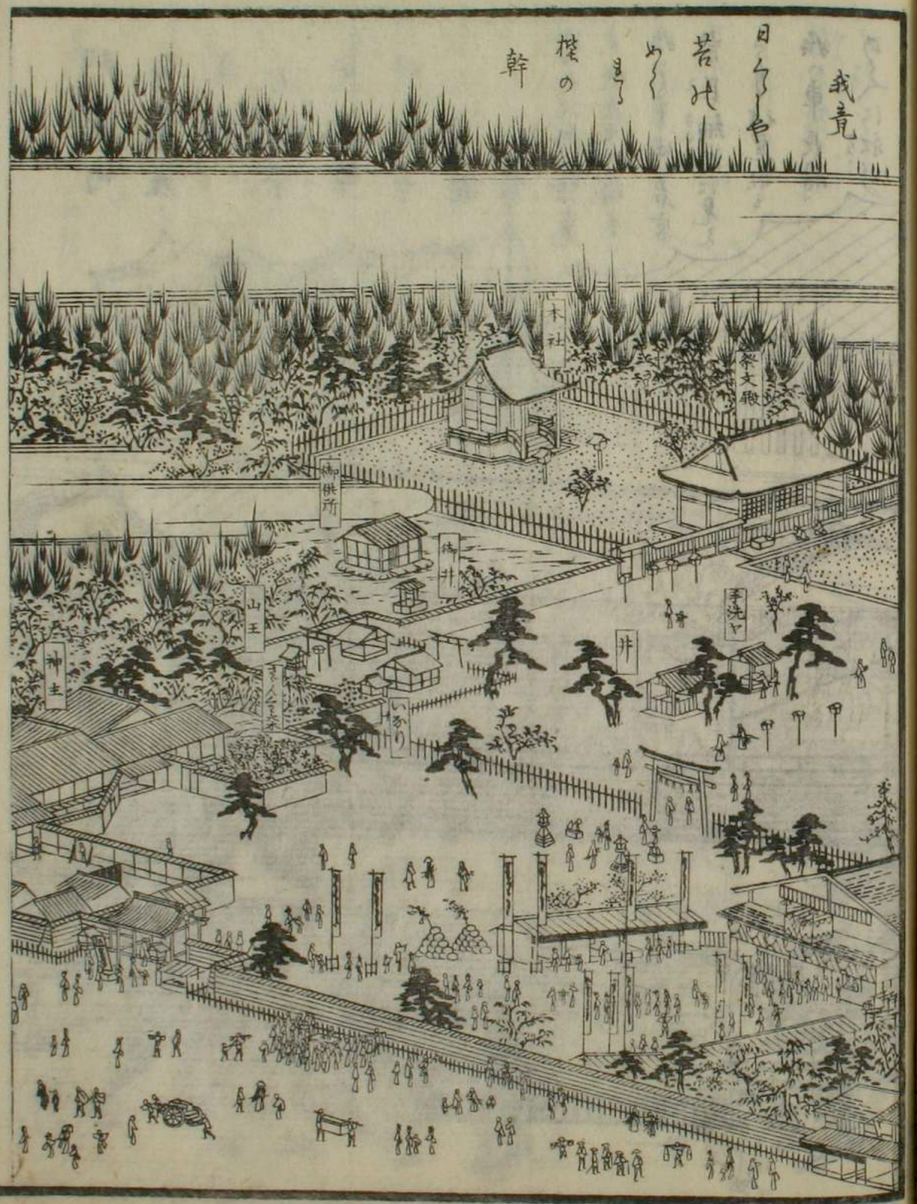
若宮八幡宮 未廣町の東側にあり 三の丸天王の社此南にあり 慶長十五年造營 毎年四月御造營 十七日御神祭に 東照神君御園を 定め給へり 折當社の祭神ハ八幡神 應神天皇 の若宮大鷦鷯尊 仁徳天皇 小まつりて八幡宮も相殿 ふまつれるぞ 天武天皇の御宇小姫〳〵御陵在りて延喜年中再營を加へ給ひ その後安養寺と号し寺をたて僧坊十二宇をあつめしとぞ 天王坊もその内此一宇なりと

もろ〳〵天文元年此兵火よりて神宮僧坊もろ〳〵焼亡しけるを同八年再營ありしとぞ 社記に見えたり又延喜神名式に愛知郡孫若御子神社名神大とあるハ此御社の事なるべしと〳〵ふ若宮〳〵ハ此御社の事なるにより 仮字小ぶえに又牛頭天王の若宮なりと〳〵ふ説もありなどを挍合するに共によろしき歟 年久〳〵して普く人のもろ〳〵且若宮八幡宮の称なれバ社傳より隨て強て私意を賛せず ○本社 仁徳天皇 相殿 左應神天皇 右武内宿祢 拝殿 神輿殿 末社 熊野社 稲荷社 山王社 天満宮社 連理稲荷社 例祭 六月十五日 試楽 翌十六日神輿三の丸天王社まで神幸 神幸 薙鉾 獅子頭及び山車七輛あり 中ごろも黒船の車ハ東にありしかどもいつの頃よりか絶たり 想像に便宜なれ其餘ハ六輛ハ四月の山車に等し〳〵人形ハ〳〵その奇巧ハ大同小異ありて都て四月に劣らぬ大祭なり 祭礼ハ美麗の行粧まことに尋常ならず神事ハ神官より勤行す 仁徳天皇降誕より迄くハ元禄二年又寛政元年に当る年ごとの九月に御灸祭の式ありしかども百年に当る年ごとの九月に御灸祭の式ありしかども百年に当る年ごとの九月に御灸祭の式ありしかども百

若宮八幡宮



續野集
若宮奉納
きく
ふるもぬ
ぬく
弥
かくら
利重



我竟
日くもや
若竹
めくまつ
楚の
幹

門前町
松前屋
店前
若宮祭
黒船車
引渡す
図

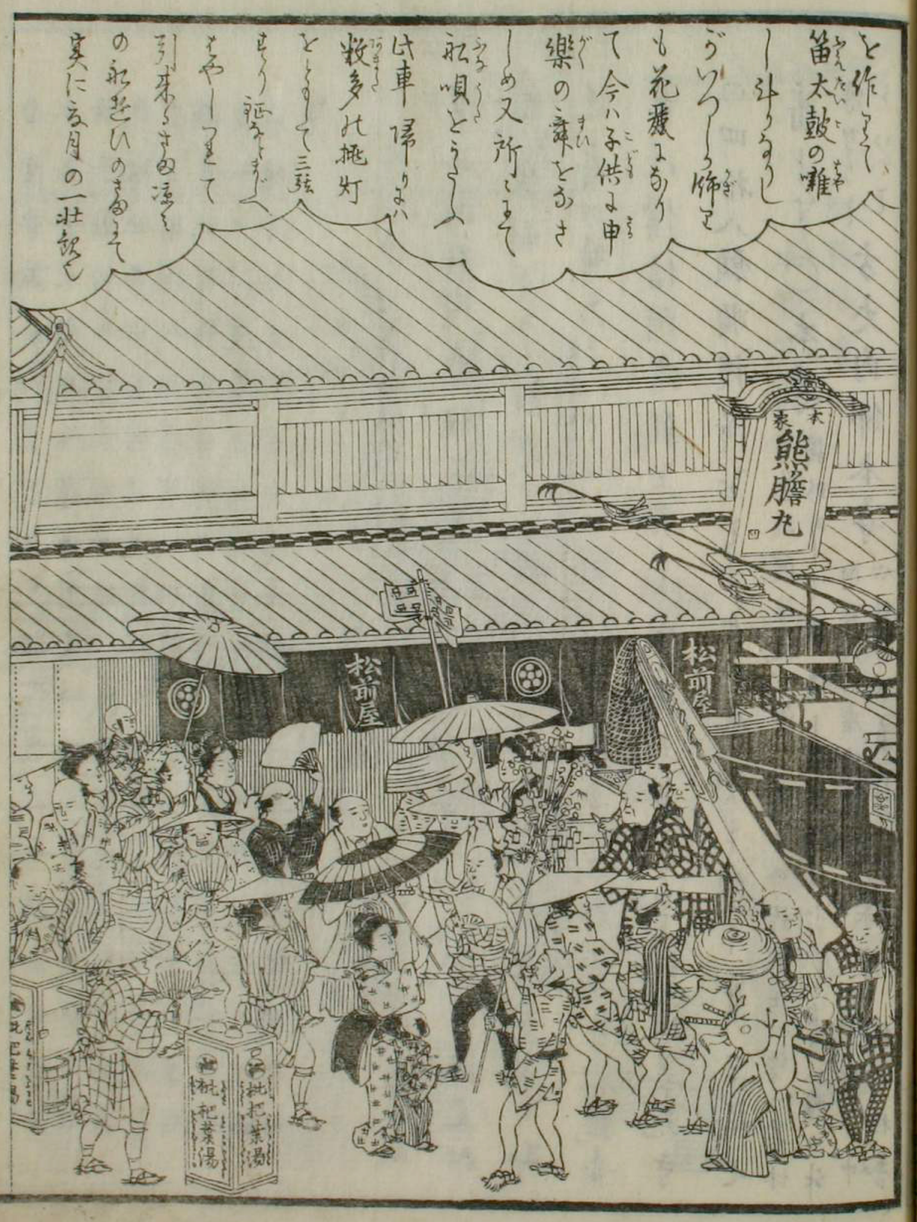
當社此祭礼ハ寛文延寶の頃より始まる由若宮祭巨細記に見えたり此黒船も始ハ車長持のごとくに粧形



と作りて笛太鼓の囃子斗りなり

ういろう佛をも花菱よりて今ハ供よ申樂の事をもさしめ又所どころにて謡唄どうどう

此車帰りよい数多く挑灯をともして三弦もうた謡もやうやうにて引來るさまの淺ましきの取沙汰ひのまるて実に五月の一壮觀也



帝業曽兼統神靈乃在天
本自垂衣聖非唯讓國賢
雁子歌相和梅花頌始傳
甄堀地營永室開溝澮稲
宣古廟深松裡周墻列栢
蠲享祀殊顒若威儀更肅
庚初日浮簫幕流風迥管絃
前殿角祥雲合階庭福草鮮
葛

太平多樂事援筆且成

うと詠て清盛もりせぬ宮力のもろともも世に稀なん 上田仲敏

正覺山阿弥陀寺 往生院 門前町西側にあり浄土宗 京都 智恩院末

新家村より移す 清須にうつりを慶長年中 御

迂府の時さゝにうつり伊勢國多氣郡齋宮村觀音
寺此僧信阿志願と興一寛文五年より信濃善光寺
の四拾八願順禮所をうつす三拾七
番なり ○本尊 三尺此阿弥陀ハ佛工春日の作服士二像ハ其体
像なりとぞ 異形みて佛像もえずうしろハ古き八幡の体
方丈内佛本尊 阿弥陀の座像恵心僧都の真作 涅槃堂 元禄年中
住僧棧磐



阿弥陀寺
木佛涅槃會

の建立して長一丈余の木像阿羅漢以下の尊像を安置す世に海らん〳〵木像なり守夜神堂 宝暦年中の開基也 十王堂 近年の建立 塔頭源受院 天文二十三年織田彦五郎信友の主君斯波治部太輔義統と戦ひ清須の城にこもり〳〵と信長公軍兵と促〳〵信友と謀叛〳〵義統の嫡子義銀と取立清須の城に居らしめ尾張屋形と称すして阿弥陀寺の境内に仮一宇を建立〳〵義統の菩提所とす源受院ハ則義統朝臣の法号なり 浄土 天正十七年 三住中将忠吉君その浅母玄寶墓院殿の菩提の為に武蔵國埼玉郡忍庄持田村に浄建立ありて正覚寺といひしを 忠吉君當國を拝領〳〵給い清須浄を城〳〵ハ此寺をも清須小うつし寺領浄寄附ありしが慶長十二年三月九日 忠吉君江戸少てかくれさせ給いしかバ増上寺に葬まり其ほう法号性高院殿と申奉るにより今此寺号に改め慶長十六年浄迁府の時こゝにうつり中興開山ハ満誉玄道和尚なり〇 本尊 阿弥陀の立像 左右脇士勢至 寺寶 忠吉君御影像 一幅

称讃浄土經一巻 中将姫筆 金屏風一雙 古法服 元信筆 繡涅槃像一幅 比類稀なる大幅にして例年涅槃會ニハ本堂に掛置て諸人の結縁とす 塔頭称名院 慶長十六年清須より引移す 悦山大禅師 一行院 是も同年清須より引移す 不動堂の本尊ハ兆殿司の真蹟なり

春日遊性高院
花臺一雨濺平蕪隔郭人烟忽有無清賞漫憐康樂
句卧遊何假少文圖舊前芳樹春相映檻外歸鴻暮
自呼開坐更聞談浄理飜知長日在須臾

滄洲

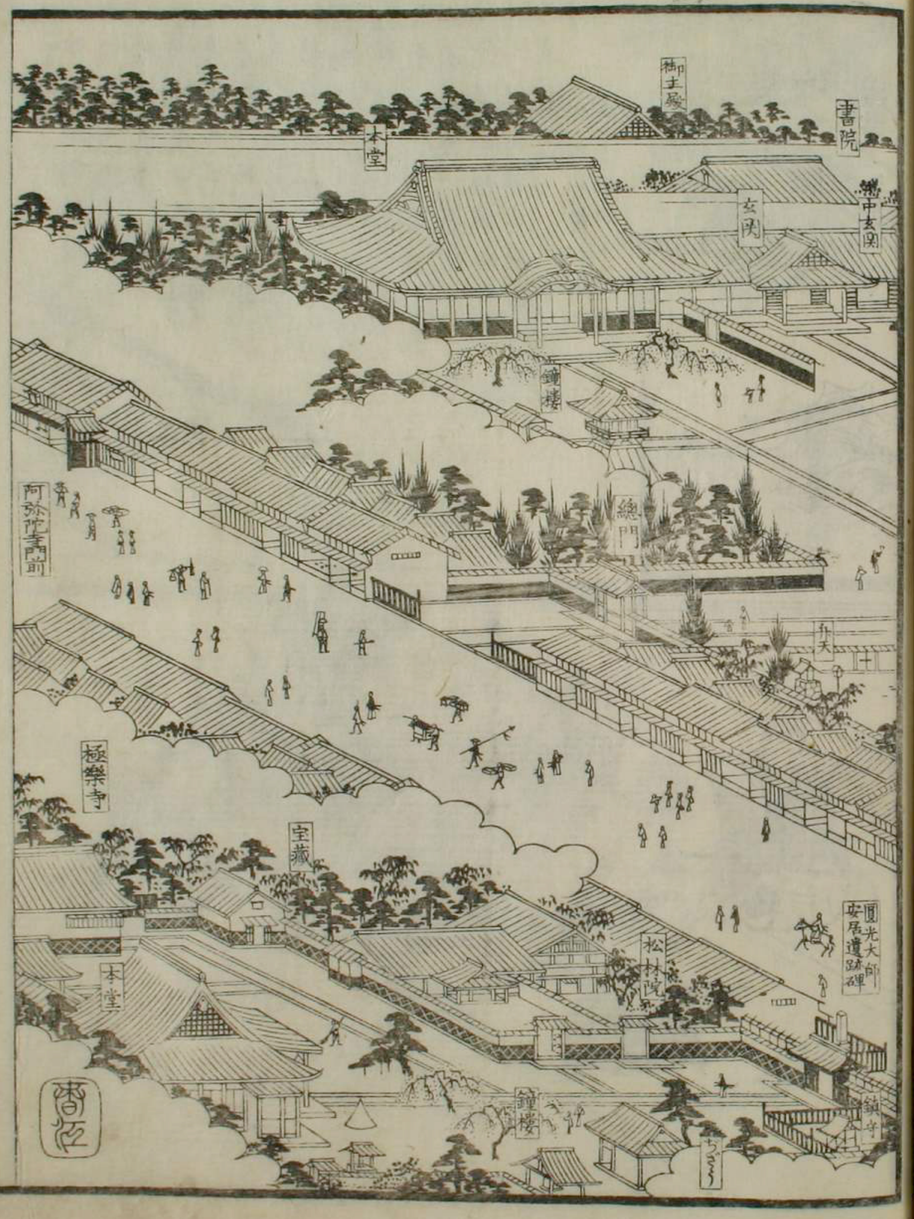
寛永十三年朝鮮人来聘の時性高院を三使の旅館〳〵せしを擯與〳〵て来聘使通行毎に必此寺を休泊とす 府下の学士松平秀雲井出昜臣ほか數輩韓客と贈答せし詩文墳篋集三世唱和蓬左詩歸昆玉集後編等にのせ〳〵名古屋客館の作ハ皆此性高院にての唱酬なり

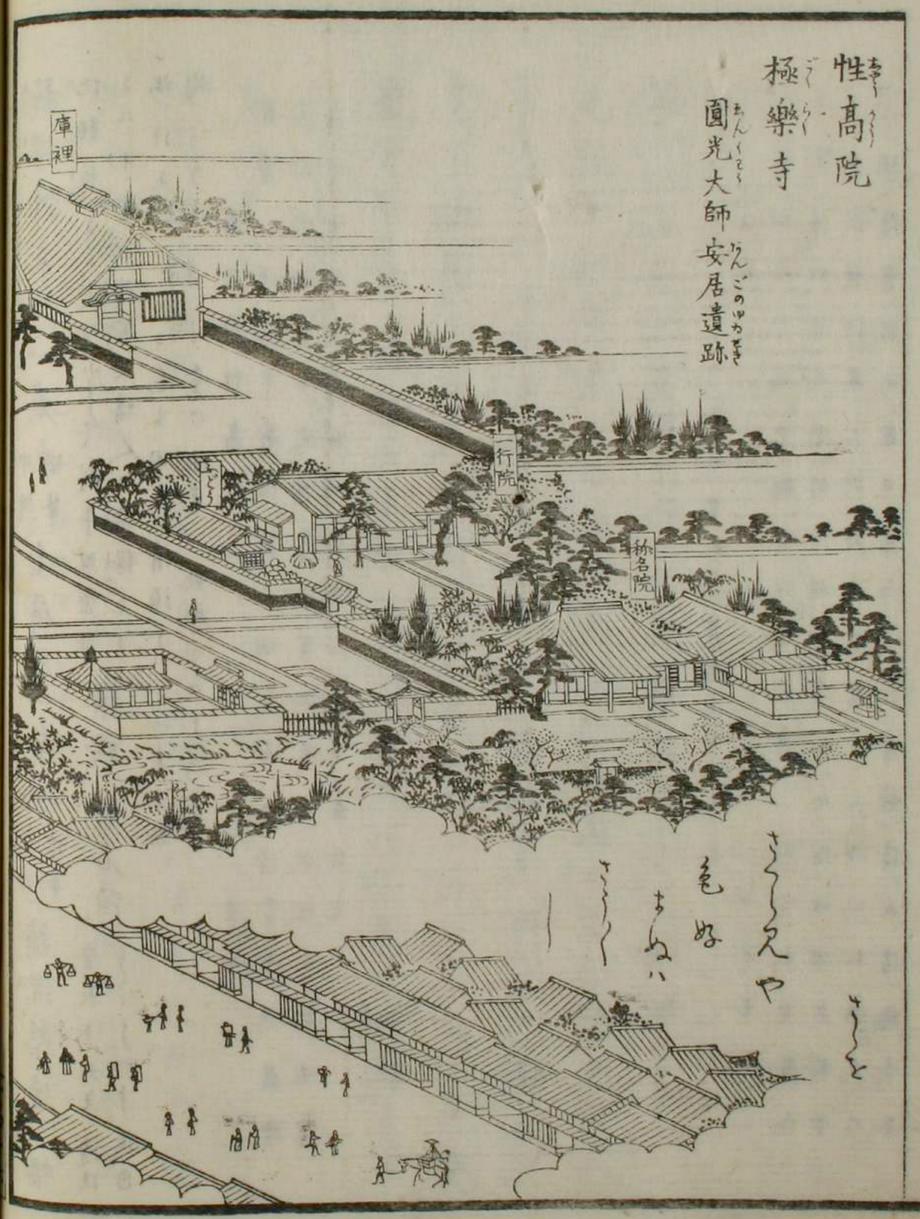
甲申二月三日 朝鮮國信使寓二庸下一與二諸子一會

松平君山

通刺
自二關使一星指二東瀛一首以後若レ歴二三秋一今七皇華無
羞獲レ臻二斡邑一奉レ接清標何喜如レ之僕姓源名秀雲
字士龍號二君山一別称二松平氏一乃
藩書監也茲日奉レ命小二相賓館一護レ義清誨幸甚

性高院 極樂寺 圓光大師安居遺跡





諸学士
性高院の
書院に朝鮮人と
詩文贈答
の図

甲申春朝鮮國
信使宿府下性
高院僕奉 命
小相賓館與製
述官南秋月及三
書記唱和男武孫
彭同侍席右秋月
把筆寫曰三世一
席各贈瓊篇希代之
珍也嗚呼此言可以
為不朽之榮也遂裒
其詩為一冊題曰三
世唱和命剖厥氏行
于世故叙其語以弁
其端云

君山題

幸甚

呈製述官南秋月

路入扶桑東又東海天萬里使星通画熊夜宿三山
月彩鷁朝飛五両風野館花開停匹馬舟梁雲起處
飛虹行吟此去應回首八葉芙蓉積雪中

秋月

奉酬源君山

性院深々稲葉東萬松村遥連相通山川秀媚天新
雨樓觀高低夜有風春早江城聞去鴈日暄橋渡過
垂虹蓬萊仙老厖眉皓三世論交一席中

向韓客館性高院余同諸子在賓筵筆語唱和
徹暁而罷矣再過此地有感往事因作諸公寓
千村鳥臣

陳云

隣市城南一梵臺知曽韓客此徘徊主賓坐定交通
剌筆硯携来各嗣才宴散五更群動息手分千里別
愁催斯筵變作清開地當日繁華安在哉

贈朝鮮國製述官南秋月

城中春色盡楊柳獨依々萬里雲山合三韓使者歸
月隨征蓋去雲傍掛帆飛借問還鄉日何人更錦衣

教報山極樂寺一心院 同町西側にあり 林寺まち栗生 光明寺ともあり

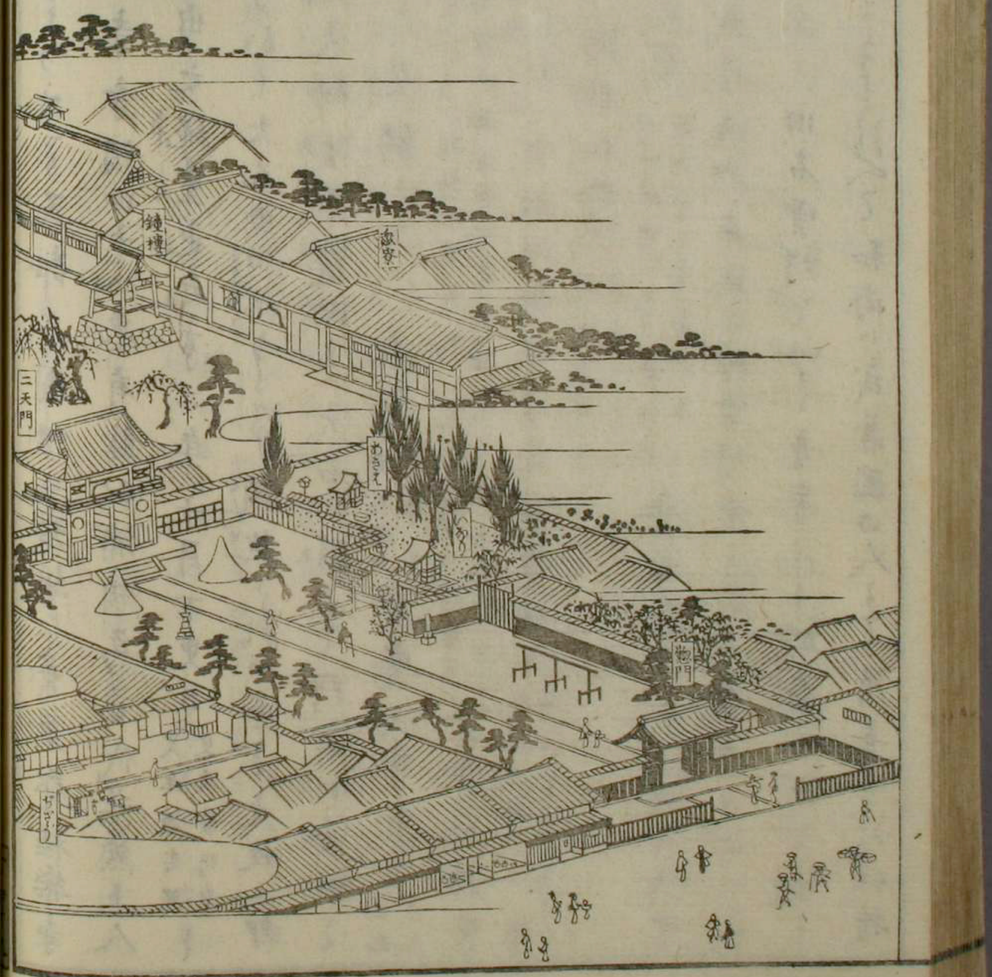
きづの葉栗郡若栗の郷 後世極楽寺村となる にありて法然上人安居
の地なりしが天文年中木曽川の洪水よ流廢せしを慶長九
年九月僧空朔清須に再興して極楽寺といひしと同十五

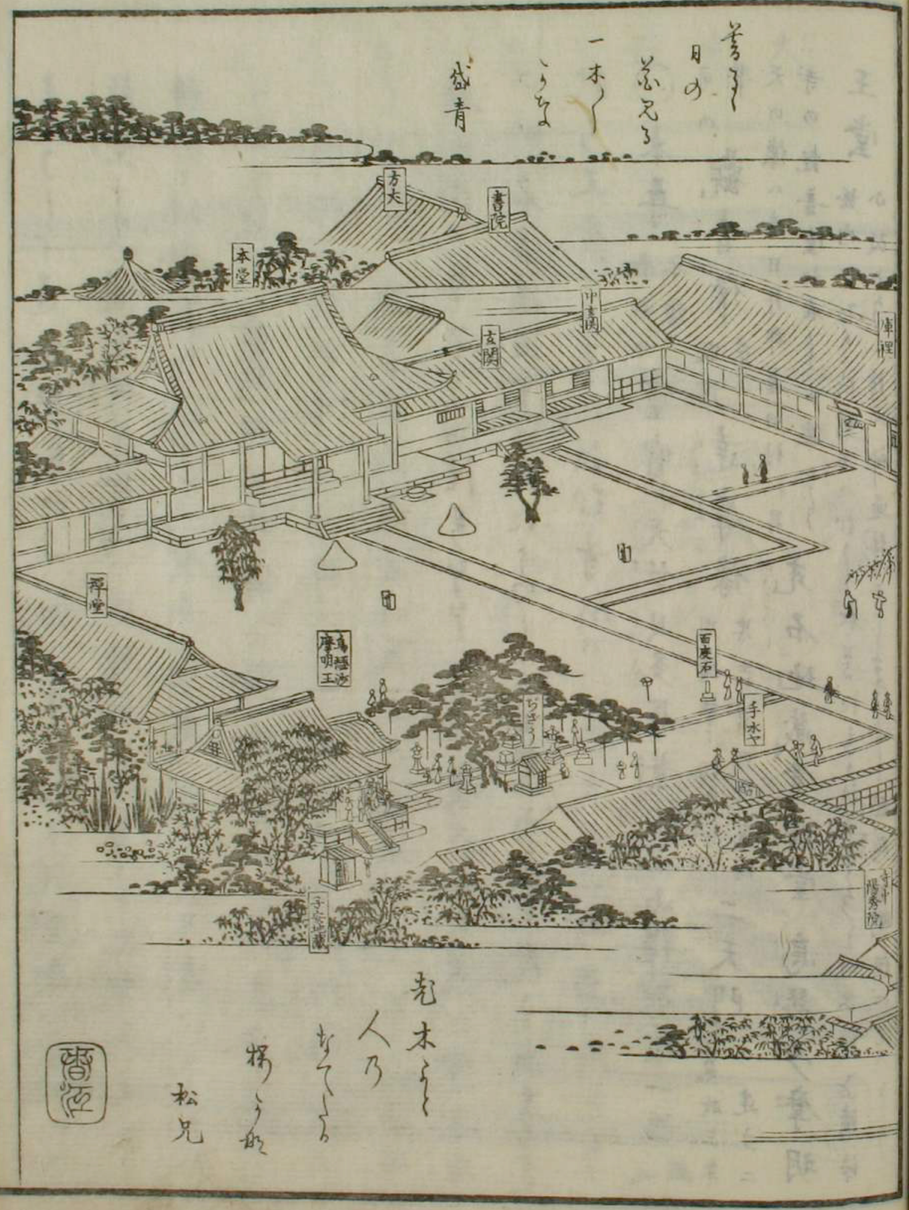
年ようやく民部省圖帳の殘編に葉栗郡極樂寺
號若栗寺寺領四十八束有餘以浦領為貢代法然上人
三夏不出之繩室也元享二年十月下吏日 史生源忠勝と
見えそうかく上人の旧跡なる顯然なればをき文政二卯
年圓光大師安居遺跡と大石小昭して門前に建世よ
いちじるさ 梵閣うり ○本尊 阿弥陀の立像うり 靈寶六字名号 法然上人
のお筆名号は下に弥陀如来雲中にたゝせ給ふ彩像を
画きて為父時國母妙海菩提源空と誌し給へるを
佛若栗の鄉に安置せし本尊 立像阿弥陀 元祖大師供養念佛寶珠石 若栗の鄉より傳
来の古物なり
地蔵堂 塔頭松林院慶安元年の建立うり 曹洞宗
興國山大光院 同町西側にあり 慶長のきづめ 従三位中
将忠吉君清須御在城の時雲門寺よりうつる慶長の誤にて
寺を建立旧名雲門寺と号しを明嶺和尚を請じ
て開山となし給ふ和尚ハ武蔵國の人にて清善寺の住持

大光院

好悪萬般因
呼思月花禪
室両相宜月
花興盡人歸
去花月領閑
落後時

大津常辰





大光院烏瑟沙摩明王



きうしゞ道徳堅固みて眠る事をなまじ昼夜をうゝ次
編坐して道を修しけるバ道徳顕いて萬〳〵死期を志ら
種〳〵此霊異を示して慶長十四年二月廿八日遷化すうし
ける　東照神君明巌と帰依しめし　忠吉君も因て
く帰依しまつるに厚く御しますに清次に招請し給ひ
しとぞ　忠吉君薨逝去の後大光院殿とゝせ八代明
巌和尚が奉ることもさて慶長十五年の冬迂府
の時名古屋日置の地にうつして日置山大光院と改号し
けり又今の山号に改む寺伝ハ　忠吉君の御寄附なり

○本尊　釈迦の木像　霊宝　天竺貝多羅葉一枚　出山釋迦像一幅　兆殿
司の筆　観音像　牧溪筆　達摩像　周徳筆　忠吉君の御寄附　二天門　寛政三年の建立二
天の像ハ春日井郡鹿田村仁昌寺の観音堂に在しを古像なり　光石地蔵堂　牌堂　烏瑟沙摩明
王堂　境内にうつし此明王ハむかし小牧なりし頃金剛寺に在しを織田信雄神通傍ら

毎月廿八日を緣日として參詣の諸人群集とうすう又一切下部の諸商ともしせり大悲願ある佛うれハ婦女子の參詣こゝに多く堂の傍より松杉大樹林の おのづと 塔頭陽秀院 大光院二世大庵の声 石地蔵尊 陽秀院地内にあり 子嶺奥の建立なり 腫物其外一切の諸毒を祈願すれハ時ならず 容易く 時ならず 応ぜざる事なし 依て諸人絶ることなし

大光院山門聯語

東海禹門登者悉是魚龍頭角南方佛刹到者那夥鳥窠布毛

大光院觀花

老拙生涯作嘗懦世間名利兩虛無僧房日暮看花去嘯咏胸中与俗殊

大光院の梅ハ盛なり

狂哥橘枝葉附錄

花よ名ハ大くさうめんの糸梅さらさらこゝも人を絶せぬ 栄都

大光院の梅ともよんで

醉中狂興集

咲うけしなの姿よ毎衣武者ハ一ツ木同前の糸梅うる 可吟

景陽山總見寺 同町東側にあり臨濟宗 當寺ハ京都妙心寺直末也 伊勢の國大島村よ安國寺 京都妙心寺直末 開山虎關禪師ハ元亨釋書濟北集等の撰者なり 慶長の頃なりしを内大臣信雄公ハ菩提の為に當國清須に建立し忠嶽和尚を住職なりしを 信長公近江の安土 奢賀により 本國伊勢の國大

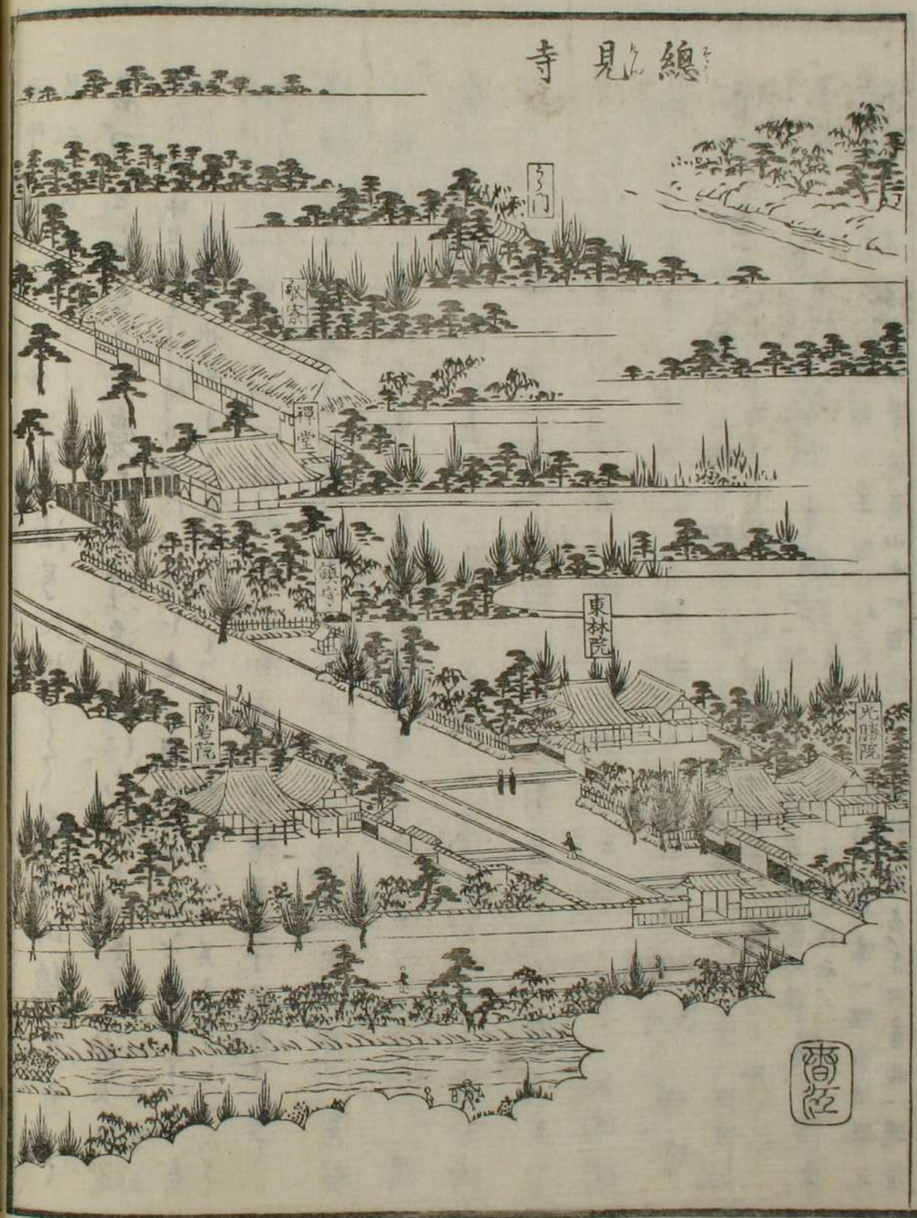
禪師を開山とし忠嶽を第二世の住持とす 公ハ法号に據て景陽山總見寺と名づけらるゝを慶長の頃遷府に及にうつさるゝ時山上に一堂を建て國中の郡鄉を總見するの意をとりて彼堂を總見寺と名づけらるゝ公薨逝の後其寺号をとらるゝ法号とハなりけり 第三世の住持闡山和尚ハ道徳才学抜羣にて源敬公浄龍遇殊に厚うして 武夜方丈焼失せしの貨財を賜りて正保元年十月廿四日再建造作竟とけるハ 源敬公来臨して宗門の耆老を召て詩を作らしめて賀しける境内に古杉樹多く茂り日をさへ空に參して禅堂ハ雲牀僧寮の石磬も自ら幽邃閑寂なる市中に称ら〳〵紀古浄域なり

○本尊 藥師の禅堂 木像

方丈 鐘樓 信雄公大鐘と鑄んしもの 騒乱の世なるにハ財用足らざるや 熱田社神宮寺の鐘とし 今にその古鐘をうけ用られしとぞ

林院 ○什寶 信雄公寄附の信長公画像信雄公画像一幅古法眼元信筆花鳥山水四幅信長公書状二通秀吉公書状一通唐


大書院
客殿
大玄関
庫裡
井
指月院址
暁臺
天明五乙巳六月二日八
年相國信長公の二百
年にめぐりきたりけれ
ども遂見禅寺に
職法供養うけれ
かにおこなひ
ふ碑少つゝ
まうでて
人の法
いろいろも
なみ


總見寺
山門
歌塚
禅堂
鎮守
東林院
光明院
陽岩院

総見寺閻山和尚の古事

戒夜和尚の方丈より火ゝゝ上りしに弟子共走来て和尚を乞ふに火焔の中に趺坐して曰ふる夢に汝を待て曰天示火災三四更忽然行脚可憐生尋常惨似把茅漏と作して結句いまさるに大雨去きりに降ぬ猛火忽消けるに

烈焔堆中夜雨聲



法眼梅山筆



けるに時庫裏よ安置せ韋駄天ある大の法師と現ゝて火をうせきぬ小杉戸の画龍ゝぬけおて雲雨を施せゝゝ奥も道徳の加被力冥助を仰ると希代の霊應ゝゝ

此法いに火伏せゝゝゝ又曰ふ此韋駄天ぎいに灵像ゝり

画十六善神同十三佛画像所
沈香の枕秀吉公作安土竹
の額此額八世にして繪馬
尹六世白翁和尚の拳擬
枚拳に遑
添ず器

富士山觀音寺清壽院 同町西側にあり山城國磯磯の三宝院の派
尊富士權現ハ 本
神の神職此地に勸請して造営
林此城主牧与三此處
七度ゝ詣此志願を發
つゝの晩年に及びて
社ゟ詣で其願を
ゝぞ信長公家臣村瀬左馬助の
て大園坊といひし大
せ其子宝壽院 國君ゟ當社の地を

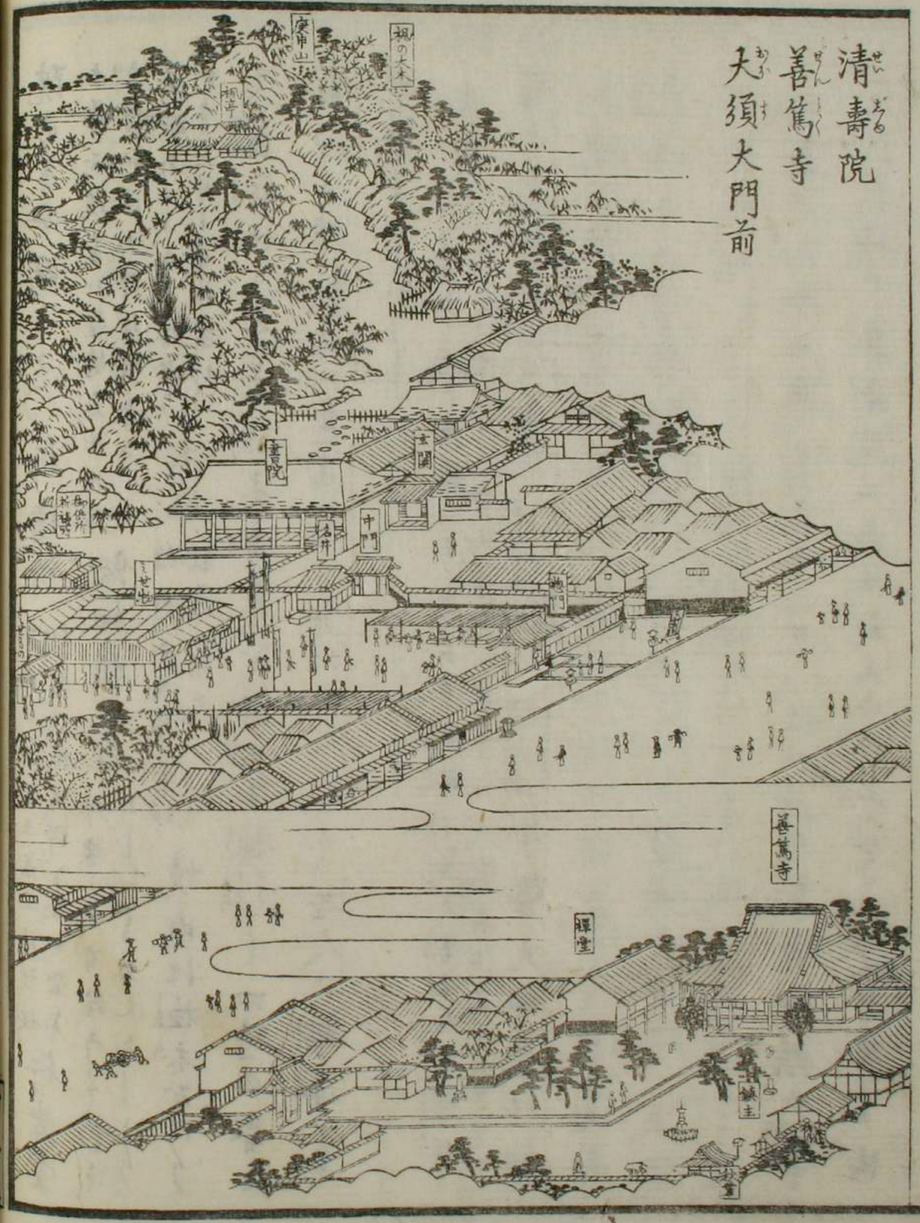
院の号を賜る ○祈禱所 本尊不動明王藏王權現俗
本尊正観音ハ聖徳太子此作
安時弘法大師修行者を
靈驗あゝゝ像
創年六月十一日神樂
て盆詰にゝ
當社清記又ハ並居見
ゟ絶ゝ

那古野山 清壽院の後園に
北野山真福寺寶生院 同町西側にあり真言宗元本寺
主從三位慶會行家の子能信上人の開基
大須庄北野村 今ハ美濃の國ゝ屬
神君此命にゝ住僧堯遍
南朝の正平五年十二月十三日 後村上天皇御祈願の綸旨
を賜ひ 東南院二品法親王の令旨

行者理源大師と合せ祭る 行者堂
飯綱權現社 神像六尺有餘
稲荷 金毘羅 菅神
秋葉 福天
境内に柱木
ゝ奇草を架上
排列 四時の春を
ゝ絶ゝ
ゝ居見
ゝ

本尊不動明王藏王權現俗
行者理源大師と合せ祭る 行者堂
生簀 苔連怪石擊廻る
面影 其傍に足ゝ小山之
言宗元本寺

清寿院
善篤寺
天須大門前

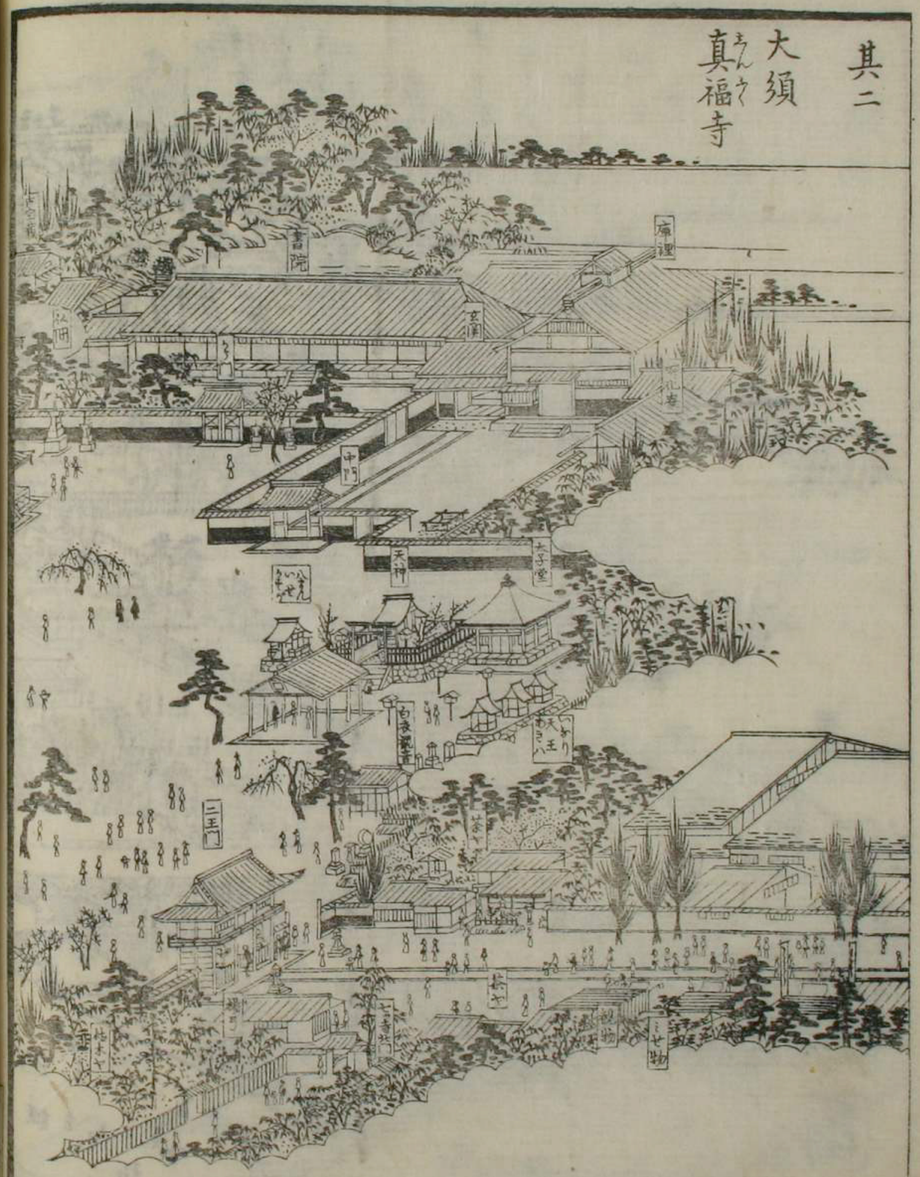


清寿院
大蔵ゟ東
ゟ西やう
して
盛青
夕こゝや
すめ
ゝくむ
竹の
中



其二

大須
真福寺





無所得

江天春色禁煙霞
梅柳見香簪外斜池上
雙飛先汲水檀中灌
器好供花太平時節
隨寬法安樂心身屬
梵家瞻仰觀音大悲
力無遠恩澤幾年加

真福寺に
牡丹と
池亀の
泳ぐ
也有

灯の影や
ふるふる
と
ゆの
むし

宇文和元年　勅によりて松は國四天王寺に正觀音の像をうつして當寺の本尊とす　因に　天皇の皇子玉御門二品任瑜法親王第三世に任職として御ろがみ給ふ　勅願寺なりしが中世に騒乱に衰廢と信長公燈明田となりて北野に地を寄附ありしも累年の水災に湮没とゆゑ今のかへ遷されしとぞ　郡史　二忠と並ぶ眞二八奈良の東大寺三八紀伊國根来の中性院の法脈三流あり其一ハ伊勢國多氣郡安養寺最雲和尚より相承一禪宗師の弟子佛通禪師安養寺に住おはりし時日ごとに神告ありて觸穢をさけず一枝に大神宮に詣ふでよと夢をのこ夫を改めてもとのごとく大神宮に詣ふでよと今明星に茶毘しべし八其餘風の沙門なり　佛通禪師遷化の時密教及び禪學に大須に古写本に書籍多くありて彼經信上人へ附与とぞ今兼集春の部に落花をきゝてよめる歌ありと雪

○本尊　正観音

大須奉納馬の頭

五月十八日馬の頭八信長公桶狭間の合戦ふ勝利しまゝて一國の主町ちまを建び即日清須の城へ馬を乾そちもちねも従一まゝし金風の押移ふり今を庭下む感ふて奥田ふかき多〳〵又馬の塔馬の靈そまゝて靈文字珠に我ふの金韻ひふ仰ふ



其二

十八日馬の塔まで　翌十九日礼馬して
町ごとに種々の工夫を
凝らし互に輸し
合ふ音の趣向とおし
町ごとを終日徘徊す五十
人百人二百人と町の大小
によりて多少ありまた
かの茶番狂言の大仕懸
などのもの今その一を図して
大意を示す



四天王寺のおもなるもの　二王門　五層塔　文政年中の造立にて古例に
ならふ　木像なり　安置せる霊牌に明王八弘法大師
の作むね　古図在大須に有しと古像
五智如来八新作ゆえ木像なり　三十三所観音堂　大日堂
聖天堂　不動堂　灵佛にて世に北
野不動とも称す
鎮守天満宮　氏神像ハ近年二年乞請太宰府より御自
筆に画せられ北の御方及び娘君へ送られ給ひし画像ゆ
えて天暦年中北野御鎮座の節神殿に納置ありしを
後醍醐天皇御崇敬のあまり当所大須の地にむつ
つし御建立ありて舊社と今も北野山と号し大須と通称すハ此國にかぎれり
二月廿五日寺子供大文字を奉書に一筆宛書院の窓
より小屋観しむ此日桜天満宮ともに八幡伊勢春日竹三神
ともに稲荷秋葉天王の小社側にありて境内
きわ賑口乃諸小商人の目を驚ろかす　境内
芝居及び見世物小屋小数軒ありて年中ゆ興行

絶事多く府下勝地うづ銃中五月十八日八
町こう馬の塔を李納して彰粧の奇記見あの羣集
又四万六千日此ら語ぐ衆に境内よ溢ら斗その賑ひ
うり又堂内に徹るまを多く掲て筆〳〵の雅致奇巧と
爭へるも自う慈眼視衆生諸人結縁せ方便あ〳〵し○霊
寶牛王 天竺靈山の牛のひとう 一代宝物しも経あ為 心經 二巻 弘法大師の真筆 瑚玉集 天平十九年に書写せ 唐土高名う人 宝生院の名ひう〳〵 空也誄 天治二年の書写源為憲 牛王經 一巻 牛王儀軌 世に稀う経文ま〳〵あも 書也 七大寺年表 永禄高元年の書写後 羣書類従に入〳〵う 新修往生傳 仁平元年の書写藤原宗友作 高野大師傳 覚平 の作続羣書類従に入〳〵う 新修往生傳 仁平元年の書写藤原宗友作 高野大師傳 覚平 七年写 東大寺衆徒奏詰伊勢大神宮記 文治二年写 祕藏寶鑰 応安五年写 弘法大師行化記 貞和二年写 聖徳太子傳暦 観應元年写 倭名類聚抄 弘安六年東寺知足院本求法第子大照写す 擲金抄 弘安元年 の古書ひう 其ら白拍子玉王が注進状あう 此和名抄關巻ま 後七日御修法記 正應四年 宗可写 權律師 寛信授灌頂於両人記 元應二年以吉祥圓寺上人御本求法第子大照写す 擲金抄 弘安 写後世の節用集 のぬき書ひう 覚洞院僧正入壇資記 應長元 寺結縁汀雑記 永和二年の写汀灌頂ひ二字 年写 徳治元年東 を一字にて 写三寶院印可略日記 元亨三 集 永享五 年写 孔雀經法 正中二 年写 遊仙窟 文和二 年写 韋律通致韋 第二 文保元年東大寺 大法師類心筆 結縁灌頂私記 貞治六 年写 如法尊勝記 保 六年法眼 寛信筆 正應記 元應二年求法 第子大照筆 灌頂應徳記 應 仁三年宝生 院住持有覚筆 西 院傳法灌頂記 文明十年権 僧都廣誉写 應長元年具支日記 應長元年 栄海筆 應 長元年於西阿弥陀院汀記 文和二 年写 請両経支度并巻數案 永 五年勝 覚筆 新樂府畧意 寛喜二 年写 仁王経法 建徳二年 妙然写 本朝文粋 十四 の巻 の闕本建 保五年写 同書 同巻の闕本正應 元年藤原清範写 同書 十二の巻ひ闕本奥書う〳〵銭錐の 銘ひう て添布の印行本と異る 表白集 延文元 年写 文鳳抄 弘安元 年写 麗氣制作抄 康應元年 寂後写 醍醐 寺結縁灌頂受者記録 嘉元二年 快四写 本朝詩合 文治二 年写 明文抄

正安元年写 御産御祈目録 嘉暦元年八月写 法師頼心写 弘法大師傳 應安八年写 尾張國解文 正中二年八月写 将門記 兼徳三年正月廿九日写 近世稲葉通邦模写印刻して世に流布す 口遊 源為憲作 弘長三年二月五日写 近年摸写印刻して世に流布す 阿弥陀經疏 嘉保二年写 新撰朗詠集 建治元年の奥書 聚分韻畧 享禄庚寅の印刻本あり 類聚神祇本源 應安五年の奥書あり 古事記 奥書に借請親忠朝臣一本吉田大納言定房卿被呼聖之間休家君本書写之止之云々本居宣長が古事記傳及び平田篤胤が古史徴問題等に引用せり 扶桑畧記 古写巻物 神祇秘記 三種神寶の傳 群家諍論撮要 表紙に本朝無双大日本國現報善悪霊異記 巻物關本中下二巻あり元孫書写とあり 類従本に見えず 東大寺古文書 数部あり 本朝神社記 神社の本縁を記す 類聚既験抄 神社の事實を記す 天照皇大神遷幸時代抄 巻物元集の原本なるべし 斎田祕釋見聞 巻物続羣書類従に入る 斎田講式 巻物続羣書類従に入る 神皇正統録 続羣書類従に入る 古證文寄進状 寛元三年同四年尾張俊村が田地を寄進せし始めを記せる文書なり 凡當寺より五百年已来二百年已往の證文数十通あり 藏書天平年中の写本をもって数千部の古書籍又弘法大師興正菩薩の真蹟南朝帝王の勅書親王家并公卿将軍家の制札等おびただしきものにいたるまであり

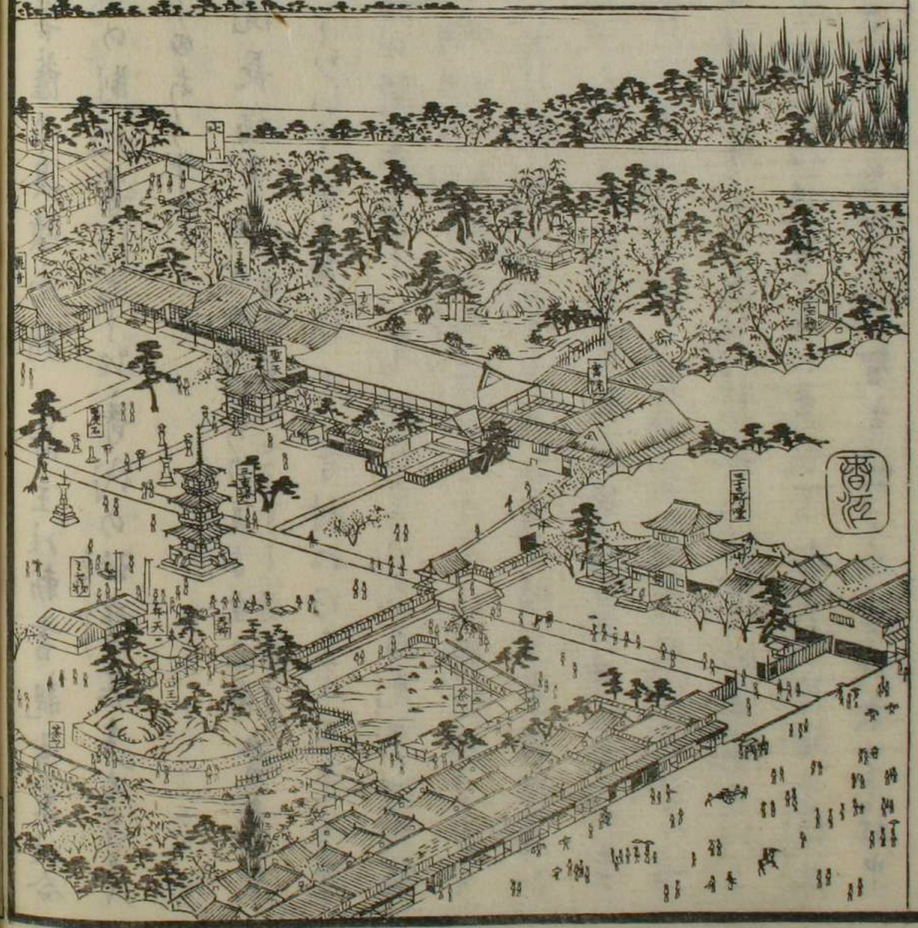
稲園山正覚院長福寺 同町西側にあり真言宗京都智積院末寺七ヶ寺の一に通称す 當寺ハもと正覚院といって中島郡七ヶ寺村にあって天平七年行基菩薩の開基なること 光仁天皇の天應元年河内權守紀是廣（河内國錦織の人也）秋田城介にうつって任國にありしが 舊里にのこせる幼児光磨七歳に成りし時父是廣を慕ひ任國出羽に下らむとせしかど 猶重く煩いて身はうごかぬその時父是廣彼任終ってかへり國もどりが萱津に宿りて我児みどりを遺し悲歎のうちに正覚院へ来り住僧智光に逢いて幼児が片時の養生を祈りを乞ひしかば智光憐れみて寺内東なる林中

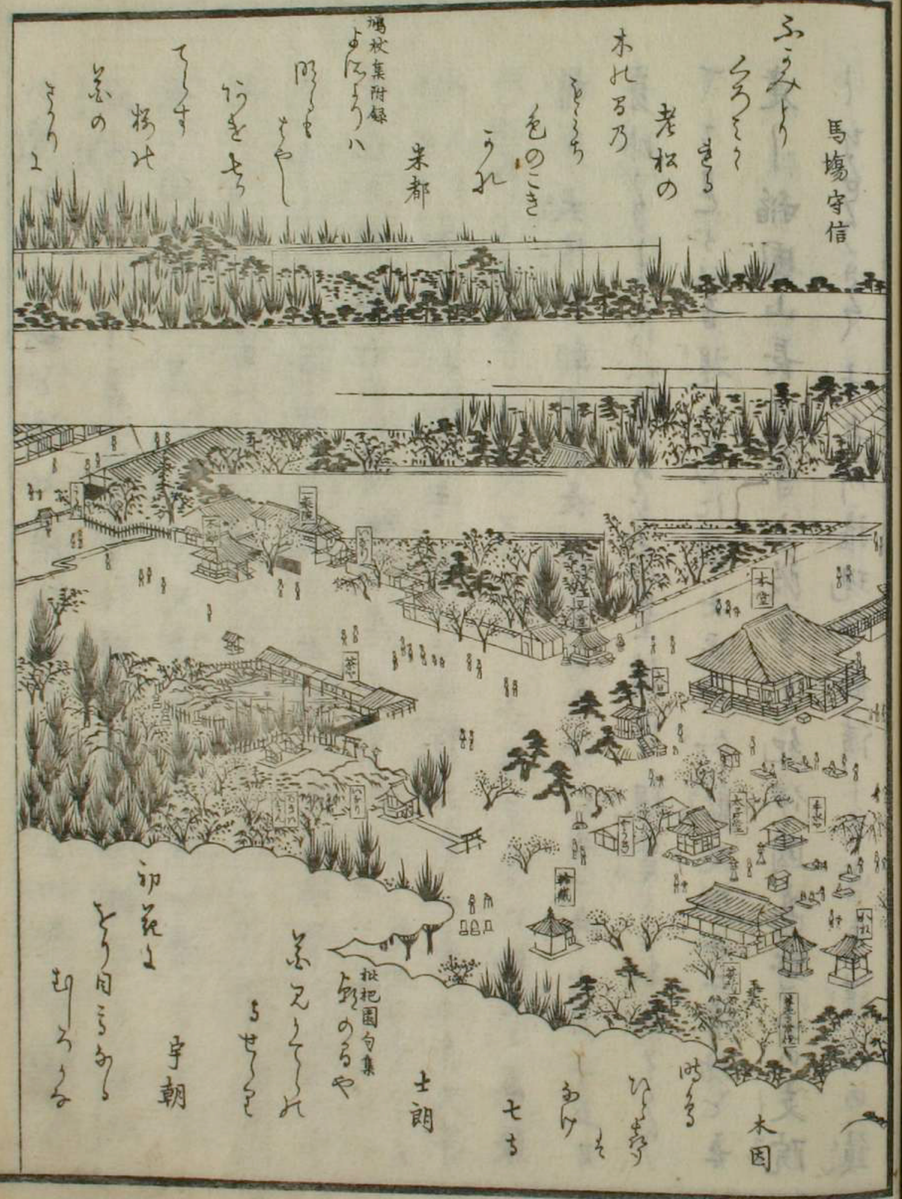
七ヶ寺

過長福寺賞蜑
絲海棠

山口良由

清音樓詩鈔
名花安在五雲端
似柳枝〻倒拂欄
香傍金爐飄淨域
色侵玉塵助清歡
空中濤起衣疑濕
春半雪飛風不寒
更禮竺王深洞裏
徘徊都作白衣看





小壇を封じ地を清め薬師如来を壇上に安じて却死
返魂香〳〵る名香をたき児が面に掩ひ忽蘇生し〳〵ば香煙
児が面に掩ひ忽蘇生し〳〵父子名乗る事を得〳〵りさて
かく〳〵みな愛慕け情を語らひ〳〵〳〵て全〳〵死せ〳〵
うばふ〳〵〳〵正覚院に葬を追福の為に延暦六年十二月
七區の佛閣十二の僧坊を建〳〵〳〵り（七歳の七児うみに七區の佛閣を営みたれ）
七ヶ寺〳〵かく〳〵て仁和三年七月の水難天慶四年の兵火等
にあひて堂宇衰廢せ〳〵を 六條天皇の御宇尾張
権守 大中臣朝臣安長寵愛の女子仁安二年六月十五日
身ほう〳〵うばむまうで夫豊後守 親實〳〵もにまうり
てそれが菩提の為に彼七區并伽藍及び十二僧坊を再
建〳〵稲園山長福寺と改号〳〵紀伊國高野山の支院
〳〵なりまうさて十五所権現を勧請して當寺護法の鎮

祠〳〵ふ〳〵又安元元年正月より治承二年八月まで〳〵に安長
一切經を謄寫〳〵輪藏を建て納め奉しかば建武年中の
兵火に寺塔悉く焼失せ〳〵ぬ清須并住人鬼界孫太郎吉
久（法名宗敬）天正十九年豊臣家の命にまうて寺を清須にう
つ〳〵大塚村性海寺に住僧良圓を中興開山〳〵ぬ〳〵と云云
十六年今の所へうつせ〳〵なり〇本尊 阿弥陀佛服立観音
堂（正保二年の建立正観音及び二王の像を安置す）聖天堂（延宝元年の建立地蔵及び
十王堂（十王の像ハ小野篁の作）影堂（慶長年中の建立にて鬼
輪藏（奮発ハ廢〳〵て今ハ全部ハ負享二年此所へ移す）彼大中臣安長
（寄附の一切経ハ全部ハ残闕数巻なり其時の
古写にて甚奇品なり就中経唐櫃一合今に有〳〵て蓋に十六善
神の絵を附まうむ古雅なり又其経奮附につき五箇條の請状を
其蓋に書志侭ぜ〳〵左のごとし）
勧請 謹請 鎮守十五所権現大明神御寶前
一 後々将来寺家不集来者獨竊不可開唐櫃事
一 後々将来雖族縁眤人不可奉借出他国他境事

七寺
境内汁
茶屋
池面の
夏景

一後々將來於國中雖爲書寫奉讀一度一合之外
不可奉借出多合事
一後々將來寺中居住僧奚天比一年一度可奉于
施事
一後々將來寺中僧他人語竊不可借出事
右事爲躰雖似鄙見夫以世間作法或爲火難或爲
飛敵或爲盜失其恐尤以切也若國中郡内爲書寫
奉讀有奉請之望人者奉請一合令遂其一合之
後又可奉請一合如此用之一度旦多奉請之
事永以停止何況於他國奉請哉若皆此狀之人者
可奉任大行事　契田大明神八劔大明神也神
威嚴重者人誰遠之作願紅中所載三世十方諸如
來護法聖衆伏乞諸天善神住劫無跡諸冥衆龍神
罰神同心令知見證明給謹起請如件
治承二年戊午八月　日願主惣大判官代散位大中臣安長女弟子氏氏
勸進　僧榮叡
大法師　榮俊

三層塔　元禄年中行信良快の造立　國君ならも資財を助力し給ひ京都より
安置し國主長に命じ五智如来八大菩薩の像を脇らしら語中に
夫より九輪かゝやき事にをゝし長崎より麒麟太
の竹をもとめられとゝのいて息ちやう業師歯地ふまえ檜端に一本
頂上にをゝ好るのほかに也。

鎮守十五所權現社　天満宮と合せ多分社前の石燈籠
天和二年吉澤檢校弘都に弘文院林春常の銘文を彫刻す　辨財天社
都名ハ盲人まで平曲をなす毎年十月十五日客殿ゟて庚下の按按勾當
納す鳥居の額ハ朝鮮人雪月堂が筆なり

其外稲荷八幡宮等ハ小社又護摩堂太子堂大日堂ゟの小
堂多し境内に白櫻紅楓の古樹多くして淄流韻士婦女僧
俗の隅ゝ春を探り秋を訪ふ名區ゟて又東南の池上に
ゝ茶店檐を並べて水面に枕を過客の餘興に弧羞を供する
實に府下尹一の佳境ゝいふべし　○靈寶　藥師如来立像　唐佛
不動明王立像　智證大師の作　如意輪觀音画像　弘法大師の筆　獅子頭　佛立
春日の作　地藏画像　唐画　塔頭一乘院　當寺中興二世良祐建立
靈松山善篤寺　同町東側にあり曹洞宗　隱居所となり
基ゟゝ善根寺ゝ号し兼栗郡行ケ鳥村　春日井郡三淵村正眼寺末　當寺ハ寛永年中ゟ岡
ゝいう玄翁和尚の流下なり　今ハ美濃國に在
にゟて曹洞一流に擴出ゟゝ終に慶絶ゟしを文龜二
年越前の國永平寺ゟ正眼寺ゟ宣雙和尚
ゝ請ゝて再興し　天鷹和尚の流よ汲み夫松山善篤寺ゝ

改号〳〵大倫和尚を開山とす其後天文年中清須にうつし慶長十五年再び今此所へうつせるを累年ノ兵乱ニ廃絶せり〳〵今ハ末寺も十二宇ばかりに衰へて大寺とゐふ○本尊釈迦の禅壇

宗源山浄久寺　善篤寺の末寺にて清須にありしを即ち当寺の山寂首座の開基にて〳〵多く年中ありしを時室町将軍家より寺領寄附

本尊釈迦仏恵心僧都の作　霊宝　景清守本尊千手観音　悪七兵衛景清自ら矢の根に彫〳〵小仏あり景清の末葉古渡に住せしが家に持伝へしを此寺に寄附せり〳〵〳〵住牌もありて水月景清大居士建保二甲戌年八月十五日〳〵又〳〵あり

持永山光真寺　浄久寺北隣にて善篤寺末之僧元興の開基にて松寿院といひしを室永二年十月今此寺号に改む

本尊正観音行基の作　薬師堂　なり八天仲堂と号す凶悪の士ありて某師信仰の人ハ此寺に参詣すべからず若し参詣せば其人ハ地に倒れ足早に立退きがたし〳〵人ハ地に倒れ苦痛を訴へ其師を称しうやまひ信伝にきゝ〳〵某師の身がわりに立ち給ひ〳〵

西本願寺掛所　同町西側にあり　伊勢國桑名郡長嶋門徒蓮信証院蓮如上人にもとゐ〳〵長嶋より杉江村に一寺を建立〳〵上人の末子實悪を招待して住持〳〵願證寺と名づけ伊勢尾張美濃三箇國の小本山なり〳〵天正二年甲戌九月廿九日門徒の一揆によりて已に廃寺となれり〳〵を顕如上人内大臣信雄公にねがひて願證廃寺を當國清須に再興なり其のち又桑名郡本願寺村に願證寺を再興〳〵清須の寺と通所〳〵ふせしを慶長御遷府の後通所を今の所へうつし〳〵詹号にて〳〵と改む〳〵願證寺と名づく〳〵寺領享保年中本坊懸所より境内に松の大樹数株ありて春日遊人絶えず○本尊阿弥陀如来

二子山の古跡　西掛所の地むかし二子山〳〵ありしが山野うちしほ後清須の時地をうりて今ハ平地となれり

七面山妙善寺　橋町西側にあり日蓮宗京都妙顕寺末寺　天和三年僧日春建立〳〵慶寺ありしが其寺

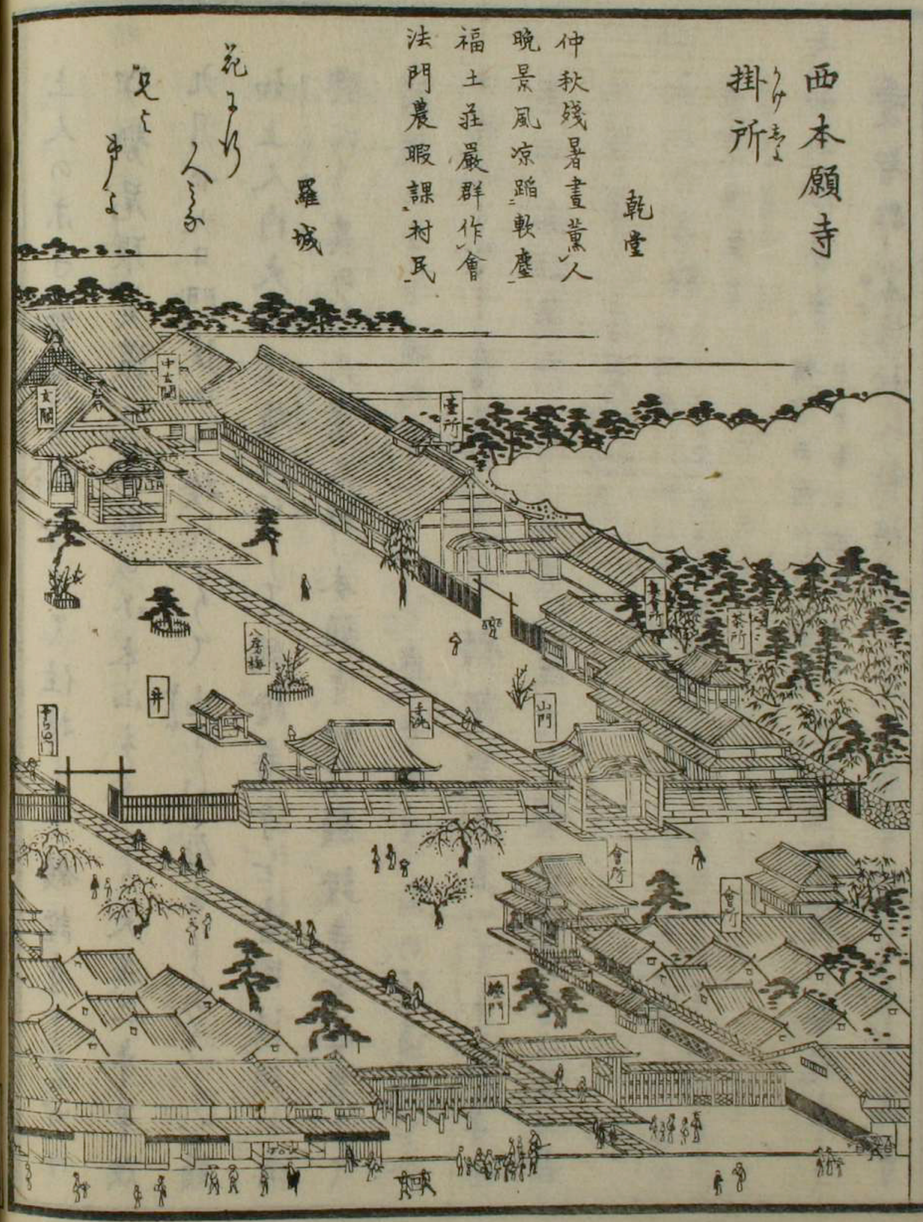
愛智郡岩作村に妙禅寺と云ふ

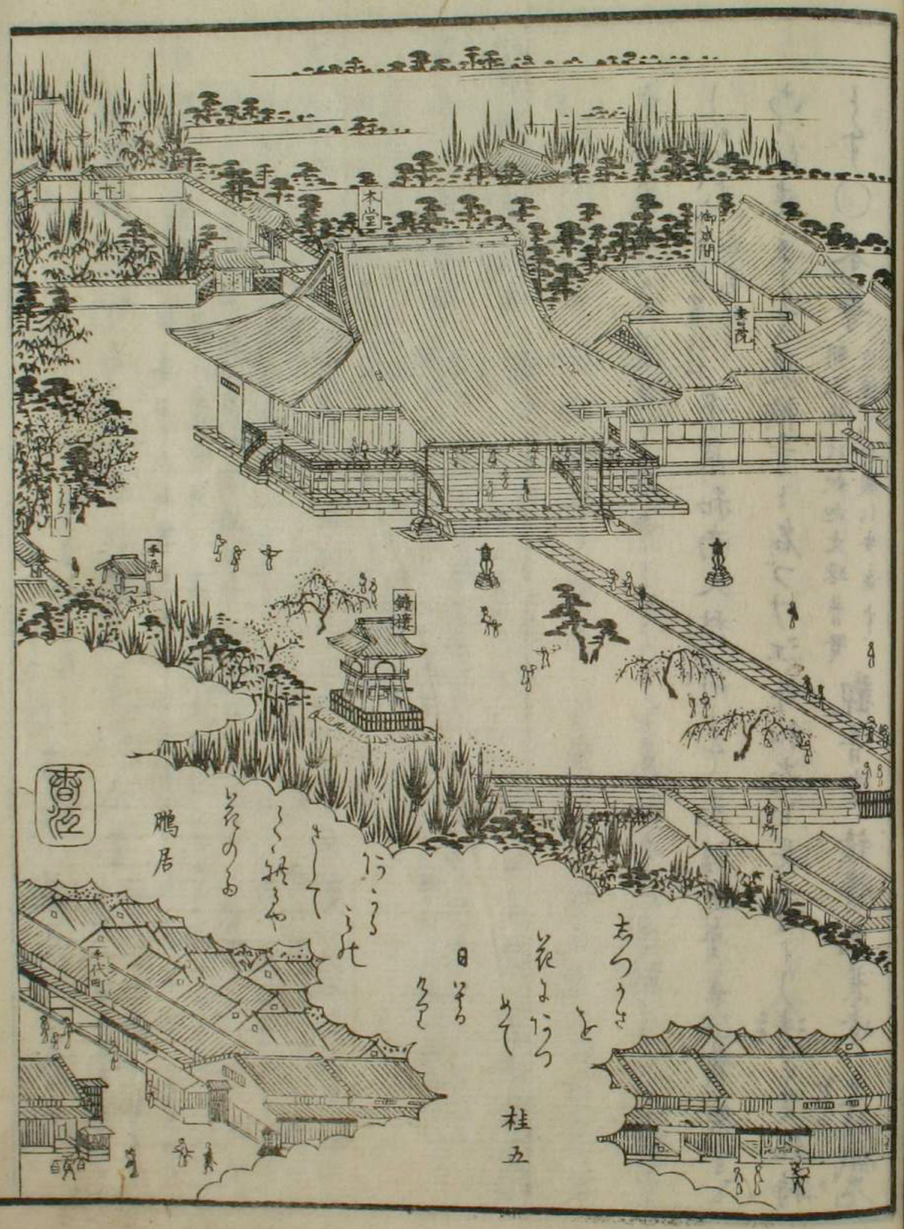
西本願寺 掛所

乾堂

仲秋殘暑晝薫人
晩景風涼蹈軟塵
福土莊嚴群作會
法門農暇課村民

羅城





桂五

号をうつし妙善寺 吉使にうつして名づく延宝九年
國君御信仰ありて今に泰昌す○本堂 七面の像八善尼長吹が
彫刻して天和三年安置す
日置八幡宮 妙善寺北西隣之 日置村北にうつる名かく呼ぶ 延喜神名
式に愛智郡日置神社 本國神名帳に從三位日置大神と
記せるハ此社也 新撰姓氏録に日置朝臣 應神天皇大山守王之後也
とあるを見るに八日置朝臣ハ祖神に 應神天皇を奉祭歟
千本松 日置八幡宮の地をいふ 信長公攝津國合戦の時日置八幡宮に禱
勝利を得たまひしかば報賽のために松樹千株を
植らるしより今も此名に古松数多のこれり
無量山延廣寺 橘町の西側にあり西本願寺直末 常川掃部延慶の開基なりて
寺号ハ伊勢國長嶋にあり元禄六酉年うつりきたる
護國山東輪寺 同町大木戸際の西側にあり黄檗宗山城國宇治萬福寺末
この草創を即非禅師を開山とし法嗣なる牧大休なん住持と守
大休ありしが退去して廃寺となりしを萬松寺住持末剃して高顯寺
汲む 今日置にいふなり 千呆和尚又愁訴して元禄五年再び黄檗寺と
ともに建立して東輪寺と名づけ江外和尚と長崎より請じて住持
せしむ○本尊 明人作釈迦文珠普賢の像を内殿に安置す 観音堂 鐘樓 芭蕉堂 大施餓鬼

七月十五日ハ盂蘭盆會を執行す 時に名高きことにて盆中府下無双の群集なり
犬御堂 法浄寺華光院 大木戸の南西側にあり 真言宗大須真福寺末 開山僧無関 俗姓紀伊國高野山の人なり 出家す 修行ありて法國行脚して壽永年中此地に来りて身疲れ煩悶して息絶むとせしに黒白の二犬いで来りて僧の口よりきたりて草庵に水を浸しこれを飲ませ急蘇生して心身快然となりぬ此僧おもふやうハ犬ハ高野大明神の使者なれバ偏に明神ハ加護ありと且阿弥陀如来の夢の告ありしやうに艸庵を結び弥陀佛の尊像及び黒白両犬の姿をうつして妄亜して犬御堂と名づけしとぞ
真言古義に護摩檀側に置黒白二犬ハ弘法大師始入高野山の有二犬導引故に置犬像檀側に又後堂に高野四所明神の図に階下黒白二犬を画くハ空海弘仁中高野山を攀登る時二犬有て導きまつり後狩場明神と号し示す精舎建立ハ後鳥羽院の御宇なりと寺家の伝ふるうへ犬御堂も真言祭るをもてこれもし此為に本尊の脇士二犬を安置しとぞ山に住をり大樹の下に眠りしに此犬急に吠るを人に吠うるをうとくて引しりぞくを人犬を例して告しらせんとて疑ひて刀

東輪寺

東輪寺坐月　南源

東海早一擊蟾官開錢鏘無孔窶東海轉霜輪十方均普照露柱策脩觀虛空開口笑賓主會同堂松琴彈逸調

冬夾

俳諧古渡集
ふくらん　探丸
夕佃日



東輪寺
芭蕉堂新成
　壬朗

蛙なるも
みなやすみ
なりと
もの哉

黄山

人さこ
ゆふき
名比
ま小



を掘て犬の首と対葬せしに主首樹上に飛上り大蛇のごとく人と呑んと欲して
に噛附きうごく人も忠精と志ば以ていやまらず犬と敵害せんとすと悔かえれども
小寺を建立ちしばしば信用しがたき
鼠の説あり

古渡 當府あれてまく市郭の庄古渡又蒼渡ともかけり明月記云尾張國
蒼渡者往昔海潮没岸之跡趾也今赴東方之時自鳴身到於此云々
ゆえんなり

あへらしてなり 中略 古渡

明日香井和歌集

むらさきのその名かもらん

日本靈異記に愛知郡片蔭里ほど蒼本今昔物語に愛智郡片輪郷と
いふは此古渡の古名なり又一女子村ともいひしが富饒の
人七人のむすめありうち成長のもの七所へ嫁しのこり一所と二女子
村といひしを後世古渡村と改号す二女子以下が住しゆえ名とせりて
二女子村四女子村五女子村六女子村ハ見えず西南の方に今よあり又三女子ハ熱
楯村及小塚村 地内の字六女子ハ尤茶野村地内に字七女子今ハ小村
なりて戸口うく小塚村より支配しすべて七人の娘が在住せしゆえ名ハ今に
皆祇久政刺ら妻
うんぬん

稲荷社 古渡のうち犬見堂の南北西側にあり祭神伊弉冊尊倉稲魂命
天津彦彦火瓊瓊杵尊猿田彦命及び住吉四大神の五座を
國君圓覚院殿元禄二年九月十七日江戸四ツ谷御館にて
御誕生ましく稲荷を生土神ましく御崇敬あり

楊梅 参議雅経

らむ吉見刑部少輔幸和に命じて丹羽郡石枕村より
稲荷の社をうつしたてまつる 正徳三年四月廿五日遷座ましく
免許ありて

未社 山王社 本社の北の方にあり本社と同時
社 本社の南にあり本社と同時に丹羽郡二宮うつす
統て元禄二年九月十七日江戸四ツ谷御館にて
十日十二月 例祭 本社ハ二月初午日三月中午日四月上午日十一月
節分の日うつす 神主 安井氏 八日ほど山王社ハ四月中申日五条天神社ハ九月

五條天神 境内に楓樹多くうつして秋霜ふと漲
時ハ紅い二月の花を欺き観賞なのみならず雅俗遊人の
履歴日小絶ずまく古社の奇観實に府下の声一あり

その外の末社殿宇ハ図上に

龍洞山大泉寺 稲荷社の南にあり曹洞宗當所
法大師の作 **観音堂** 正観音 洞仙寺末貞享三年の建立
の寄附にて愛智一郡の諸寺併せ
凡余社木像うつす

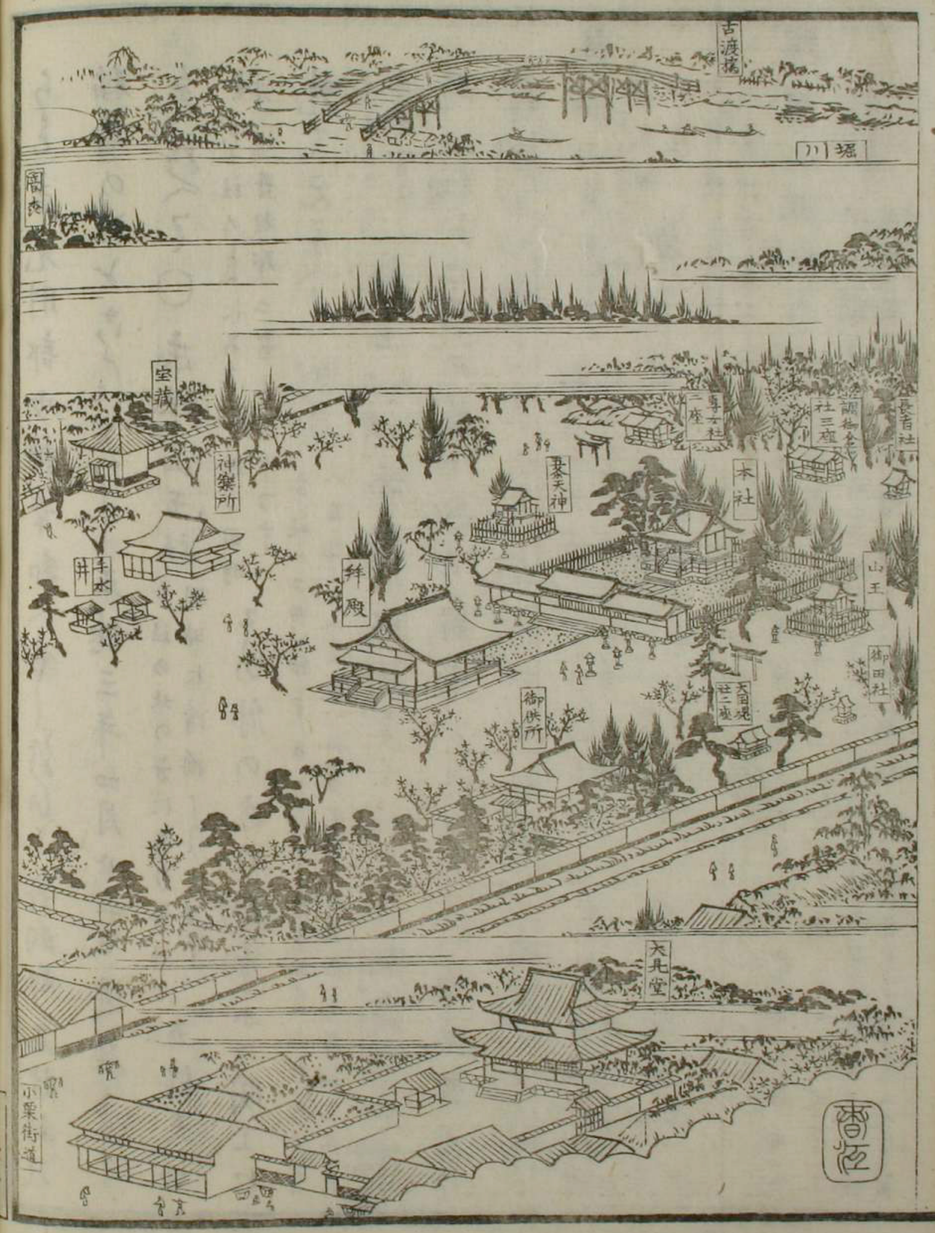
本尊 千手観音 恵心僧都の作にて源頼信ら右大将敬物ごまで敬
代崇敬ありし木像うつす 又桃巌梅にて紅白さきて咲ける

瑞雲山洞仙寺 古渡のうち中市場筋東側にあり曹洞宗熱田の
法持寺末なり 玉泉寺といひしを寛文七年改号す
洞仙寺ともかけり

古渡稲荷社
小栗街道
犬見堂
古渡橋
闇森八幡宮

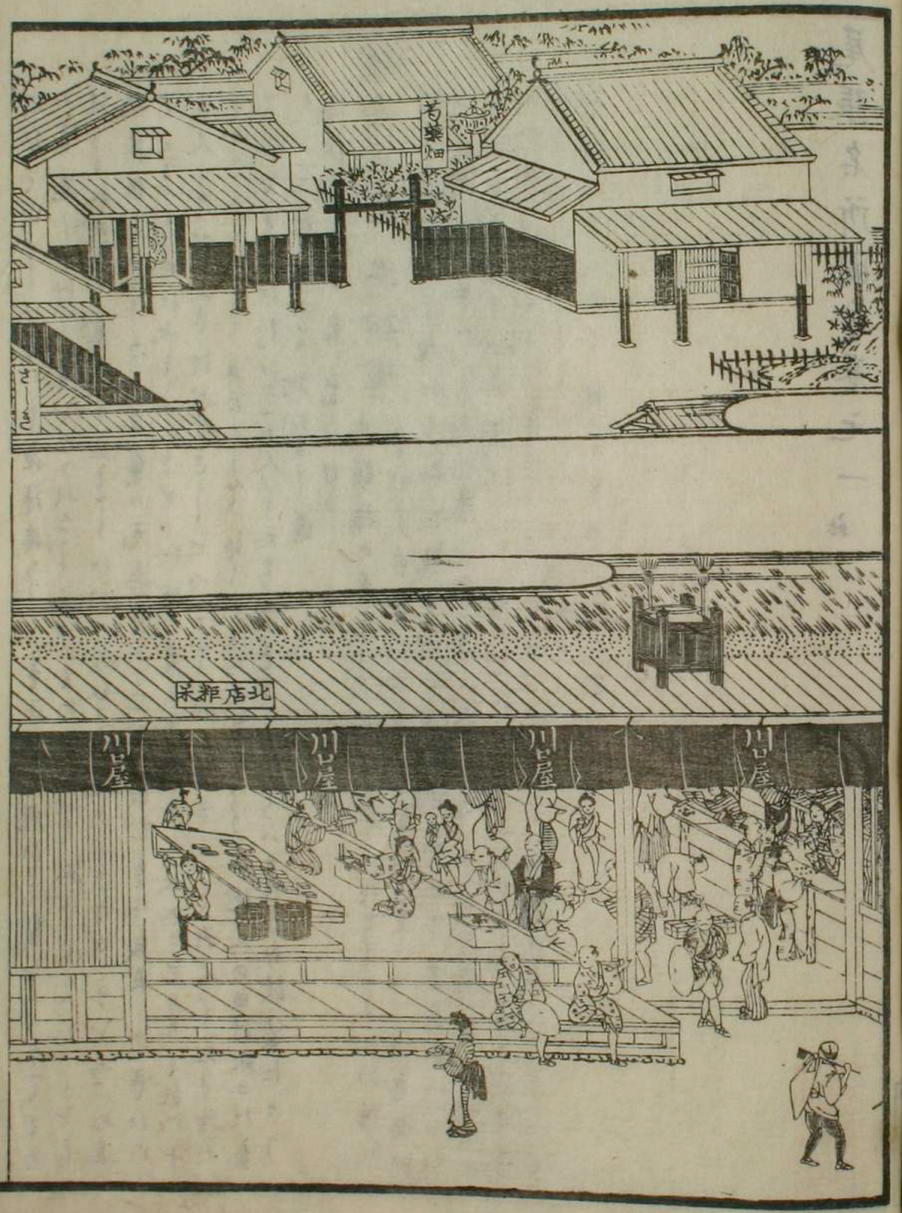
河村時秀

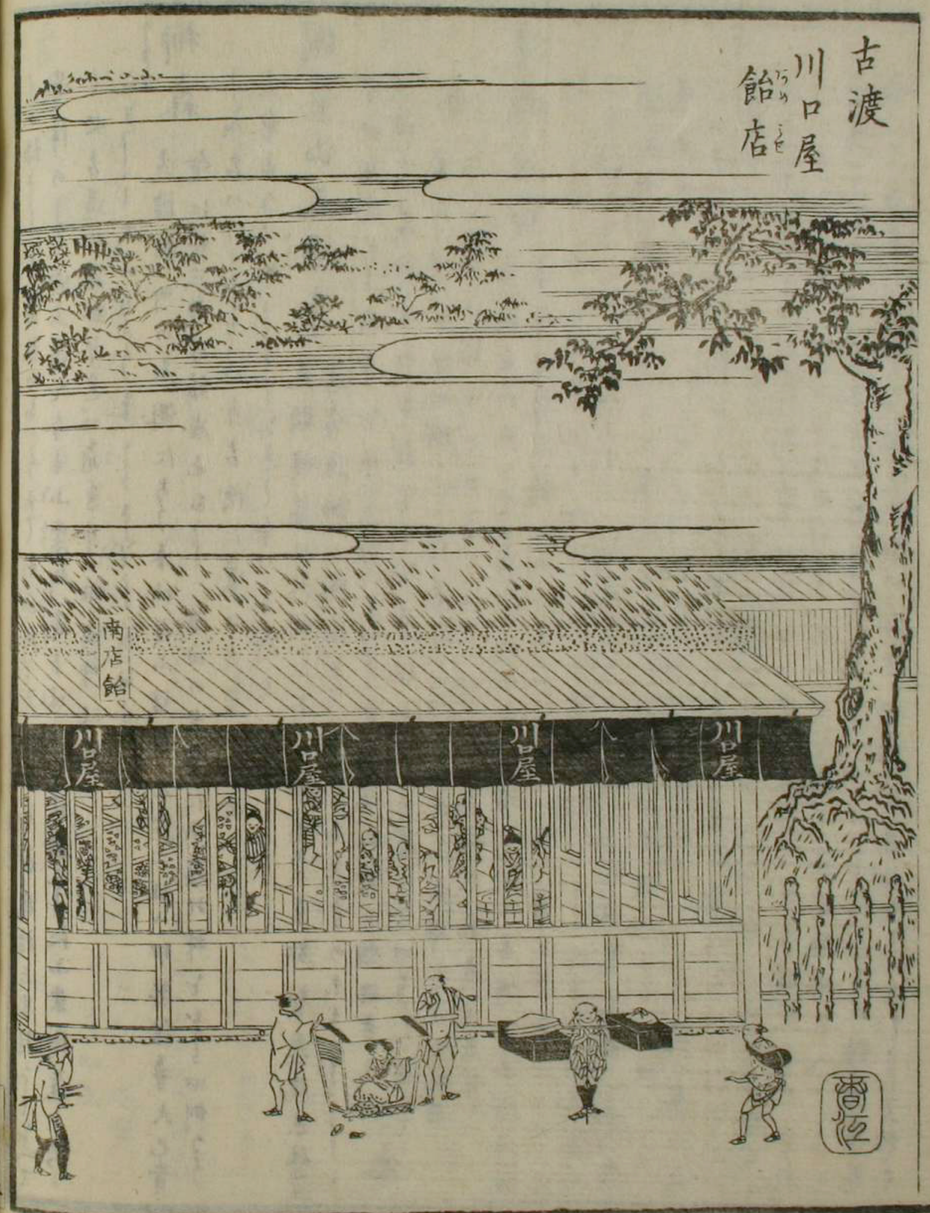




花ありう當所は城主織田備後守信秀（法名巖）まづしく（ママ）城を付しかど（ママ）氏寺の坂内八神城浩造營の時加賀家は善清（清カ）湯みて有しかど（ママ）
さはに彼國老横山山城守ふうし社
返ち（ママ）書（ママ）離多く氏寺に納へしうし
南方鐲（名古屋けぬき）足利義教公富士御覽の時奥田の圓
福寺に止宿在しに古渡の鍛冶鐲（けぬき）と
けぬきうと仰らるゝ家号ともうし白華隨筆に
志ともう
狂哥真寸鏡
圀田挺之が暢園詠物詩の古渡の句に人
姓南方鉱淬劔村名古渡自横舟と組れり
うつろへる人のなさけもいまも尚方くいても今はかへらぬ 木端
闇森八幡宮 古渡橋爺の北側にあり祭神 應神天皇神功皇
后也ゆゑ鎮西八郎為朝の靈と合祭うしうし 永正
十八年鶴見道親以下六人の僧俗力をあはせて重修す元
祿の比石黒某う母 ものむうし桂うまれ筆を終て月さへ
そへぬくうれ出表 そゝみ（ママ）でとそゞき神祠あり〇未社 春日社 稲荷社
古渡橋 闇森の西堀川に渡せる橋ニて古渡の舊橋ハ是にハあら
て近きほとり大御堂と稲荷の間に講に古き橋板の殘りてあり

營津のうへ通上道と今も山梨街道とよべて諸國へもに小栗街道とよぶ
ち必古道の通称なり是ハ尾多井雅經卿北通
らもしもあのあうし走（ママ）うし（ママ）
榊森 古渡新町の東側にあり本社白山媛命左右二社ハ伊弉諾尊大己貴
命仁和三年の鎮座也むし（ママ）墳
し（ママ）名つけし（ママ）ぞ比ゟ古渡に當のあ
直會表（ママ）ぞ（ママ）ぞ（ママ）今ハ
鳥の表盜人の表
國豐山元興寺 尾頭橋節北側にあり淨土宗京都智恩院末往昔
道場法師が開基なて南都元興寺の末ちなり（ママ）
中世衰廢ち（ママ）寺と牛立村へうつ
び（ママ）ふに慈阿堂のひ（ママ）ぞ（ママ）と享保三年再興して旧号に復す 本
尊 某師佛身体破壊して淨首のみ殘ち又境内
に古瓦と堀出ぢるもむ（ママ）れ元興寺の名殘ぇ
道場法師 古渡の出生ゟて南都元興寺の僧ゟて其傳日本靈異記
むにゟのうく且夫異記古雅ゟて
うく約ゟてこゑをゟす 敏達天皇の御宇尾張國愛智郡片穂里の
農夫田に水そゝぎけるに雷うゟて龍
農夫すきゟてうん（ママ）ゟ（ママ）ゟ（ママ）ハ雷ワいて
を入る竹の筒を淳（ママ）ゟ（ママ）ゟ（ママ）ゟ


北店飴米


古渡
川口屋
飴店
南店飴

收びて帰りぬ。其子鬼こゝに聞ひて髪をつかみてさゝげ泣ぬれば、母鬼もまた髪をぬきて泣ゝ悪奴が墓あばきて血をとらんといひければ、其奴が魂鬼のごとくなりて其髪ハ元息寺の宝物に収む。其子成長してまた母が寺田に水をそゝぐにぜに他の農夫多くつどひて水入さゝせざりければ十余人にて於ろべきにはかにして五百人にてひく。おの〳〵ぬき捨たて水を寺田に引ぬ。人〳〵おちおどろきて彼寺をさして髪〳〵道場法師〳〵名ありけり

鎮西八郎為朝塚

尾頸摘の東にあり。為朝ちゝに伴ひ〳〵ふるき古書に附見えたり。されど古書に隠れ住みけるを、後為朝の子尾張次郎義次、名のりて渡為朝の墓を築きしとあり。又牛立村元息寺の什文に付記にもとづきて論ずべし

